休齋閑物語 全

駿府 谷本堂

諸國物産図繪

平田 止水居士輯

基定 補正

阪書肆

駿々堂本店 梓

それ一休和尚は後小松院の二の宮にてましませり世の人の耳に
殘るる御歌にも後の小松の二葉と詠し玉ふも有けるとかや誠に
いとも賢くまし〳〵尊き高位をふみちらし大内をおどり出て十
宗をたゝ一目にうちみつけ達广宗となり玉ひて九年面壁を盗人
のわとの棒ちきり木と見立て御身は麻からはと共思しめさず深
世をひやうたんよりもかるく持なしよこしまなるとをきらいせ
玉ひ御心い賊や竹を二つにわりたる如く路人の口碑にあれば舌
の先の障とし侍ると仰られしはいよ〳〵有かたかりける御幼年
の頃より才智万人にすぐれさせたまひて諸國御雲水の間より諸
人を導きたまひます〳〵ほ一代濟度の御意のみに渡らせ玉ふ事
の咄しのふるき物ともの多きを見るにつけ聞よりけ拾ひ集めて
諸國物語圖會といなしふけるとかや

北水敬白

山居寂寥僧

聽松風

未須臨濟

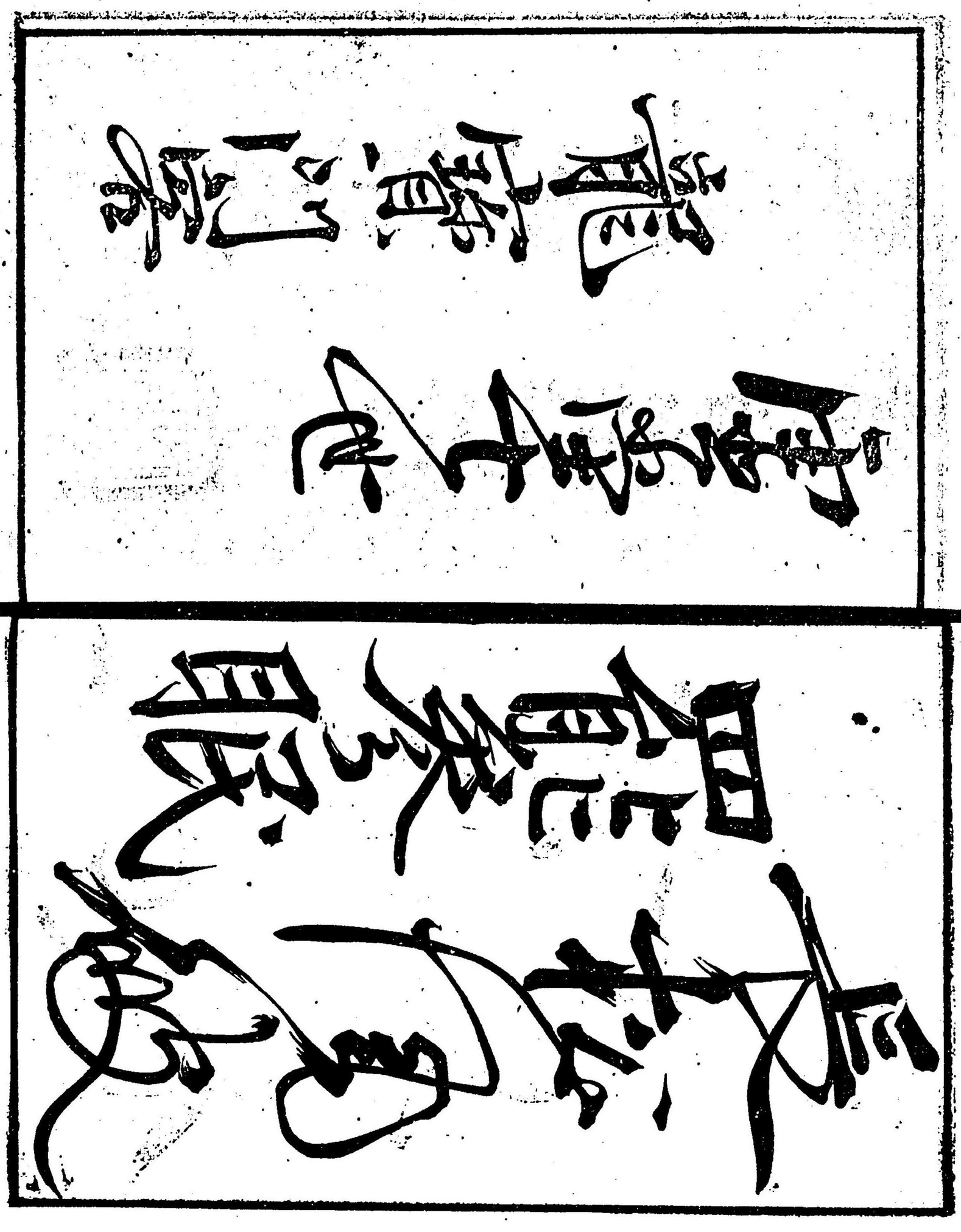
德山禪

一箇位山

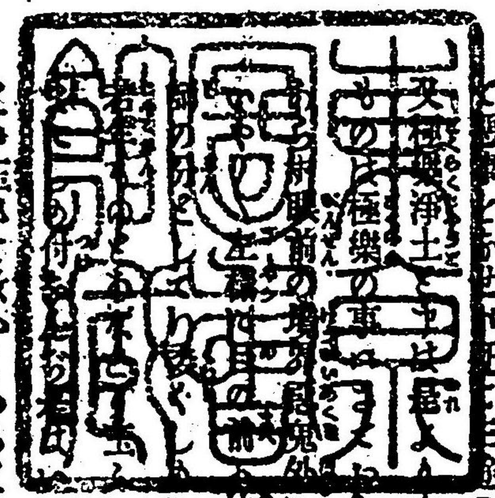
二十年

此業王文

了畢後



特12
431



○和尚若年におこせしより才智衆に勝れよく人を導玉ふ或人問ていわく何に小僧それ地獄極樂ゝ事ありげにいしかしながら死後ならでは證據なきよし承れるさもありぬべし若人あり

と惡鬼とあせり死ぬ生の大河死出の山などいふ難所と越てやう〳〵地獄に入とヤなりさて

又極樂淨土とは是人十萬億土とヤせゝ遥の道を經て參るとなれば我等がやうなる不達者

ものゝ極樂の車わき地ごくへも行がたかるべし此儀いかゞ一休おたへて夫地獄遠きに

村興前の增殖見覺外になし淨土といつゝ爰をさる事遠からぢとのたまへばこの者ヤやう

左樂寺の前地獄ごくらくありとのたまふとも顯ゝれて見へねゝ合点もかず小法

師の分としてより後ぐし玉ふ事成まじとあざ笑ふてゞヤける一休腹をたて扨は其方ゝ我を

若年ゝとあなどり玉ふかとて頓て一休繩をもちて後ろへまはりかの者の首に引かけ思ふさ

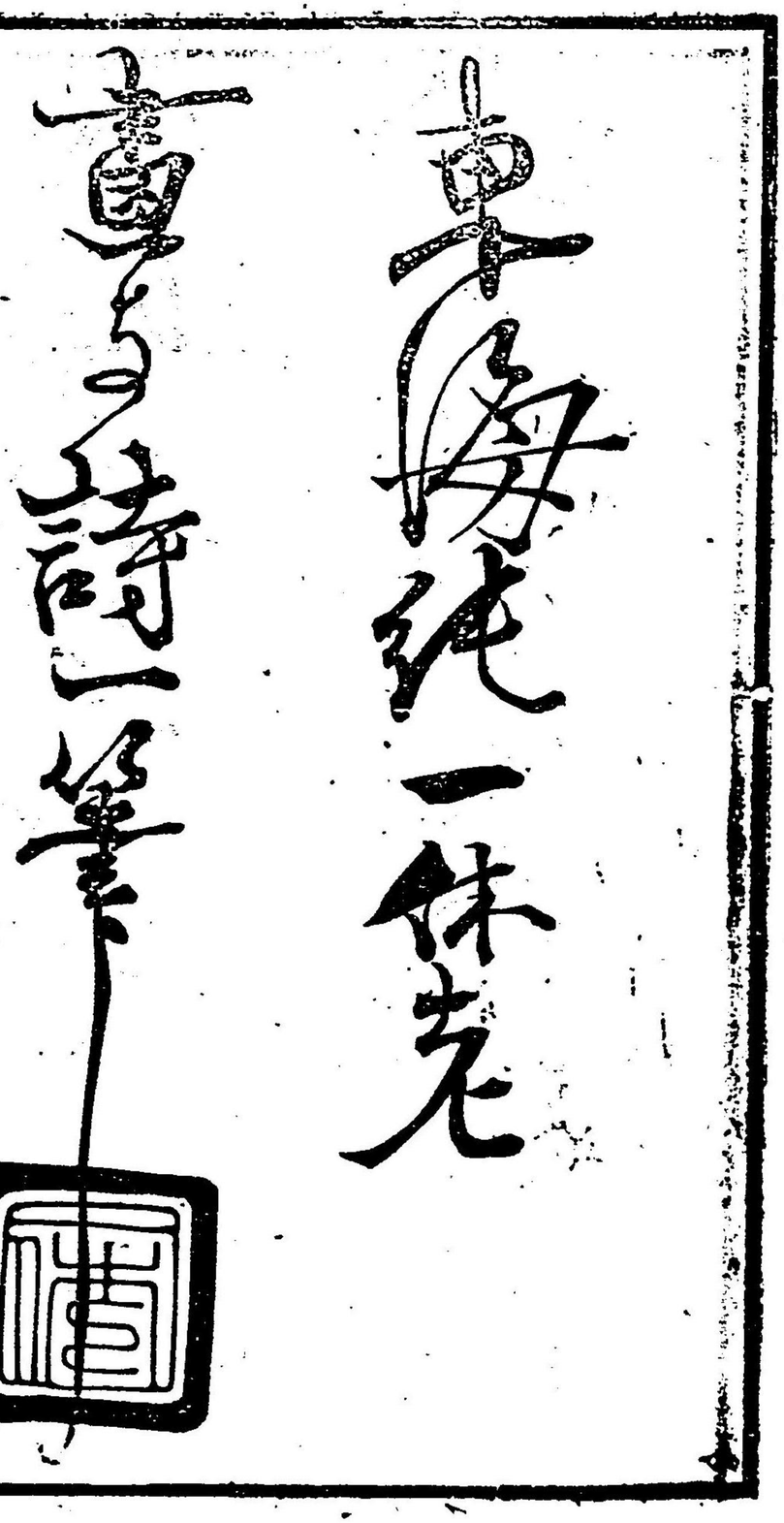
付おこせしより者氏かにとヤさるゝとき此もの合点去て尤これ地獄なり其ときさた繩を

ときゝ玉ひて汝かくあるときはいかんとヤ玉へゝ淨土なりとこたへ其まゝ合点してさても〳〵

小法師ゝ何のわきまへも有まじきやうにおもひあおどりしに幼稚なれどもかくのごとく智惠

ある事わたくしならぬ事なりとぞかんじける

○一休十一歳のときの事なりしが師の房他行したまひける留主の處へ余所より餅一ッきたり財



れば一休すこし割て師匠のかゝり玉ふに取出して奉る師もたうけ人にて滿月無片破闕と何為にかゝるとのたまへば一休そのころより智惠さかしくましませば直ちに返答に雲隱有是とてかの闕を出されける此心い滿月は丸くみちてかけたる處なし此餅も滿月の如くまん丸にてあるべきにかけたるゝいかにと問ひたまへば雲に隱れてこゝに有とこたへたる也師うち笑玉ひてさても小賢き小僧かなとて彼餅をみなたび玉ひけるとなり

○一休御諱を宗純とヤせしが別號を一休と名付たまひける或人きたりて一休と名付玉ふ御心いかなる御心得にて侍るやと尋ねければよくこそたづねめされけるさりながら一休にふかき心もあらざればかたりて聞すべきやうもなしとてかく

有漏路より無漏路へかへる一休

と遊しければ彼ものゝ扨もおもしろさふなる御歌や有漏無漏といいかなる事にておはしけるぞと尋ければそゞなる御拂子をとつて彼者の顔をなでたまへばいや何事をかなさるゝとおどろきたるばかりにて何とも心得ずとヤ一休が曰その何とも心得ぬところが無漏路なりいつとおどろきし處が有漏路なりと仰られければ彼俗肝を冷して有がたや卽時に大事をさとりけるとよろこびて扨御歌の一やすみとは心得ヤし雨ふらばふれ風吹ばふけとは何ある御心おて侍りけるぞされはよわづかの道のことなれば雨も風もいとふ事侍らずと仰られければ扨も有がたき御歌かなおそれながら只今さづかりヤせし心を一首ヤてみんとヤければ夫いきとくなる心ざしやとれたまへばかのものゝよめるは

うろとひろと一休ぞときくときは
十万億土すんさきとしる

と仕りければ一休きこしめし善哉〳〵とて尻餅ついてよろこび玉ひてかゝる例しもろこしにも侍りし事ぞ四休居士といふ人ありけるゝ山谷といふ人その四休の心を問ければ四休わらひて答ていわく

麁茶淡飯飽卽休
三平二滿過卽休
補レ破遮レ寒暖卽休
不レ貪不レ妬老卽休

とヤされければ山谷がいはく是安樂の法なりそれよく少ときい不伐の家なり足る事をしるは極樂の國なりと感じてしたしく語りて四休の心を得三首につくりうたひ樂しみしとかや其一首に

富貴何時潤二髑髏一
大醫診二得人間病一
守錢奴與二抱官印一
安樂延年万事休

と有りしによく似たり一休の心をとひて今其方の歌よむ事よと感じたまへば彼人ヤすやう一休の二字をたづねて四休の四字をしる事求めずして得を幸と註したりこれ幸なりとよろこ

びけるがかの四休のうち三平二滿とはいかなる事やらんとヤけれバ其方の内方よりとのたまへば合点まいらず見にくきといふ心かといへばいやさにわらずおとゞせのとなりとのたまへバ扨もめづらしきとかな誠よ三平ハ両の頬と鼻二滿ハ額と頤よさてもおもしろき事也そりながら女どもお聞せあゞ一休さまをつめりヤべしとわらひて仮りける

○和尚幼稚さときより常の人にいかはりたまひて利根發明なりけるとかや師の坊お參學なゞし侍りては一休の發明なるを感ヒ折々はたはむれを言て問答なゞしけり或ときかの旦那皮袴を着て來りけるを一休門外にてちらと見て内へはしり入へきに書付立られける

一此時の内へかゝのたゞひかたくきんせいなり若皮の物入るときハ其身お かゞらずはちわたるべし

と書付て置たりかの旦那これを見て皮のたゞひゝがちわたるならば此寺の太皷は何とし玉ふぞとヤける一休聞たまひされバとよ夜畫三度づゝばちわさる間其方へも太皷のバちをわてヤさむ皮のはかまをきられけるはゞにおとゞけられけるそのゝちかの旦那養叟和尚を齊によふとて一休も御供にとヤしかの返報せバやとたくみけるが入口の門のさへに橋わる家ありければ橋のつめに高札をかなにて太く書てたてけるは

此はしわたるとかたくきんせいなり

と書付る養叟和尚齊のヒぶんよしとて一休をめしてかの人の方へ御出あるに橋の札を御覽ヒて此はしわたらでは内へ入べき道なし一休いかにと有けれバいや此はしわたるとかなにて仕たれバまん中と御渡あれとて眞中を通り内に入たまへばかの者出合て禁制の札を見ながらいかで橋をわたり玉ふぞと、がめけれバいや我は橋いわたらず眞中をわたりけるゞと仰られけれバ亭主も口をとぢけるが何がな不審ヤさひとて又いわく凡沙門の形といつは忍辱二躰の衣を着罪障さんげの袈裟をかけてこそ僧とはヤべけれいかに小僧なりとて俗衣の出さち忍得がたくしとヤせば一休幼けれども歌一首をよみて答へらる

着てきたぞ本來空のくろ衣　そでなが、らで人こそしらね

とよみ玉へば旦那も養叟も手をうち口をわひて塞ぎかねられけるゞなり扨御齊を出しけるが今一度不審せバやとおもひ一休にいわざと魚類の膳をすへけるめづらしくやおぼしけひひたもの喰ひ玉ふときよ旦那のいへるは人しれぬ衣めしたる御僧のした、か魚をまねることとよさわひれければ一休聞たまひて口は鎌倉海道なれば書きも行きいやしきもバくとのたまへりこらへかねか、る物もとはり候哉と刀をそらりとぬきけるを一休すこしもさわがぜ歌か味方かと問ふ敵也といふしからバ通す事ならずいや味かさなりといへバ其まゝけへん〳〵とのたまひてくせものがとはるゞとて只今餓死闕かすはゞれるゞといひ玉へば旦那も和尚も此小僧の

口にいかれまじとて言葉あく舌の根をふるひてやみぬ

○十七歳の御とき引導し玉ふ或とき下賀茂邊を通りたまふ折ふし途中に死人あり一休たちより引導をさづけ玉ふときに或人見て愚かなり小僧死人にひかづて何事をいふたりとも耳に入べきやいかにといふ一休答へていいく芭蕉無耳雷之音聞即自出す此文のこゝろは芭蕉夫はせをといふものゝ耳もなく目もなけれども芽を出さんとおもふときは雷の音を聞て則芽をいだすとなり斯のごとくの非情卿木だゞひとでも因縁加合のことわりありいんや人間におゐてをや彼是もつて同事あると返答したまへばこのもの實もとおもひけん一言の答へにも及ばず立さりけり

可笑記曰達广大師はあしの葉に乗り佛の道をかたる紫野の一休和尚い世の法議をそしらず興がるおどけをなして釋迦をしかり玉ふも助んための本心ゑゝに蜷川新左衛門親當ていふ武士弓馬の道くらからず殊に佛道は祖師禪宗とまなびて座禪の床に入おしへの道をしりかねて一休と問答なしけれども終にいひ得ず秋の夜長きつれ〳〵に友とかたらひ酒興し實大唐ゐは五月五日 橘 を酒に入て飲めば老せずといひて賞 翫 そる由さもあらむ先身の年より若く見ゆるゝ此水の德なりといふに同じ水鳥一座の中に三十ばかりにたらぬ男白髮まじりに生しいかにと問へば口かしてき男酒を飲ねば腰がふたべになる菅なれとのたまへばこそ霜のみふれとへらす口のまなき盃中場へ紫野ニ休あん内しきたりて是いよき所へとおさへぬ盃三ッつゞけてほしさらば慮外としたひところを蜷川よき不審と一滴七十粒そもさんか拾る事いかん一休こたへて法界に手向く蜷川また法界がのひべしや一休また法界が飲まじきといふかと答へしにつまりそれゝしらずと閉口して大笑になり着ようとかけたれども浮るゝ小歌もふるめかし今の問答のおかしきに任せ善惡五戒の講釋せひにとのぞみこれかゝつた結進さかな音曲と無理に引さて上座になをし高座は火燵のやぐらを取出し行燈つり上がうべをかたひけはじまるを待に一休くわん〳〵としてとても興がる慰ながらぼさつゝ三十三身を現じて其機にしさがひゐめに法を解せたまふ普賢菩薩は江口の遊女と變じて凡夫にちぎりをこめ十羅刹女は太皷女郎となりて貴聖人にまみえたまふ愚僧はその菩薩には あらざれども しゞしはそのながれの末を汲て川柳花は紅の色衣はなしすみの衣の袖をかきよせまづ鼻をかみせきゞらひ二ッ三ッ四弘誓願の文を唱ていきをたゝし白紙卷て取あへずさゝげ奉る諷誦と名付讀上る

夫つら〳〵おもんみれば分段同居の風俗と陰陽をもつてし有爲の掟は夫婦をもつて義理とを鳥に比翼のかさらひあり木に連理のちぎり有いんや人倫におゐてをやひそかにおもへば容色たをやかにして梨花の露をなひがとく心中あらはにして行水の物に隨ふがとく天生の美麗世にたぐひなき西施が容貌貴妃が顏色一ト たび笑ば百の媚あざやかに見もの思ひを動かし聞人心をくだきぬらむ春の朝にはうめさくらの下陰にさゝずみて三味線

大德寺境内塔頭霊林院

肥後

もゝくさきの
くもゝ
ゆ
ゆ
ゆ

をひかし秋の夕べ蘭菊のまがきに立もとをりてなげぶしを吟じ翠帳紅閨に中には枕をならべしさゝめ語紅粉翠黛のかほばせ二世のちぎりを結ぶといへどもかぎりあるは浮世のあらはし生者必滅會者定離のおきてなれば一人もとゞまるものなし誠にこしかたを思へばいたづらにくらし空しく暮すあゝくやしゐかな悲しい哉今このときにより苗を種ずんば何の春かはだいの花をながめん早く無明の酒の酔狂をさまさんにはしかじと先一座の小歌をしづめてのぞひとまろの講談なりまとゐこれ希代の發菩提心あげていふよたらずこの善根にこたへて現世にゝ長生をし金銀米錢澤山に當來にゝ極樂に往生し、だいにしてあそばんのみにそ酒宴講中　徹白

次に經文をひらきて頂き一調子あげて大悲經第三に曰く佛阿難に告てのたまはく若衆生あつて涅槃をねがひ求めずといへ共しかも佛のところにおゐてもろ〳〵の善根を種つれば我說ところのこの人かならず涅槃を得てんといふ

○上京に糸や由右衛門といふ者あり内々一休和尚の答話よきと古今無雙のよし承はりいつぞゝ紫野へまゐり何にてもめづらしき事をうけたまはらんと左なくば此方へ齊にゞ入べきとかねて思ふ折ふし和尚旦那かたより歸りたまふに途中にて行合さて〳〵一段の處にて御目にかゝりしものかな序ながら明日少し志す日にさしあたり候御坊さまへ御齊を進じ度候兼々御寺へ伺公いたしゞべきとぞんじ候處幸是にて御めにかゝり候必々とゞせば和尚心得ゞ候さりながら宿所はいかんと、ひたまふとき此人宿は室町通そんじよ其處なりといひてわかれぬ一休心得さて翌日早天よりてしらへ彼ものゝ宿を尋ね行玉ふに此者もすてし心あるものにて店にちいさき鉈をつりて置けり小きなたを釣たるはこなたといはん事なりと判じ頓てうちに入たまふがまた座敷の口に犬のかはを敷たり和尚ざしきを通らるゝときに亭主出合さて、今日ゝ折ふし路次あしく御太義の御事なり御足よごれ候はん洗足まゐらせんとゞ一休いや〳〵只今かはを越へてまゐり候也忘すこしも苦しからぢと仰らるゝに亭主扨こそ早一ばいくわされたりと思ひさて御膳をこしらへ出す和尚ふたを取て見たまへば何れにも小糠を一はい入たり一休さわらぬ体にてゐ玉まふ處へ亭主座敷へ出れば一休さて〳〵今日の御志は三七日にて候かと仰らるゝに亭主いよ〳〵感心しやがて和尚座を立玉ゝんとするとき亭主ゝなほもこゝろを引んとて錢百文ととり出しこれは今日の布施にまゐらするぞり是へとらずして居なから御請あれとゞに一休きゝもあへぬ心得ゞ候是ぞゝにてうけゞべしさ候はゞ投ずにこゝへ賜り候へとゞさるれば亭主いよ〳〵感じ扨々御坊さまはきゝおよびたるよりは答話僧にてまし〳〵凡人ゝしばらく思案してゞ出すにいまだ舌も引入ざるうちに早くも斯く仰らるゝ古今まれなる御坊さまやとかんじける

○和尚さる川邊を通り玉ふに女のはだかに成て居けるを見たまひ陰門をめざして三度禮拜してすきたまふ折ふしありあふ人々是を見てさてもあの僧ゝ狂氣か出家の身とし女のはだかにあ

りさるを見て三度ふし拜みてもかるゝいうなる事やらんいかさまにも狂氣なるかさもなくばかゝる事ゝし給ふまじめづらしき事なりいざ近づきて子細をたづねんげにもつともなりとて我も〳〵とあとをしたひやがて追付そでを引御坊たゝ今女のはだへを見て禮拜し玉ふはいうなる因縁やらん聞まほしく候但し佛道修行あゝる事やましますゝいうに〳〵とせめかけて問ければ一休うむの事にもおよび玉はず斯いひすて、過玉ふ

女とゞ法の御くらといふぞ實

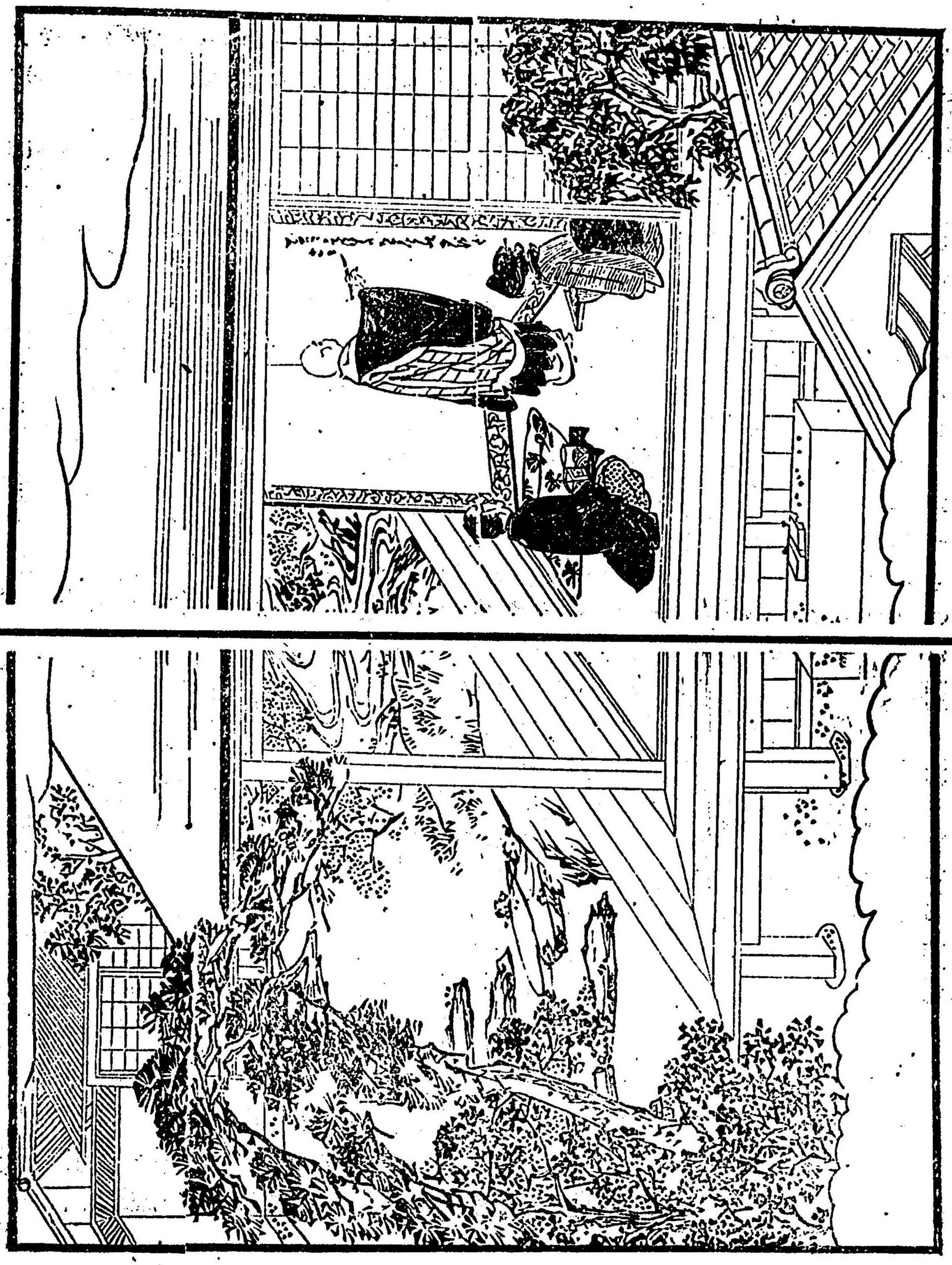
しやかも達磨もひよい〳〵と生

といひすて、こそ通りたまふいかなる坊主やらんとふしぎなすにしる人ありてあれこそ一休なりといひし人ありさてこそ彼僧ならでゝかやうのといふべき人ありとも覺へず殊勝やな世の中の坊主ならば女の肌を見たらんに心ちよげにねぢかへり〳〵目もはあたで行くやらんかく禮拜なして通り玉ふこそ有がたけれ實も女の胎内より貴人高位も出玉ひ諸宗の高僧たちも出らるゝぞかし人みな尤とかんにける

扨今晩は先夜酒宴談の次をとき中なり講談興起の義は瀧福文にも聞へたとふり酒宴講中逆修現當安樂のため一つには笑のたねとしてつとむる所の説法講談で侍るわる經にもし園の中林の中もしい白衣の家是中皆應起塔供養とゝかれてかやうある在家俗諦の白衣の中にても一偈にても演説するときいたとへばけがらはしき所も則三世の諸佛來迎影現の道場といふ物なれゞ信心を決定して聽聞あるべきとが肝要にて侍る次に愚僧義あんよもしらざる愚金坊主ものしりがはに子細らしきと必きやうまんの心を起し玉ふか大悪人じやそれはなぜにと不審あらん涅槃經には依法不依人と説てその人にはよらず能所の法によれと教へ玉ひ成實論には經を引て我意にあらずとも各正理に順ずるをば聖教とすべしともあり狐か衣を着たりとも法の道を説よき所あらばうやまひつゝしんで聞取べしとも釋したとへゞ未曾有經像法決疑父母恩重經等を佛説にあらずといへどもいかにしても其理佛の御心に叶がもるに諸〳〵の祖師これを用ひて證文とするとく我等ときものも教化し説法せんときは佛も我も敬ふやうに沙門を供養せよとのべ玉ひぬれば信心の手前からい慮外ながら某を末世の佛じや。とも思召がよく侍る扨ゑゝ今披露の經文は訓讀のとく大悪經第三の卷なり物じて經を講ずるにい來意釋名入文判釋などいふとほざあれども淺學のそれがしなれゞ万端さしかねたゝ經文の表によつて談ずべし今の文の意は釋迦如來阿難尊者に對して仰らるゝやふい末世の衆生等下根下劣にして直に涅槃にいたるべしとの文でござるが佛のみもとゝいふい釋迦はすでに入滅なり後佛の彌勒ゝときいまだいたらず何くをさして佛の所とさだひべきとかもへゞ文字はこれ法身の氣命といひて遠からずこの金句の説法を一たびきゝてながくわすれぬ阿難尊者如來滅後に獅子の座にのぼり一代の法藏を結集し一千の阿羅漢これを具多羅葉にしるすはゝこしも佛説にたがはずこのとき大衆ふたつのうたがひをなして如來かさね

て世に出玉へるやまた阿難今爰で佛と成玉ふかと偽をもつて談したるところの經は義をきはめ理を詮め生を度し物を化す中にも大悲經別てしもしやう千万なり此等の文義を談する此處が則二乘開會の卽世道場まつたく諸佛來現の所といふものなり寶より涅槃をゞ求めざれども座興にもおどけにも名利にもうそにも佛語論談をきく心が其まゝ善根を種るといふものなるべば佛說にいつはりなく未來成佛は歷然の同埋なりさて逆修い七分の善德まつたく得て現世安穩のわしたにい榮花のはるをうたひ命期臨終の夕には法性の月を詠せん事又うたがひもおき經論の旨にてござるほどに賴もしくおもひたまひてねがはくは眞實に涅槃をもとめ玉ひて一通のなむあみだなむ法花をとおへ玉はゝ往生成佛は決定でござるまづこれで經の句はさらりと聞へましたアゝねむけが出たそふな

○下立寶堀川邊に道意とヤものありわるとき一休を齊に中入よろづはなし終て道意ヤされけるい和尙さま某は姫一人もちていがさんぬる春の頃隣町へ緣に付ヤいがやゝもすれゞ姑とさからひて歸りい親の身よいへばなんぼうめいわくにぞんじ色々異見ヤていかへしいを度々におよびい和尙さまは智者にてましませばおもしろき因緣ばなしいはゝそとに物語きかせたまへかしよく覺おき娘の諫言のためヤ聞せおゞすこしい聞入とも侍らん和尙さゝ玉ひそれがし一とせ修行のみぎり關東にての事なりしに是い姑女よわしくわたる嫁なるがたちまち其むくひ歷然なりし事わら〳〵かたりヤさん下野にてけ事なりしがしらとめ久しく病みておやみけるを其子深くなげきて醫師をよび療治しけれどもさらに驗なく日を送りけるがあるときいしのヤやう此病にいぶたのきもと煮てあたへなゞ忽ち本腹あるべしといふさらゞとてぶたのきもを求め是をよく〳〵煮て母にすゝめよとて妻にわたしその身は他行しけるこの妻つねゞ姑をにくみ老病の事なればせんなき藥ぐひなりと思ひける折節その孫嫁子をうみけれゞ其名なを密にとりてよく煮て姑に勤めぶたの肝いかくしておのが藥ぐひにぞなしたりける程なく赤いろなる蛇かのよめの口へ飛入ける尾四五すほど口より外へ殘りけりその嫁なきさけびもだへぬる事いふゞかりなしまとに奇代ふしぎの事なれゞ聞傳へ見物の人おはくわつまりけるが老たる人の見るときい尾とうごかさず若きもの、見けるときい此蛇尾を右左り上下へうごかし女の顏をた、きけるこそおそろしけれある人釘ぬきを以て蛇をいさみ引ぬかんとしけれども尾のかたきを黑がねの如くにて奥へい入といへどもそこしも口へは出ざりけりかくのとく惱む事三日にしてつゐにむなしく成よけりこれといふもつねゞ姑にあしくわたりしむくひなり姑の口へ入れまじき胎衣をすゝめ我口へくふまじきぶたのきもとぬそみくひける惡逆によつてかくれとく口へいるまじき蛇の飛入ける事天罰なりかたちゐ影のしたがふをくおそろしき事なりけりとかたりたまへば夫婦ともに手をうつてわら恐ろしやとかんじける道意またヤけるは和尙さまそれがし此ごろあたらしき枕屏風をおしらへヤいこれはむすめが方へおくりヤ心得おてい何にても一筆あそばし下されとヤに一休やそき事なりとて筆とりよせ



萬一人事一口むやく物面壁に耳岩に口　姑夫唯主おやとわふぐのみ
我男げにたいせつにおもひなば
　なぜしうとめの見にくかるべき
むねの火のもえたつときの有ならば
　こゝろの水をせきとめてけせ

とかやうに書てたびけり此屏風今に傳り侍るとぞ

さて前夜の説談すせし文中に涅槃といふは天竺の詞なりこゝは滅度と繇して空寂の理に歸する旨なれどもたゞ成佛至極の處と覺へたまへこの經の中の要は然も佛の所におゐて善根を種つれば説種るといふ文字が法壁にかなふ聞所にて侍れば耳をかたむけて講談を聞たまふべし此種の字はうもるともたねとも卿とも讀てたとへば草木のたねの如く瓜をうゆれば瓜を得豆を取にも同じ事善種をまけばよき果をとるを因果ともいへり世間にゝ仕合のよいとゝ果報といひよろしからざると因果といふは誤りなり因果も果報もみなむくひといふ心にて文字に善惡の差別はかけれどもかやうなる誤りゝ世にあまたにて侍る弘明集に纖芥の惡は劫を歴ともはろびず毫釐の善は世々にも滅せずとて微毫髮すぢほどの因も果ならずといふをなければかりにも惡事のたねとこぼすべからぢ生べきは治定にて侍るされば法苑珠林に經を引ていはく愚疑の人因果をしらずみだりゑ邪見を起し三寶四諦もなく禍もなく福もなく善もなく惡もなく衆生の業因もなく惡果も無とかたるものは決定して阿鼻地ごくに落べしといふ文にてござるほどに何れもたしなみ玉ひて因果撥無して佛法といふものゝないものじやなど、垣やぶりなる事はかまへていはしやり升なされ共今どきの人多くひがみて地獄も極樂もありとは聞ど見てくるものなしたま〳〵見るはあやつりに紫のくもを空より糸にて釣下し箔の光をゝなつ佛弘誓の舟に二十五の菩薩一度に尺八をふき三味線をひかせてつかふは上手にてまたおかし鬼といふも虎の皮のふんどし、たるが濃たる角をふり立しくわいらいしの弄びがおそろしきものよいかげんなる事と佛もたくまれて子どもたらしのたゝむれを仕出し玉ひけるよといふ者もありいや〳〵何がしの法師と地獄に行て有し皇の苦痛を見たてまつりて歸り唐土の僧も奈落のくるしみをおもひ出して日に三度血のなみだ流すとき書こしたるはといへばうそつきの末弟どもがいふ事なれば何を證據にすべしなどわざける人こそ淺ましけれ同じ論に曰無にぬちて因果を罔とる者ゝたとひ万牛挽とも永劫地ごくの門を出じと書て是をかなしみ玉ひてこそ三世の諸佛も十方の如來も世々番々に出生し玉ひ此まどひをやめさせ一切衆生我ごくと一佛來道ならしめんと五十年のあひだ辯をからして説法教化したまひける倒に心得るは惡の中の極惡なればまことに那羅延力の牛のかずも惡趣を引出する事ゝかたかるべし此等の人のおつる所の地ごくとくげんをうくるに間なきがゆゑお無間地獄と名作る其躰相往生要集因果經等につぶさにあれば只

今ヤ事におよびませぬ何といたましひ事でい侍らぬが愚僧などはまづいやでござりまを然に一ッのふしぎがこれあり自問自答して聞せヤさんさりながら御退屈でござらふ一ぶく致さふ

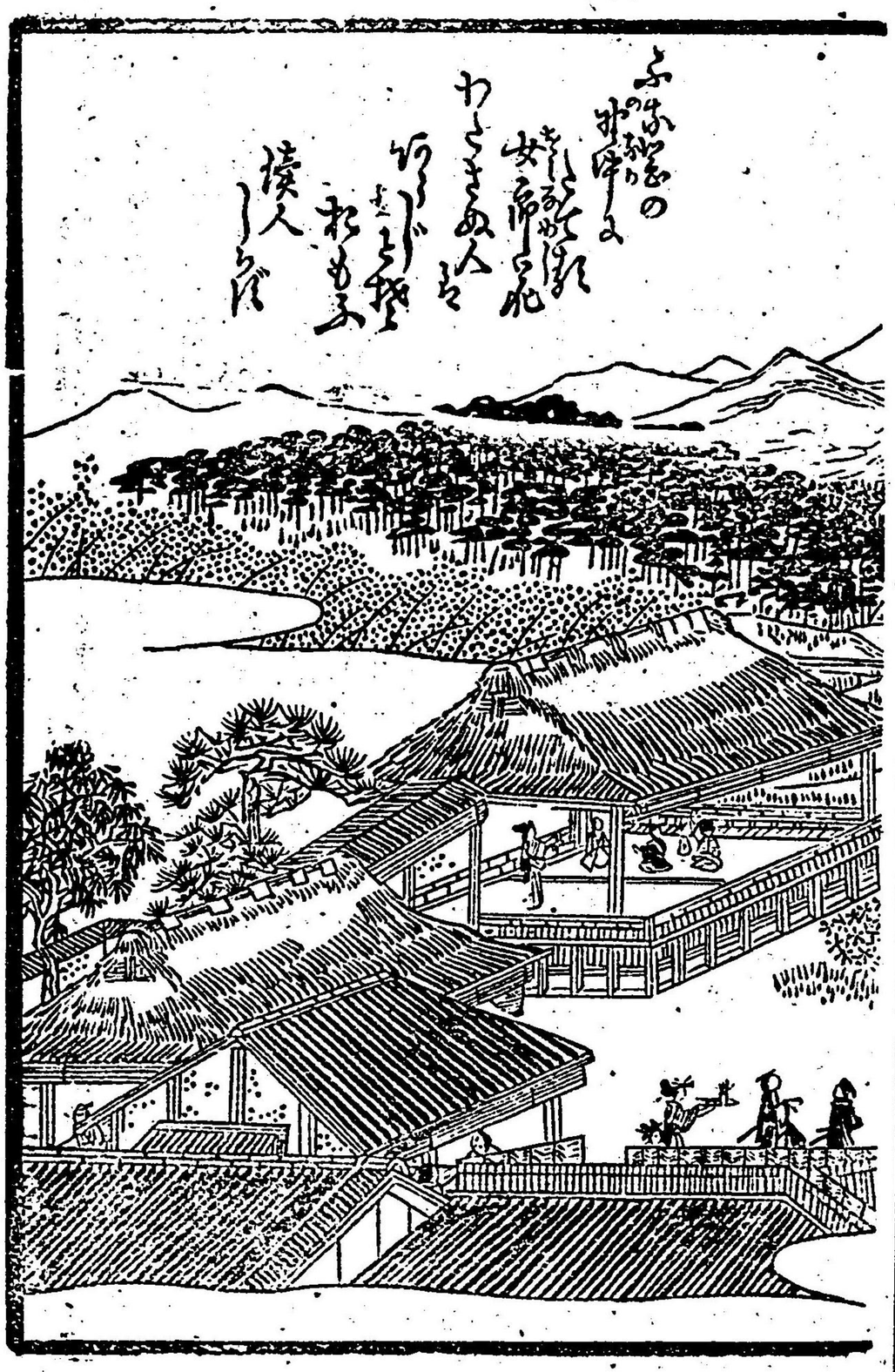
○一体人を殺すものゝ證據をひき得道させたまふ事ありて、に早川治郎太夫とヤもの和尚のもとへ行ヤさるゝはそれ人をころすに其理もつともならば千万人を殺ともくるしかるまじ又殺まじき其理あくば一人なりとて悪逆無道なるべしとヤけるとき和尚仰られけるはそれ殺生はもろ〳〵の罪の根本なりたとひ生る物におゐていのみ貳にてもころす事あるべからず同いたい殺さるにいしかじ男こたへヤやう少もくるしかるまじ或は主命とヤ又はほうびひともにたのまれぬれば是非なく殺事ありかくあるときは其たのみたるものこそとがならん我はまつたくとがいきまじと利口氣ゝ自慢してヤ和尚舌も引入させずして汝あの柳に雪つもりたり枝おもげゝ見へいはらひてんやと仰られける心得ヤ候とて柳陰に立よりふりおとしければかしら袖のうへに雪ちりかゝりしをうちはらふとき和尚の曰汝いかなれば雪をはらひ玉ふぞ某がたのみヤせば某にこそちりかゝるべき事なるにやと仰られれば此人いたと行當りそれよりしてかさねて殺生をやめけるとかや是に依ておもへばいかに人をころす罪科なりといふとも朝敵をほろぼし悪逆のものをたいぢせん事いく千萬人なりとも苦しかるまじ一人半童なりとも殺すべき道理なくば其責おもかるべしされば人を殺におゐていもけとも害すべき道理なれどもさむらひの余にそきこのみてきるべき事いかゞあらん然ればころすべき道理の内にまたきるまじき道理あるべしよく〳〵こゝろべし〳〵

○爰に木屋平次郎とヤものきはめて長ちいさきいろくろき男なり世間の人々これをあざけり笑ふ事よの常ならずまして他所へ用事をとゝのへに行とあれば指をさし子どもあまた付したゝんで道をも安からしめねばおのずから歩をおすとならずあるとき少し心ざす事ありて一休和尚を請じ我身の不具をつぶさにはなし今更これをくゐかなしむ一休仰らるゝは質生たる身をちいさきとて何とすべき左やうの事をかなしむものにあらず其子細ゝ金いちいさきものなれども天下のたからとなる針はちいさけれども衣服をぬふ寶となる墨いくろけれども佛經祖錄聖經賢傳の書をしるして天道の助となる漆いくろけれども諸道具を助たり山い高しといへども貴からず樹あるを以て尊しとす霜雪い白けれども万民これをいためりたとひ肥ふとりたる人がいかはゞ痩細りたくねがひたりともかなふまじきかるを強てやせ細らんとくひものとゝめかたちをちゝめたらばとて必氣血をへらし病を生じ身命あやふかるべし又痩はそりたる人何程こゑ太りたしとねがふともかなふまじ肥太りたらんと飲食物たくさんにして寐伸居のびをせば必氣血をみだらし食傷してうらしげく牛の糞のかさね〳〵なるを寢所にも包おき後には俊寛僧都の鬼界がしまゝ住し、ありさまゝなりなば命もすでにあやふかるべしされば藥師如來の出せ者樂へんじやくが再來して藥をあたへ療治する其いかでその驗を得んしからば天

の黒白背の長短も又かくのとし爰におもしろき咄ありさる所に才かく利こつの人あり此男いかゐも背がちんちくりんにて我身ながらもうらめしく悔かなしむ事せつなり余りむねんさにつく〳〵と思案しけるに我身こそかくありとも是非子どもにおゐてハ背の高き子を持べしさあらばまつ女房をむかへんに好ありみめかたちには少も望なし只背の高き女をもとめるに其背六尺余にて無雙の悪女ありいそぎこれをむかへとり夜盗かせぎけるほどに程なく此女懐妊して九月をも過て程なく産月ひもをとくよろこび取あげて見れバ娘なりあつばれ男子にてあれかしと願ふ處に女なり捨べきにもあらず育てけりかくて此度は是非に男をまふけん〳〵とかせぐ程にうむ程に〳〵つゞけさまに女子ばかり五人までうめり彼男わら腹立や無念やといかりおめきけれども甲斐もなくつぶさうの捨ふのとゞやけども流石さうもならず養育するほどに成身をとるよしたがひ何れも母親に似て色黒く背高く鼻筋ひしげはうにへうつむきにころぶにハ一ッの徳には鼻の用心いらずまなこ細くいびきなどの如にて六尺もたかの女なりむことり嫁入ならざれバ何ともゝてあつかひける有さまなり何事もかやうの事を聞からに諸事悔かなしむ事あらじと言葉に花を咲せて語りてこそ歸りけり

さて自問自答のつゞきを御はなしやさふ緣と無緣は三ッの品あり問如來は是實に一さい衆生の父母にて大慈大悲あまねくおふて更に倦ときなく影の身にそふ如く護念し玉ふならば其佛の力にて衆生もことゞく悪をやめ善と修すべきはつなり何ぞ日夜に悪業をつくる事いかんかふや難問はなふてかなはぬ所でござる此答へは尤佛の大慈ハ平等にして差別なく一味の雨の如く日月の光のとく何方にわけへだてハなけれども受る處の衆生が同からず緣と無緣との相違ある事は釋迦如來舍衛國におゐて說法あそばしたるにて合点が參りそれはいかなる事とや仏この舍衛國の祇樹精舍に廿五年おはしまして說法なされたるとき殊勝のあまりに猿鳥きつね狸のあらゆるものまで如來の說法をきゝて頭をうなだれしとくおハれば皆おのづから住所へかへりし、かるゐ此國に住む人數九億ある中に三億の衆生ハ目の前に釋迦如來を拜み奉り音聲を聞て得道し又三億の衆生はたゞ佛の此國にて說法し玉ふと斗きゝ又三億の衆生は佛といふ名もしらず是を見玉へ同國に住み同じときにあひながら緣の有と無とは此三ッの品かハりあり佛の手前よりは少しもへだてなけれども爰ハ力におよバぬ所なり又醫者の藥をもるに何とぞして人の病を本腹させたく比かげんよ心をつくして與ふといへども飲ねバ醫者の咎にはあらず全くかくのとく佛は八万四千の煩惱の病をいやす大醫王ありとのたとへ是にてよくきこへ侍るさすれば初の難問ハすみました此ハ隨分まよひをしりぞく所の彌陀念佛や法華題目などの良藥を飲で安樂世界寂光淨土に往生成佛をとげたまふべきが一大事にて侍るも一ッ因といひ果といふは人のうたがひをなす事がこれ有ほどに次手に講釋して聞せませう先しバらく此間に世話方講中御らうそくを獻せられませ

明石嶽
比良嶽
摂川
西行法師



○さる人一休の草庵へ尋行和尚にあひ奉りてヤやう我尊文盲ふつゝかものにゝへば耳がたき事ゝ聞てもきかざるがとく何にてもおもしろき事候ハゞ御はなしたまれとヤときに和尚されゞ唐土に虎きつねを追つめすでに喰ハんとそるに此狐のヤやうはいかに虎よくきけ必ずわれをくらふ事なかれ今日よりしてそれがしをもろ〳〵の獣、の大將に天道より仰付られたりさる程に汝我をふくそるならば天命にそむき忽ち汝が命めつすべし若此事いつわりと思ふならば我あとにつきて供をして參るべしもろ〳〵の獣われを見てかならず恐れおの〳〵きにげかくるべきといふ虎ふしぎにおもひさらばとて此狐のあとに立てもくもろ〳〵のけだものども案のとくみなちり〳〵に〳〵げかくれおそれおの〳〵きひれふす其子細は此きつねを恐れにくるにあらずあとなる虎を見てもろ〳〵のけだものはにげかくれおそれおの〳〵くなれされども虎てまことにかの狐に恐れをなすと思ひ天命をおもんじかへつて守護をなしけるとかやそも大きなる化やうがなされば世間の家々ふもかの狐こそ多ければ化され玉ふな御用心〳〵

○爰に能勢小作といへる大すりきりのわるがしこきものあり時しも極月廿七八日ごろの時の事なりしが借錢にこひつめられせんかたなく方々をかけまゝりさいかくしけるに我も人もめん〳〵に用ある折からなれば我用に立べしといふものなし〻かるに粟田口邊に彦八とヤて富さか〻への町人ありかれが處へ尋行からゞやとおもひ粟田口へといそきける此彦八とヤものいかなる前業のつたなきにや朝夕の飲食とては黒米飯にみづしるにてくふほどの者なりかれにかくといひけるがくだんの如くまづしきものなれば我身にさへをしみ朝夕の食をだにもときに取ていち一度もかんゑんする程のものなるもへまして親類すら猶もつて他にかねなどを用に立べき事おもひもよらずかつて取合ヤさねゞ是非なくして歸るとて

たからともならぬたからは彦八が
持たるかねは我身さん玉

とよみすてゝこそかへりけれさる人のヤけるゝ一休和尚へ參りなげき給はゞさだめて和尚はじひふかくましまし程にすこしは玉はらん事はよもあらじはや〳〵參られよ殊に其方のよろしきときゝ相應の用事を度々かゝへられし事なれば其方の事は和尚かげゝおても念頃に仰られ候ま、御うけあひ玉ゝぬ事あるまじとく〳〵とヤせゞ此者げにもと同意してやがて和尚へ參る折ふし和尚出合玉ふ先四方の咄し二ッ三ッ仕り序よきときを見合ヤけるはいかに和尚さまそれ人間は四百四病の其中に貧苦ほどつらき病ゝおしと古人も是をかなしめりされゞ御僧も内々それがしが年月持病御存なりとに此頃しきりにさしおこりいさる醫者に尋候へゞ此煩ひゝ我等が療治にゝかなひがたしかやうの病ゝつゐに醫書にも見へヤさず然ども曾て病の名をヤさねゞ醫者の見立をしらざるに似たり多分此わづらひは借金といふわづらひなりいか戒者娶へんじやくがかゝりたりとも治しがたかるべし妙藥金銀丸をもちひてのみ玉ゝゞ即時ゝ治すべしとをしへられけりもし和尚さまに御持あらゞ一包御はうしやにわづかり度候とゝなみだ

をはら〳〵と流して下せば和尚きゝ玉ひてされば こそ其病は年に二度づゝおこる病なりまづ當月今ごろ秋と七月中旬何れも遠國までもとやりわづらひ下なりさもわらび恩僧すこし持あゝせたり一包まゐらせんとて奥へ入たまひ銀一つゝみ取出し上書にゝ養命補身丸とかきつけもし再發のときゝしらぬなり早々歸られよ

さて因果の差別目前の道理を講じましやう唐土の子才と士嫌といふものゝ問答にて侍るそれをふまへては論せねども今少し因果の道理を聞とつりたるものが下事にゝ因果といふものがたねと木の實のをくならば同じ田地に種蒔子小角豆の中にも枝葉のしげりたるもありやせたる枝に虫のつきて見苦しきもあり何れも其肥たる枝と前世にていかなる善根ありやゝせたる枝ゝいかなる業惡をかなして是やどのちがひがあるにて侍らんその上松の木が後生ねがひてさくらになりたるためしありや天地の間に生るものゝ萬物自然の理にて種は同じけれども所によりて大小高下のあるゝ別て善事したる瓜のゐしき事したる豆の葉といふやうなるいぶかしき事あらんやおそらくゝ佛法あやまりて因果の差別を說なるべし是いかん〳〵これを士嫌がこたへに是不類の談なり變化は心に依是木たる事豈心ゐらんやといへり此忍ゝ不類の談とは耳とつて鼻をかむがとく山を船にのるにゝたる不審といふ事なりそれいかにと下わ成實論に

前世の妄執ゝ今四大をまねく虛空を囲て仮名の身となる前世の業因によつて法界の五大仮名和合して五躰となると釋して善惡因果を論ずるは有情の群生心のあるものゝ上にこそ沙汰する事なれ誰か悲情草木の心なきうつ木後世を祈れば善をなせといふべきかゝるも忍に變化は心による木たる事あに心あらんやといへり變化は品形のかはるといふ事なりしかれば有情非情こゝろあるとなきとの差別を合点すればその難問みなはれ下ではゝべらずやたゞし右れものいひ華嚴會上の樹神の偈は甚深の子細あるとなれば こゝにて論ずる如くなり誠に昨日あれば今日あり今年あれば來年ありたれかよくあすの日をつげて來る事はなけれども今日がくるれば明日もあり現在あれば未來あり因あれば果なふてかなとぬ道理極るならひ薩婆多論に曰むかし牛洞比丘といへる人は常に牛の洞かむやうに口をうご〳〵としられたるは先世牛の中より生をうけられたと下又ひとりの比丘ありかゝ初にも鏡をもつて我面を見られしかば過去傾城のうまれがゝりあり日藏僧者は神通を得玉へどもつねわたはむれおどり歩行たるは前世猿の中より生れ來るとしるされし又佛弟子の中に夜昼わかずに眠りたる僧あり佛にこの因緣を尋ね奉れば千歳の間牽螺がいの生を得たるものなりとのたまひしをはづかしくおもひ晝夜またゝきもせず七日の間まなこをひらいて居たりしかば忍ち明盲に成しを着婆に見せければ是いもべからず病にてつぶれたらんゐ藥あれども生たる目には眠りて休るが食物なるを此日數ふさがさればかつゑさしたる目あり藥かなしすとてさすがの名醫そでをはらひて去けり其とき世尊これをわはれみたまひて金色の御手

をのべて双眼をなで玉へば卽時にやみはれて明眼になれる事もあり生としいけるもの三界二十五有の生死病死迂流問隔六道四生形をとにし果報ひとしからざる事は皆先業の習氣によれども一切の凡夫罪障ふかくして因果をしらず皆みづから苦の因を作りてみづから苦の果をうくるかいこの我身をしはり夏虫の火にこがるゝたぐひ皆自業自得誰にむかつてうつたへんあるうたに

奥山のすぎのむらたちともすれば
おのが身よりぞ火を出しける

ともよめり曠劫苦海にひやうりんし多少業火にやかるゝとぞ

こりもせずうき世の間にまよふかな
身とおもいぬとこゝろなりけり

終にその苦しみにわかずかへつて五塵六欲におぼれて恩愛にしばられし鵰鶚のちぎりも命のきへざなうち鴛鴦のふたまをかさぬるも身体のやぶれざる間大梵高臺の閣も火血刃のくるしみをかなしみ阿育の七寶も壽命を買ず息たへぬれば又三途八難古巣ゐ皈り犬とうまれからはなり不淨の肉に樂しむあとばい糞中にそまり蠹と變じ角をいたゞき毛をかふむり生々世々の其間四足にてやあらん無足にてやあらん覺ず浮ぬしづみぬ紅蓮大紅蓮のこはり八寒にとじられやう〳〵餓鬼ゐへめぐりあるひい畜生よさまよひ修羅にうつりふしぎや過去遠々坊のすこしき⊕かりにひかれぬらんたまし〳〵人間に生をうけあひがたき佛法にあひ寶の山に入ながら現世後生をぶらりとくらしだらりとあかしうやまふべき三寶をも信せず放逸に惡業をたくみ手をむなしくしてまた三惡道にかへるべき事いさてもし〳〵浸さしく悲しきかと思ひたまひて日頃願たてまつりし念佛題目やそれ〳〵の宗旨の方便きづなに取付て此たびはせめて少しの善因とまいてゐりとも生死の家をはゐれ未來の浮刹の盞に置べし

と大願のちかひをたてひとへに後生の道に身命をなげうち玉ふが肝要でゐざる又さま〳〵ヤ談じたき事侍れどもへたの法師が弁舌わらひぐさのたねもしや此次ゐのぞみならば明はん談聞して問せましやう

○和尙いまだ小僧にておいせしゆき師の御坊につかへて食よみ手ならひなどして居玉ふ折ふし夜さひのころなれば師の坊いからざけをあつものとしてたゞひとりまゐりて一休へは豆腐やうの物ばがりまゐらせられけるに一休これを見て凡出家はなまぐさきものをくいざるよしけ玉はりしが師匠はからざけをまゐるはくるしからずいかさあらば我等もたべヤさんとヤける師の坊をかしくおぼしめされなんぢがやうなる小僧の身としてなまぐさき物くふときは忽罰あたるなりと仰られければ一休眉をひそめしばらく思案してヤさる、は同人間の身として小僧にのみばちあたらむや老僧こそなまぐさき物まゐらば罰いあたるべけれとあざわらひておはさければ師の坊のたまふはいとけなき身として心たけたるいふやうかなさればよ老僧と

て御もるしはなけれども我等ゝ引導をして喰はどにといひたまへば其引導ゝいかなることやらん少しうけたまはりたしとやされければ扨々わゞせはこしやくある人やいで引導して聞さんとて一盃もりたるからさけをさゝげて著おつとりのべてのたまわく

汝元來枯木のとし助んとそれども生て二度水中にあそぶとあたはず愚僧よ服されて佛果を得よ喝

とのたまひてひたものまゐりける一休つく〳〵と聞て又眉をひそめてしあんして夜の明るを待かねていそぎ魚の棚へはしり行さも大きくしたゝかある鯉を一献買取きたりて味噌汁とこしらへかの鯉をひんにぎりながたなおつとりのべて細首ちうにうち落さんとせられける所へ師の坊たち出御らんじてこれゝさたのかぎりなり昨夜もしめし敎しとくにいとけなき小僧の身としてからさけだにも無用といひしにその生てはたらく物を害して食はん事以の外の事なりといましめ玉ふ一休もさはかず我等も引導おゝしまそとて去ぬ体におゝ〳〵けるが師の坊もあきれはて大にわらひてそれはいかなる引導ぞやもし尤しからばもるすべし、からすばのがすまじとてかの御家の一棒をこわきにかい込引導いかにとせめられける一休すこしもさはがずいで引導仕らんとて左に鯉の細くびひんにぎり右にながたなをしやにかまへていわく

汝元來なま木の如し助んとすればにげんとす生て水中にあそばんよりゝ如じ愚僧が糞となれ喝

とて鯉の細くび水もたまらずうち落しぐつ〳〵と煮てした、か喰て空うそ吹ておはせしかば師匠坊これをみてさてもよき引導ぶりで手がはりなる心得かな昨夜われらが引導よてはからさけゝ佛果を得ずして糞と成べし汝が鯉ゝくそとはならで佛果を得りさて〳〵活機なる人や禪僧なるぞや小僧どのとて皮の一棒をかゝらりとすて舌とふるひての玉ひけるゝ三年よある鼠を今年生れの猫が取とゝかゝゝる事をやとかくに汝はだゝものにはあらじと感じたまひけるが業の如く程おく天下老和尚とみづからのたまふほどの活祖師にて一休とて名を千歳に傳へ玉ひて田をかへす翁のうをする尼までも物語の種と人おいひもてはやされ玉ふ事誠に凡人にてゝましまさゝりける

○一休和尚は蛸が御好物にて或日つれ〴〵に蛸を買につかはされけるに折ふし店にきれてなかりける彼つかひの者こゝかしこと尋ねいゐる故おそかりしかゞ待わび玉ふまゝ

此たびゝいそぐといふにながそでのたこの入道みちのおそさよ

と遊しける處へ蛸四五はい買もて來りけれゞ一休よろこびて此たこひざ〳〵と食もひざんの事なり引導の碩なくてゝとて

千手觀音蛸手多　斬懸二柚酢一拜二如何一
佐州一昧天然別　他禁戒任二老釋迦一

やれ引導いすみけるぞ火葬にすべきか土葬にせんかいやな〳〵水葬にせよとて手とり足とり手ふ〳〵沐浴させて柚酢をかけてひた喰にくひたまひ去る檀方へ行て酒などまゐりけるがあまりに多く蛸をまゐりける故吐却なされけるがみな蛸あり旦那衆これを見て大に驚きヤけるは一休和尚は佛のやうゐ思ひしに蛸をまゐりけるかあさて〳〵なまぐさ坊やこれは〳〵とわざけり笑けれは一休すこしもさわがぢいやとよ我は蛸をたべねども口より出れぢせんかたなしさりゐながら我蛸とくひしはにあらずとわらがひ玉へぢ口より吐出したるもの食ぬとあらがひ玉ふかやいよ〳〵きこへぬ御坊やとおどりわがりて笑ければいで〳〵わゞせ達たとへ口より蛸出たりとも喰いぬ證據を見せんとて皆々引つれて百萬遍に行て善導法然の畫像を見せてわれ見たまへ人々よ善導あみだをくひしとはあけれども口より三尊を出玉へり善導大師さへくわざる物は口より出るとを制しがたしまして愚僧くわざる蛸の出るとさらにせんかたなしと仰られけれぢ皆人よこ手をうつてさても頓作なる御坊苔やと口を閉て歸りける

○扨一休和尚は生佛にて魚を食して水中へ吐出し玉へばその魚たちまち元のとく生かへると洛中ゐ此事を專らヤ傳ふと或人來りてかたりければ一休をかしく思して洛中の辻々に高札をてそあられたれ其詞に

來る何日の日さがり泌のほとり紫野におゐて魚を喰て其まゝもとの魚にはき出し水中におどらしひる事なり御望のかた〳〵御見物に御出待さてまつる

太夫は天下老和尚一休大禪師

とぞ書れける洛中の諸人是を見てうそか誠かとばかり人々いひけれぢ實しからず思ひしに扨はうたがふ處なし正しく御自筆にて高札を立らるゝ上いしるしあくてはかなふまじいざや人々見物して末代のかたり句ゐせよやとてしるも知らぬも見しも見ざるも其日の來るを待かねて門前に市をなし我見もうさじところぶまでのび上りて洛中貴賤くんじもせり其刻にもなりしかば大盥に水と入なるほど魚をよく料理してかのたらいのほとりに御膳をすへける一休出たまひて彼魚をむた食に食さまひて扨はんぎりにむかひて喝々とのたまひて暫く目をふさぎなどし玉へど見物のくんじもい御顏をまもりゐて生たる魚をはき出し玉ふい今や〳〵と待居たるにしばらくありてのたまひけるはおの〳〵はる〳〵の御出なるほどにいつよりも一きい手ぎはに吐出して見せヤさんとて種々思案するに中々はかれそうにもなしせひにおよばず冀ふなりとひりて捨ヤさんはや各も御歸りあをとて内へ入玉ふ上下万人きもをつぶしさてもおどけたる御坊と興をさまして歸りけるが其中に心あるものいひけるは只今參りさる魚い皆生て淵におどるなり有がたき一言かな誠に正法にきどくなとしこそうけ玉はりしに人の余りにいはんとてふしぎおる事をいひてはめんが爲に返てそしるなれば其理をしめし玉ふ有がたし〳〵と感じければ皆人是に氣がつきて合點したも合點せぬもうあつきわへりて歸へりしとなり

さて前晩おやくそくやたる因果の二字をあらまし講談いたしたる其次を只今講じませう因
といひ果といひ善と悪とのふたつに生を苦と樂とを身にうけさするものなにぞとせんさく
して見ればみな我一心より作りなすとわが心わさせるといふ事まで錦々覺ながら善方へい
うつらず悪しき事といへば先すゝむ我人の過去の悪業が多く殘りてまた五道六道に引もど
さんと心の鬼が身とはなれず日夜つきそひて少にても悪念がおこればたよりを得て善心を
さまたげぬるをもつてあらゆる六賊といふ六の盗人めが目と鼻と口と耳と身と意とに入か
いり目にうつくしきものを見れば人の親たるものゝあのやうなる衣類染ものを我子にして
若たや孫めにこしらへてとらせたしと罪をつくりまた子を持ぬ女ゝそんじよ其娘子の今日
は花見の若物見ればさても風流なもやふ當世のそめ出し帶と何々たしかひながたの内にあ
つたのかと覺ゑそし櫛のけつかうさおのれもあのやうにして寺參りするあらばこれほど見
にくゝとも能見られんものをしやはしやと欲をおこさず扨又一盃なる親父も伊丹灘のいけ
のこもかぶりの樽片荷ゝ弁當旦那どのは、や向へ往てをじやると久三がいそがしげに通る
を見てゝ何とよいものが行肴がなくも大事あるまいとおもひ其外若男どもゝ色ある女を
みるに煩脳。たまに行合袖のふり合にはや心うかれあとをしたひ百度も見かへりたるも見
ぐるしとに坊主の女ねぢひけるはど浅ましきはあしおれ皆眼ゐ彼の色欲の盗人が入かわり
て其忍をうばふ也仙人が通を失ひけるものよさにいへば八十八使の見惑有其外か耳に聲を

聞てなづみけゝひ物でしに形は見へねども氣をうごかしかゝる穢土をいとひ浄土をねがふ
念佛の音聲をさへおもしろきこと音やと後世の心ゝ余所になりて聲にれんぼをなし鼻には
かりの物を思ひながら袂に留し霊物にも心をときめかし舌わわぢゝひ身にふれ意に錄し口
わいふ一日一夜四千念年々に思ふ事は皆悪道ゐ引おとすなかだちなりまさかに發る善心も
此六塵の盗人にぬすみられて善心は、やくさめてあしき方にれみはだされてよひの講談を
も只何となふ聞たまふべけれど中々御法はき、にくひ事でなく一目の龜のたとへ大海針の
事ゝ方々にて、うもんある事あり只今此法問をきくうちなりともせめて意の駒にくつゝを
はめ意の猿をつなぎとめてきゝ玉へ觀念觀法ゝならず身にいとまなく世路ゐさへられ親
の命日ゐも寺まゐりさへならぬ世の中いゝんや聖教にまなおをさらす事もいとまを得ずし
かれば聞といふ事が一ッの樂しみもとより聞法の得益甚深ゝはなはだふかければ只一詞も
佛のをしへとわらばおろそかに聞ぬやうに先心をおちつくべし聞といふに三ッの品わると
法苑珠林にこれありその内聞をもつて聞が三ッの中にゝ下成としめされたしかれは何をも
つて聞ぞといへば心をもつて聞がまとの聞やうかるがゆゑ心爰にあらざれば聞どもさこへ
ず食へども其味をしらずと儒書にものべさり茫子にも神をこらして寂ゑ聞といひ前漢書買
山が傳に天下目をいたゝいて視耳をかたゞけて聞とあるもうつかりと見そうつかりとは聞
ぬといふ事也しかしながら悪業煩脳のでみにゝえふてきく事ろくにゝ濟ず只佛法とあらば

ありがたやとばかり信じたるがよし萬物の理とすまずといふは知恵がなければならぬとしるべし

○或人和尚へ參る折ふし和尚たいめんあり諸事のはなしおわりて後此男ヲやう和尚さまわたくしい此ごろ病中にて本服いたし今日うゐだち仕まず和尚さまへ御見舞ヲたりさて和尚さまにい御答話がよきとヤ事凡日本中に流布仕りてしわはれ何にても御はなし聞されしへさりながら今程世間に高直なるものをもてあつかひし先何々にていや一休きこしめしされば高き物をいいんとならば

ふじの山に　あさまのだけ　伯耆の大せん　高間のみね
あたごさん　ひえいざん　東寺の塔　天狗のはな
品こそかわれ　きだふの墨跡　大灯や扨　貫之が歌書　定家が色紙　たんざく扨　わらかねの土のものには。まつはふんりのかたつき。丸壺なすびかぶらや。はなのがぶらおし。鶏の一聲。せいしどう。さてわきざしや。大刀かたおよしみつ正宗。國とし波のひら行安。しらゐのうつぼに。日でりの年の米の直とゐんすはなほも高きかねなり。かれうびんがのこゑたて、童のうたひこへ。ばんしきらむけいかみひてう

これヤでなりといひおさめたまふところへ旦那かたよりとて御衣を一衣これい和尚さまへ進上し參らするとて持來る一休さのみられしくおぼしめさる氣色もなく一言の禮といふべき言もなくたゞ狂歌をそへ玉ふ

から衣またからころも唐衣
かへすがへすもからころもかな

○又さる人一休和尚へたづね行くさんとの望をヤければ和尚き、玉ひ安き事や其望ならば先金剛れ正体といふ物をあんじ出し玉へとおはせらるゝまの者聞て取あへず其こんがうの正体あらば案ずるに及ばずそれいわらにて御座あるべし子細いまづわらといふ物あてこんがうい作る物なれば。かくあるべきなりとヤ。和尚おかしさかぎりなくして。いや〳〵さやうの物にていなし。金剛の正体とヤい音あつて目にも見へず。手にもとられず火にもやけず。切てもきれず。水にてもぬれぞ色にもそまらず。かくていい無ものかとおもへば。元來其ときにしたがつて。又あるものありとおしへ玉ふ。此ものき、てこい六かしきたづねものかなこんがうならばとかく藁ならでい別に余なるものにてつくる物あるまじさいいゝぞんせぬ事也とて出けるが門のほとりより又とつてかへし御坊さまたゝ今おしへ玉ふこんがうの正体わかりました門前にてとくと合点いたしゝぞやそれい屁にて御座あるべし子細いまづ屁とヤものい音いわりて手にも取られぞ目にも見へず色おもそまず火にもやけず切てもきれず煮てもかくて元來なきものうとおもへば服中のときによりていくつもある物にて候とじまんがはにいへるいをかし

かゝりし。

和尚あるとき蹇の早がてんも徳ありと引とにたとへばかなつんぼなる者人に何ゝ商ひして
よからんゝ問しにとても壁にてゝ合点行まじと思ひ耳をおしへて兎角ひゝく次第にて何し
ても利ありといへるを此つんぼが心にてゝ耳に似たる物をあきなへといふ事と思ひ木ぶし
を大分買込置けるに折ふし諸方にきれて此もの大よ利徳を得て後ゝ長者となれる是は人の
言葉眞直にうけてうたがゝず誠の心よりなせる故に利を得たりしかれゝ佛法の一句を聞て
も少もうたがゝずたとへば愚癡にして法の深理ゝ合点もかずともたゞ有がたやと思ふ心が
則來佛のはじめとある爰を澁空上人も一定と思へば一定と仰られし安心決定の處なり歌に

聞ときゝ實もとおもふのりのみち
かへるときにゝわすれてそすれ

とよめる聞た一座ぎりとまらずみなおゐてたつ人ばかりなり耳ゝ地ごく耳がよし浮土双六
にもえうちん地ごくへ一度おちてゝ二度出るとかなひがたきもゑ地ごくといふなり籠耳ゝ
水がとまらねども水中にひたしておくうちゝ一ばいあるやうにこの一座にいてきく内ゝ水
のあるとくちやうもんの座をたつときゝさまると思ふ法の水ゝみなもつてしづくもなきも
ゑうご耳といふあり人とうまれて覺へのつよきとよわきと利根鈍根上根下根ゝ有ならひな
れば世ひ覺ずともくるしからずしばらくも法問をたもつものゝ我則觀喜す諸佛も又しかな

りと說玉ふ刹那片時の間にても有がたき御緣によつて佛ぼさつのをしへをうけたまはるは
大切なる事と信心を發し一遍の後生を底心より申すが專なりたとへば火ともゝふ物ゝ重寶
なる徳ありて大寒小寒の氷面川わたれば手足の切るゝごとくつめゑく五体ちゞみあがるは
どの朝夕に火をさきわさればそのまゝわたゝまり其外食物と養物をとらかして自由自在
につかふ能あれども火事といふときゝ盗人よりてゝく家の五軒や十軒は旦時の間に灰とな
し人もやきころすはずんどてとい、やなやつなり彼五体をあたゝめものゝ養たく所の火
と此わざとひの火とは別々かとおもへば少も火にちがひなく全く同じ火なりたゞ用ひやう
によつて善惡明白なればみな我心をあしくもつなと是にたとへて仰置れたあるは又生子を
金銀とつてやしなひ一二ヶ月そだてしのちは我子にち、とあたへ養子はいつしか、つゑ殺
し罰あらはれつひに刃にかゝりを惡ひ心のもちやうもゑあり現在かくのとくかしやくせ
られたるは其ま、の地獄しかもはやくめぐるは因果ぞかしひかしは皿今は針はゞの事も棒
ほどにむくふは目に見へてとほりとさらこの殺生戒をば大乘門のときはじめに置は佛は大
慈大悲のかさまりたるなればもの、命をとるを別にいましめ玉ひしなり殺生につゐてさや
くゝこれあるほどに三世のむくひやうをつぶさにはおして聞せませう去ながら余りかたい
事ばかりではみなゝたいくつでござらふ先一ぶく

○或寺の門の破風に猿を三ッ作り付たり一ッは両手を以て目をふさぎ一ッのさるは両手にて耳

洛東砂川猿寺

猿寺法性寺華宗にて祖師親鸞聖人名越の山中にて弘法
のふれうに日に数多の猿来り集り涌経と
称ずるに新月毎に新月毎に
うや猿の果実を持来
ひて祖師に奉る祖師
ふるまひと歩下一とう
に猿鼻法性寺
開けり文永年中沙弥
日蓮上人此所に
[illegible]

[illegible]
さるゝ自[illegible]
[illegible]
[illegible]
祖師の[illegible]
貞和元年[illegible]
[illegible]
[illegible]

をふさぐ今一ッは口をふさぐあるとき三人づれにて此門前にたちどまり是を見物す折ふしー休そこを通り玉てひ立より是を見たまひうちうおづき笑て過行たまふ三人のうち一人がヤやう何も三ッの猿れいはれをさまざまなんじけれども終に合点もかず只今これにしばらくありて行たまふ出家のうちうなづきて通られしは定めて合點し玉ふならめいざ子細をたづねみんと追付て一休の袖をひかへ御坊に物たづねヤさん只今門前にありつる猿を御らんありてうちうあづき笑たまふやうい定めて御僧いよく御ぞんじありつるものとぞんずるかやうにヤ我々い愚痴文盲にして何の弁へもぞんせざる者どもなり子細をかたり聞せたまへや宿へかへりはなしにも仕らんいかに〳〵と問ければ一休さればこそ其猿のいいれは我等もくいしくいぞんせず去ながら何れもれき〳〵の若き衆の尋ねたまふにしらぬといふもいかゞ斯いひし事もあるげにい

何事も見ざるいいざるきうざるは

たゞほとけにもさるなりけり

とよみ聞せたまへば三人の者どもさて〳〵尤なる御歌のこゝろかな是はめん〳〵の心得になくてかゐいざる歌也さて今の御坊は佛神の化現なるべしと皆一同に感じたち歸りしが一人のヤやういうにめん〳〵此歌の心をもつて三人ともに今日よりして見ざる聞ざるいいざるの願をたつべし皆もつともと同じて扨かたいいらに立よりければ折ふし遠寺の晩鐘かすかに聞へはるを聞ざるの願あてたる人何となくおもひ出て

今日の日もいのちの内に暮にけり

あすもやきかん入相のかね

とふるき歌をうそ吹ける處にいはざるの願たてたる人のいひけるはいかに其方聞ざるの願むなしくなりぬる事のあさましさよと手を打ひびをさして笑わざけるところへ見ざるの願立たる人のいへるはさて〳〵かた〳〵は何を聞何をいねてともに大願をやぶり玉ふやおろかにあさましき事うなと、がめらる、三人の心おかし

○又さる初心なる男わりさい〳〵一休和尚へ參り萬うけたまはる和尚此ものを見るさびに其方はたんき人也物ごとに臨分かんにんせられよと仰らるる此もの答てヤやうもつともかんにん仕い事隨身にこたへ過て覺へ候去ながら我何のかまひもなく無異無事にまかりあり候ときいたづらもの來りてそれがしが面にかすはきをはきかけ候をおし拭てかんにん仕候とヤ和尚聞玉ひて言語道斷それはわるきかんにんの心得やうなかへす〳〵も其かすはきをのごふべからずもし其かすはきをのごひ候いゞはきかけたる田夫もの我等がかすはきをむさくきたなきとおもへばてそのごひたれにくき仕かたなりと猶々いかりかさねてはいかなるめにかあいせんずらんさるほどに其かすはきをきたなくとも其まゝおきて干つけ置べしそれ何のとがもなき人の面へかそはきそはきかける馬鹿ものい生有ものにあらずひとへに狂亂すいきやうば

かたくらだ非人ともいふべしそれ蠅といふもいかに成貴人高位の人のつひりへもおそれず
あがり夫婦のかたらひ事ともなしあるひい糞をひりかくるされば其蠅いもとより虫なりとお
もへば腹も立ず是そのとくはい同前のものに對するときは人倫のなすさはふにあらず堪忍の
こゝろへ是ほどにもなくてはいかでかあらん

因果歴然修羅の二ッを御はなしやさん過去の因をしらんと欲せば現在の果を見よ未來の果
をしらんと欲せば現在の因と見よといふを畧して現在の果を見て過去未來の果をしるとい
へり因果といふい遠い事でなく經文多き中に大集經の十來といふ事かあり其中に命長きも
のは慈悲の由より來る命みじかきものは殺生の中より來る衣來もまた然なり今此悲しき浮
身となりたるい已に過去の業因によつて四苦八苦よきに付あしきに付叫ぬ世となげく近く
は成敗は行われてかばねをさらし籠獄のそきまをいたすを見玉へ其中に重きかろきがあつ
ていづれおろかはなけれども人を殺したるもの助かるはなし但し侍の戰場にむかひて凶徒
をしりぞけ盗賊を討て國を治め義をたつるは佛法には一殺多生とも慈悲の殺生とも申侍る
それとひとつ事ではなし梵網經よとくがとく一切衆生は皆これ累世の六親けんぞく只頭を
あらため面をかもるによつて各相知ぞとありて六道りんゑのあいだ生々世々生かはり死に
かわりあるときは父となり母となり姉となり伯父となりいとことなり縁者となり聟となり
しもうとしうとめとなり師匠となり弟子となりあるひは士とうまれ百姓と生じ大工となり
商人となり夫となり妻となりて形はかはり所はへだつれどもたがひに恩愛のはなるゝときな
かりしを凡夫は淺ましゝ隔生即忘とて胎内よりうまれいづるときのくるしみに過去のあ
りさまをわすれていかなるものか今人にうまれ來りしやら何としたる因縁によつて親子と
なりたるやら覺へもしらず少しの利欲に目がくれて人をころしつんざきて又それに敵をも
とめ切もありきらるゝもありまづ未來までは遠き事あるひは口論して人を切たり打れたり
したる事は聞およばれん其如現世に地獄道のせめをうくる事は扨も淺ましくかなしき事で
あらずや扨未來の事は諸經に多くといて曰殺生のつみよく衆生をして地獄がきちく生に
落るもし人中に生れは一種の果報を得一ッにいたん命二ッにて多病楞加經には殺生のもの
は號叫地獄に落と說き因果經よい切おろすもの死して刀山劔樹地獄の中に落ると、きてつ
るぎの山に追立られてまた身をさかれ血にひせびてあらもるくるしみをうくる事其かずつ
もるにつもりつくされず

○北野遠にて十二三ばかりの童女の菜つみて居けるか俄ひれふし死お入ける處へ一休通りか
ゝり立より見たまへば四五尺ばかりなる蛇はひかゝりけるを和尚杖にてはらひのけ童女を引
おこし子細をとひ玉へば只今こゝに若もの、來りてそこにふせ〳〵と仰られて其後むたいお
引ふせられしが何とやらん頭のまいりをおそれおどろきたるふせいにて左ながらようもつか
そして其まゝにげさりたまふなりとかたる一休ふしぎにおぼしめされしが髪の元結をとかせ

て見玉へべ尊勝陀羅尼の書たるを引さき元ゆいにしたりける是におそれて近づかざるぞふしぎなれと和尚わるとき旦那方にて此尊とはなしたまふ去程に此尊勝だちにの功徳によりわれの命をたすかりたり扨こそまもりといふものいもつべき事なり

○扨爰に一休一大事因縁の御工夫なされしとき諸旦那あるいい御友達衆毎日とひらい來まして扨さたげとなりければかしましく思召て御心地わしゝとて一ゑん人に出會たまはず皆人こゝろもとなく折々に御見舞ヤ侍れば御長髪ぼう〳〵とし玉いて何とも色みへず御腦どのみ仰られける旦那を先として御智音衆もよりあい是い氣遣はしき事なりとゝきの名醫を入かへ〳〵掛さまねらせにいたりはいかにと聞ハ醫師ヤされけるい御脉はいかにもよし不審なる御煩とは見へず若き御僧の事なれべもしや戀などをなされてかく思いわづらい玉ふ事もやわらんと口々にヤされけるがいや〳〵人多く知りたりと思召はわかし給いぬ事もや侍らんひそかによき中の智音のみ二三人見舞てそとうかゞひ侍らは誰と名ざしあるべし、からば誰人にてもあれ此者どもがかゝりなば奈どか御本意をとげられぬ事はあるべからぞと頼母しく言合せてひそかに三人參りたか一休出あひ四方山の物がたりすみて一人ヤ出けるは此間さま〳〵の御煩治にても御脉は常にかわらずと醫師をのの〳〵ヤなり平生よはちゝはで何とて心深くわたらせ玉ふぞや定て戀をなさるゝと見付け侍るゝひが目か有のまゝに仰られよかなへて參らせんと

うちつけてヤける一休いかにもうれしげなる御面ばせにて此上は何をかゝくすべき此日頃戀わびてさてかくの如くやつれはて、候なり能こそ仰出されたり何ぞやらん我等には仰合ぬ事にて侍れども各は日頃のよしみなればひとへに沙汰なくかなへてたべ去ながら名ならなくよ恐見だれてはつかしやそれと名をば面一にはのべがたし一筆かきて參らすべし門外へ出玉ひておの〳〵ひらいて御覧じていそぎかなへたまいらば我等が命いながらへておの〳〵方へそ其かとり能き道故へヤさんとておくの間へずんと入一筆さらりと書て引むすび彼三人に渡し玉ふ三人よろこび御心安く思しめせとて門外へはしり出て扨こそヤさぬ事いとていそぎ其名をしらまはしくて彼弥ひらきて見れべ歌に

本來の面目坊がたちすがた
ひと目見しより戀とこそなれ
我のみか釋迦も達广もあらかんも
この君もゑに身をやつしけり

とかゝれたり三人のものども案に相違して横手を打て日頃の御心もしらぬ身があらぬわざを思ふけるこそおかしけれ今にはじめぬおどけにたべかられけるこそおろかなれまことに有がたき御坊かな書にうつし木にきざめるは多けれどわたもちの釋迦如來なりとおがまぬ人はなかりけり

○嵯峨に了意坊といふ道心者ありけるいのつ頃よりか首に蛇まとゐ付てはなれずさまゞ〳〵れ事をなして漸々とゝおせゞ又夜の間ゑ元のとくにまとひ付ことにひじり切たる坊主なれば日々よさがより京へ出て鉢こひけるに彼蛇をかくさんがためもたんを首にかけて見へざるやうして出ける此事ひとへに難義ゑ思ひ其頃二尊院に一休おはしけるにかの坊主たづね行わが身のやうすをくわしくかたりけれゞ一休き、玉へいかさまそれは女のしうじやく成べし汝是より高野山へ上りゆへさもなくゞ退く事あらじと敎へ玉ひよろこびて高野へ登りしに不動坂より彼蛇うせてなし了意いよ〳〵有がたき事に思ひ高野山に二三年も住しが今わ早蛇の事も打わすれ過しふる里のこひしさに又さがへかへりしが二三日は何の子細もなかりしに又夜の間に彼の蛇まとひ付けり其ま、高野山に住ならば弼めでたかるべきに何ぞや古郷へかゑり二度難義にあふ事定業の程こそかなしけれ今に坊主のすみしあと蛇寺とぞみなゞおへり

一休諸國物語圖繪卷之二

○一休旦那衆二三人同心して東山邊へ遊山に出たまふときしも春の中ばにて梢の花さい中にしてこゝかしこにもさん多しさる片はらに五七人うちより手を打たゝきおどりわがりて大笑なしてあそぶ何事かおもしろかりけるときく所ゑ屁をひりておもしろがる旦那の内一人のゞやうゐまり酒にてうじ何がそれほど屁がおもしろかるべし一休ゞさる、いいやおもしろきこそとわりなりよく〳〵昔よりおもしろき事なればこそ諷おもおもしろのはるべやあらおもしろの春べやとうたふほどに扨は、るのへいおもしろきも道理とゞされき

○一休和尚いまだ十二三歳のころ師匠粘つぼを一ッ持てたゝ一人ある小僧にいさ、かも喰せずして汝是をかりにもくふべからぢもし是を子どもがくへゞ忽ち死る毒なりといふてひたものぢゝかり食ひては取置る、一休おもいる、は哀れ毒にもせよ死るとも師の出られなゞくふべしと思ひて待ける處に折ふし師匠用ありて出らる、一休やがてさがし出し棚より取おろしさに打こぼしあたへもきる物にも付ける日頃くひたしとおもひけるまゝに先二三ゞいくいてあまつさへ師匠のひぞうせらる、壺をうちおとしみぢんになすかくする處へ師かへらる、に一休しみ〳〵とおかる、師何事ぞと問る、されゞ大事のあめつぼを打わりたるなり定めて此たづねのときは何とゞべしとおもひ命いきてもよしなし子どもが喰へば死ると仰られしは

どに一盃たべ候得ども死あず二三盃たべつれども死なれずあたまにもきものにも付て死んと
ぞんじ候へどもすべてしなれずとの玉へば師の坊も言の葉なくてうちわらひてぞ入たまふ
扨談話の次をおはなしやさう一寸の虫に五分のたましいと申事の候鵜飼の道遥、如ものは死して鉄鞠地獄の中に落る鶏をころし卵に煮焼するものは灰河地獄にまづみ鑊銀獄中に落て豆をにるとく尖石ぢごくにいつてうつぶしに熱湯の上にふし其せなかに尖石をのせ石の中より猛火さへほどばしりて重くして熱きといふばかりなくたへがたし皆これ殺生は因果より此身を請るさて鳥獣肉類ところすも同じ凡血をふくみ氣をうくるもの皆これ霊地あり世、なぎのもゝはゝづき迄とゞく死をおそるゝ事をしつて人の足おとをきゝて蛙蛇もちやつと聲をやめ盃のやうなるちいさき虫も人にとられじと、びまわりくもなども空わ家つくるをうち落せどしんだ顔して手足をちゞめすくみたる氣色も命を大事にする也、なり大唐の交抄といふ國の實けんする人貞観年中のはじめつかたつとめをやめて樂々と隠居してゐられしが此人自体から鷹狩がそきにてひたと犬をころして三四十の鷹の餌にかはれしが有ときふとちりげもことりつかみ立るやうわ寒くなり大ねつし頭痛がしてくるやう正体もなくうちふしなやみ宿医術も及ばざりしにわる夜人しづまりてのちまだらと赤きしろき犬五疋きたりてかく其方が命ととらでいかかぬと五体に取つきせめけるとき此人ふもひ聞りて故と殺せしの家来掃達か科なり我はこれさきといへば犬の日通達はそなたの差図にてころせり余の人の仕業にわらず我等すでに他の食を盗まず門番のあてがひゝ喰ひて命をつなぐ何のわやをりわつて殺し玉ふぞ此につまりてしからば汝らがために後生を弔らはんといふに四ッの犬は合點せしに一ッの白犬頭とふりて曰我そでにつみなきわころさるゝのみおらず未だ死もきらざるに生ゝがら我肉と割れしくるしみ其ときの怨ゞ心肝よそみ忘れずとく承引せずこれと四ッの犬わつかひていふは此人の命を今とりたりとも我々が命かへる事なしと思へば追善ぼだいを祈り玉はゞまことに苦るしみをのがる善根ならずやと理をつくしていふに心とやはらげねるとおもへよみかへれりしかれども手足とうごかすとかなはず大より束のとく犬のために追福なしたるに此病たちまち平癒したる事もわり其外巣をかたゞけ宿鳥を射ひ雛をかくゝる事偏にもいましひいんや仏道の大慈悲門におわていましかざらんや空をかける翼地をはしるけだものの水にすむ子をわはれひのこゝろ人より切なる事と子ともつ鯨といふ魚追かけて三尺ばかりわる鎗のやうなる物わてくしゝと突とさい時なるくじら子の脊ゝわひかさなりゝ我死るさではつかれて終に子をいたきながら釣鐘のとくなる壁を上て鳴はなれずきくゝ不便なる事いふ斗なしこゝ畜類の子を思ふその身と死ねるとても子をばいとふなるに人間に生をうけながら已が子シ尻の下にしきあるひい殺したるゝ世話にいふ熱火子にはらふとい此類のとなり然べ畜生は人にまされり

○あるとき白河邊に住ける桑門に名聲なるかる口の人侍りけるが一休のかる口なる事をきゝおよびていつぞや行て難句をしかけ心見んと常々心がけられけるが不斗おもひ當たる趣向ありければさらば參りて御知人にもなり偖一句して見んとはるゝと白河邊より紫野へとぞいそがれける折ふし一休も庵にまし〳〵て御知人となりとかくそるやどに内々たくみし一句の句作も出來ければ彼僧ヤされけるいうけ給り及し御かる口を何にても一句遊せかし何とぞ付て見侍らんとヤされければ一休仰らるゝは客發句に亭主脇とこそヤせ先其方あそばせとありしかば内々たくみ置し事なればさらばヤて見んとてなん句をこそは出されけるが此處は何とヤそ所ぞ一休ひらさき野と仰られければ

紫野丹波近

とせられけれべいまだ息も引入ぬにこや付られけるはそなたはいづくの人ぞ白川のキの也と答ければ

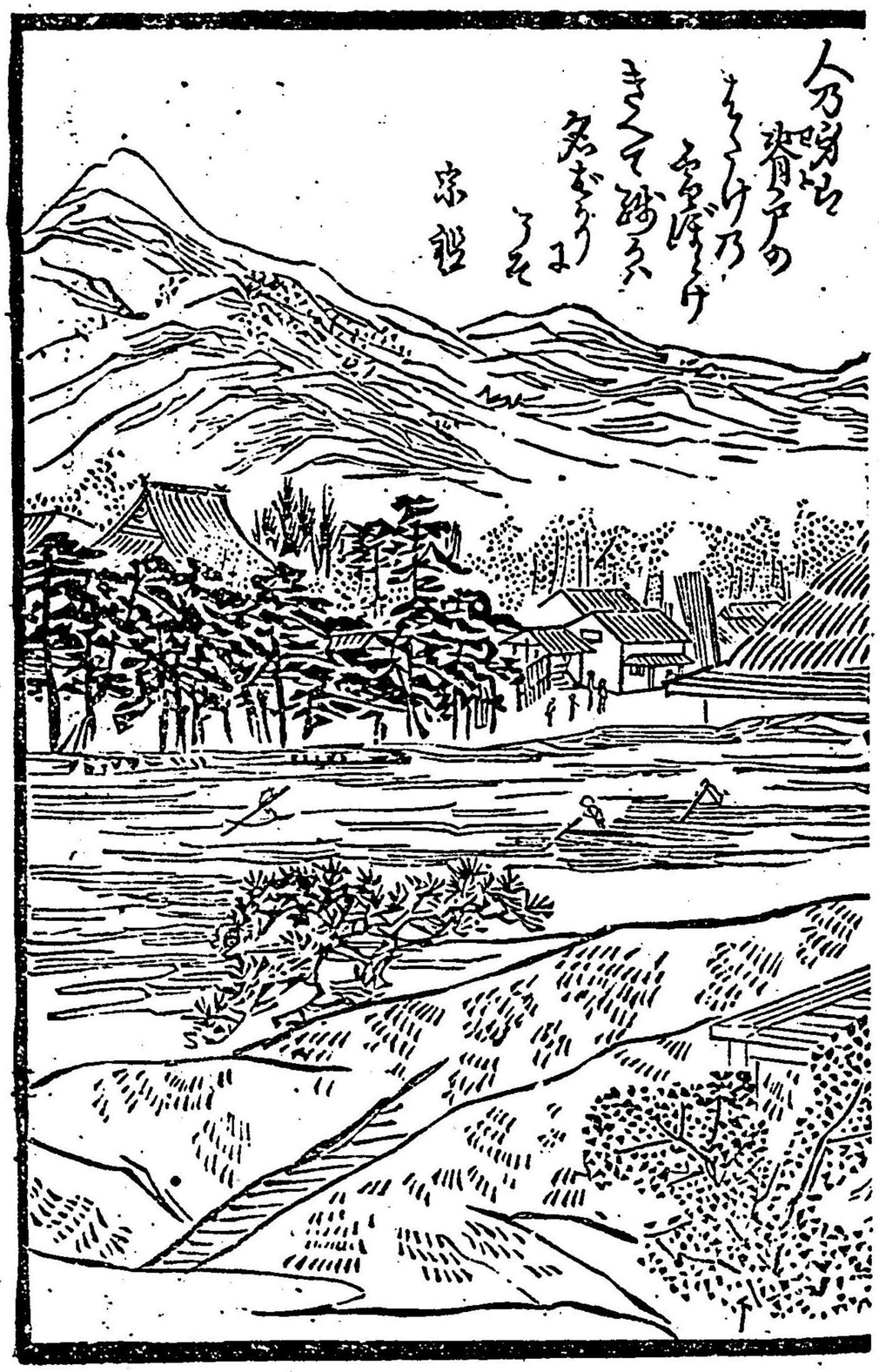
白川黒谷隣

とあそばしけれべかの僧肝をつぶしさしも六ケしき発句なり一句のうちに二ッの色字二ッの所の名いかなるひやうたんの川ながれなるかる口も少はしぶらてふらとし玉ふべしと思ひしに貝とる海士ならで息もつきあへず付たまふかゝる名對ある上はゝぢやくはしとて空うそふひて尻をからげてにげられけるとなり

○又書書の土佐守に内々掛物の書と一ぶくたのみたる人ありしが終にかきてつかはさず彼人心せきて直に土佐守の宿へ行てヤけれべ折ふし太皷うち殿にはおちねどひる寐してこそ居ける彼仁つね〳〵したし〳〵かたる中なり内々たのみおきし事なれべ引づり起しかゝされける土佐守ねぶりにたえずたとひ一夜ねずとなりとも晩わかきて參らせんとておきずしかれ共又晩といはべ明日の川の淵瀬と心かわりもやせん世中なりひらにといふゝ是非なく筆と取ぐる〳〵とまはしてけおつとりさつと書てこれ〳〵とてふぜりける望み足りぬとその書をとつてかへりひねくりまわ去てよく〳〵みれ共さらに何ともしれず水をかきて其中に一筆ぐる〳〵としたるものありさらゝ見分られず余り合點もかざれべ土佐守方へ持行何なるぞと問へども我等もしらずといふかゝる書をもつて何かせん引やぶらんとおもへども三國一出來たりとやせん角やせんと思ひけるがいや〳〵一休和尚に讃をこひて掛物とせんぞるぞといそぎ大德寺へはしり行和尚にヤけるは此書は土佐守に書しゝがさらに此水中の物しれずいかゞ御覽あれとヤければされば何とも見へねども讃がのぞみならばしてまゐらせんと仰られけれべ添なしとて贊をかふ一休筆とりて

水中ゝ物ありその一物をとへべ書し書工も
しらず持ぬしもしらず贊する我は猶しらず

と遊しければこれを見る人きく人毎にさても異すぐなる御心べせや無二あし三國一の掛物な


宗祇

るべしといひしが今よおねて其かけものたゝ人の手にわらずとかや

○或寺に五百羅漢を作りて堂供養しければ貴賤群集の見物ありけり法事やみてのち其寺の僧らかんのまへに香花など取りおけるにこびたる世俗二三人羅かんを見物し居たるが余の人い退けども此仁一人つく〳〵とながめおて傍の僧に問けるは此五百羅漢に一々名こそおはすらんは僧はさだめてはぞんじわらん承りたしとヤければ此僧はたゝ三尊の外は一佛も名をしらざりければ何とも、のいはずして方丈のかたへにげ入ける折ふし一休行合せ居玉ひて何事なるぞと問玉へばしか〳〵のよしヤされける一休のたまひけるはいらざる凡俗のとがめだてやかくて惑にもならざる事たれかい覺侍んやされど望ならば言て聞すべしとて羅漢堂へいざなひさらば一々とひ玉へ其中なるい釋迦むにひだりなるは迦葉行なるは阿難さて次いと、へば南無さなんど其次はと、へばすきやとや其次いと、へばかちこちたと一々れんげ呪の文にて答へ玉へば五百らかんはさて置百千羅漢をとへ共何かい答へ玉いざらんだん〳〵と問ばさら〳〵と答へたまひ凡そ百ばかりもとひしが此俗人さて和尚にいよき御覺へかなとヤければ和尚打わらひさもなく候いとけなきより一卷ばかりい中にて覺へて候へと仰られければ此俗人心付恥入てかへりけるとありされば時にとつて頓作なる御心入とき〳〵人感じけるとかや物を問て用にならず覺ても用にたらぬ事をばいいざるにまさるめてたしよしなき事を聞てあやつられけるぞすべて羅かんのみにもあるべからず

さて殺生を止るべきのはなしあり楞加經に曰佛衆生をみるに六道輪廻しおなじく生死にありてたがひに相喰くらふしたしきものにあらずといふをなしと說れて先祖の祖父祖母いかなる畢業によつて今鯛とうまれ伯父叔がくじらになりて來やら兄弟がゑびざこに成て來て脊にしらるゝやら凡夫の眼からはしらぬ事なり出家たるもの肉食をたつはひとつはこれらのいいれまた不淨なるものと殺生おも當るやゑにくはぬとの事なり必あしいひにふけりて彼魚この肉をころしてしてやつたらばと思ふ心のおこるまいものでなし此もゑにいましひると思ふべし扨今の經文のとく六道りんゑのうちい生とし生るものしたしきものでないものなしといふい彼の殷の紂王西伯をとらへてひそかに西伯の子を殺して身をこまやかにきりくだき羹ておくりしに西伯思いず是をくひてわが子の肉といふをしらず紂王大ひわわざけり笑て誰か西伯を聖人といふ我子を喰てしらざる事といよ〳〵惡道さかんなりと史記の文にわり是を合點しれば此西伯い聖人にてしかも子い生をもかへぬ肉をさへしたしきものとしらず我々い愚智の凡夫またくらふ鳥類肉るいも生をかへたるものなれば正眞の母親か生かいりて來たるともしらず宇治拾遺にも鴿にうまれかわりて來る人ありといふ事をかける近頃近江國に餅に成てくる人もあり紀の國に人の親たるもの那智の犬にうまれたるいなし其外かな双紙にもこれらの證據多きともろこしの書など引てヤさばこれも一日か二日にいヤつくされねばぞ澤山にあるとなりかやうにヤせば向後常住しやうじんをなされよ魚

類でもくふ事ならぬやうにヤと思しめさんがさにてゝなし是はたゞ経文のあらましをヤのじや着うりがもつて参るゝしんだものなれば此方の殺生おゝならず去ながら因縁はのがれぬほどに只みづから手に網をはり釣をされて咎なきものを殺し玉ふゝ御無用此わかちとよく〳〵合点してなる事ならばうまい事して八にもふるまむ参るがよし、かし出家たるものゝ、徳利おどじやうを入たるゝい、かなるいひわけあるも存せずかくヤ悪僧もしらば怨じて畜生のかずあまたなる事五行大義ていふ文にあり羽のはへたる物三百六十其中にかしらゝ鳳凰毛のはへたるもの三百六十中にきりんか司うろこのあるものが又三百六十龍がつかさをあす甲れあるもの三百六十龍が司裸なるもの三百六十人間がかしらなり又ある経に畜生不同なれども約めて三種あり魚鳥獸なり是一て無量あり魚に六千四百いろ鳥おゝ四千五百品獸に二千四百種ありと説き正法念経にゝ種数不同にして四ケ億ありといひあるひは金翅鳥尾頭の間長き事ゝ八千由旬のつばさ横三百六十万里に羽うつ其飛ときは塞天の雲のとしと書跋難陀龍王と須弥山をまとふ事七めぐり摩竭大魚と長ケ三百由旬七百由旬是荘子にかけり鯤といふ魚なり少きものは蚤蚊虱人の身の毛の中に住む八万の戸虫さて其外ゝ山に住川おゝ住海に住里ゝ住土に住空に住むかゐる小虫をねらへべくちおゝ又かゐるをふくし又なめくしり猪の鹿にとられ鹿また狩人おうたれ弱きものゝ弱きを供しまたみぢかきそれは長きにまかれ呑だりのまれたりくゝれたりつきあひそしあひかみあひていかりにいかりを

かさね苦しみにくるしみをまし幾度か死いく度か生れかたちをかへて苦脳をうくるものゝ何ぞ現世ゝ過去の業因未來また現在の悪心より悪所にうまれわれと我身のところをよく分別ありて少なりとも悪心をもつまじ人事いゝじ物の命をとるまに何々の宗に取つゐてなりとも未來をたすかりたしと底長賢よりしんぐをもやうし是非この度ゝ此五道六道の火宅をのがるゝやうおひとへに仏力経力とたのみたてまつると一筋に思ひとりて如來の大慈大悲のきづなにすがりたてまつらばやうやく億劫にもあひがたき身を取はなすと又もとの三途よかへるほどに日夜心得のわる事なりたゞ安心決定が大事の所がならず忘れ玉ふな又殺生について鉄鞠地ごくの糞尿地ごくの野狐の身うくる事何のかの酢のこんにやくの牛房大根のとヤべき事あまたあれどもまづ講釈ゝこれにてとめませう

○去るなまこびゐる男一休のもとへ雀を一羽もちていかに御坊このすゞめゝ生か死かいかん和尚むと答へたまふ此ものゝいとまもこゝずさりけり此心ゝ生なりといゝ殺すべし又死なりといゝ放ちやらむとの事かしらず一休其後かれが方へ行玉ひてはいり口のしきゐをふみまたげて亭主〳〵とよばれけるとき亭主出けれバ一休此藪居と出るか入るかと、ひたまへば亭主おにの返答もいゝぎたゞ手を打て笑ひしとなり

○又或とき一休かつら川をわさり玉ふに何とかし玉ひけん川中にて倒れ流をたまふに折ふし川はたにゝ人多くあつまり居てこれゝ〳〵いとひおがらたれひとりあげんといふものもなかり

しかば一町ばかり流れて幸ひ川杭よかゝりやう〳〵にてわかり玉ひしかば人々よりつどゐさて〳〵御坊は運つよき人かな何としてわがられけるやとひしかば一休打わらひてされば我川へはまりたれべこそわがりたり上りたれべこそ生たりさやで珍らしき事にゝあらざりけりとヤさるれば人々聞てさて〳〵口がしこき坊主かなとゞつと笑ひて打過ぬ

○爰に山里に或もの、つまさる男とひそかにかたらひ互に情にやかくちぎりあさからざりけり或夜のひつをにいつがいつさで斯ゝしのびなんやいかにもしておつとを殺して思ふまゝに契りなんやと互にうちとけて談合したくみ出して或夜男に酒をしゐてゑい臥さしめ夜ふけ人しづまつて後まをとこと二人してをとこの頭に針をうちてころしさて家に火とかけ燒死たる体にしうたがふ人もなきやうにもてなし死たるかばねにとりつき聲をばかりになきさけびけり折ふし一休通り合せ此女のなき聲を聞き不思儀のおもはをなしたまひてあたりちかき人にたづね玉へべしかく〳〵とかたる和尚き、玉ひて此女のなき聲ゝおそれたるてうしにて更にかなしみの聲にゝあらずふしぎなりといひて通り玉ふわとにて今の修行じやゝ人間にてゝあるまじむかしよりいまにいたるまでけんどん放逸の在處へゝ弘法大師のきたり玉ふと言つたへり定めて大師さまありとおぼえたり聲ばかりきゝてそれぞとわかし玉ふゝ奇代ふしぎの御僧かなとてみな〳〵かんじけるとなり

○世に一休和尚は天下の活僧なりしとて諸宗ともにおしなべて尊ひけるなれべ何れの上人長老もわがめ給ゝずといふ事なしあるとき黒谷へ御參りありしゑ寺中の人々一休を見奉りヤけるゝ今の世に活佛と人ごとに言るゝこの禪師なりよき折からあればいざや當寺に侍る善導法然の畫像に讃をたのみヤかの念佛無間とてあざける日蓮宗ゑ見せて禪宗の佛心宗だにかく此方の祖師は尊み玉ふと高言にせばやかるき僧おれべ定て讃し玉ふべしとヤければおの〳〵此儀しかるべしと相談してやがて一休を方丈へ請じヤ件の畫像をとり出し贊をたのみけるに案のとく易き事なりとれたまふゐ則硯と畫像を御前に出しけれゝさらりとひらき一覽のり筆をとりたまひ先善導大師に贊していわく

末法出現名二善導一　則是彌陀化身也
濁世末代導二惡人一　一切衆生易二往生一

法然上人にゝ

傳聞法然活如來　安座蓮華上品臺
尼入道同愚痴輩　一枚起請最奇哉

と卽時にあそべしければさて社とておの〳〵大きによろこび侍りて此両佛に浄土宗としてかく讃といださば家の事なれば手褒なりとて又日蓮宗があざけるべきゑかゝるうれしき事こそなけれとかの讃と日蓮宗に見せて大きに威言をゞヤける其頃はとに日蓮宗と浄土宗とい中わしくて犬のいがひが如く牛のつき合がとく眼をいからかしけれべ日蓮宗かの讃を見て大きに

ばらを立一休をそねみにくみける其中に一人やけるいやゝ一休の御心はものにかざりのなき直なる御事なりいざや日蓮大聖人の像をかゝせ給をこひて見んあれほどの優美はあるべしとやければ尤しかるべしとていそぎふためきて畫をかゝせやがて和尚の庵おもて参りて讃をたのむよしやければ元よりかるき御僧なればやすき事とのたまひ彼の畫をひらき御覽じけるに此像はさても少くかきてうそ黄なる衣をきせけるとや笑ひたまへば人々やけるいさんいかにもけつからに大きにか、せたく存いへども實は先日浄土宗法然が讃をじまん仕いゆゑ口をしくいひてとるものも取敢ず先ちくりげにか、せて参りいいそぎ讃してたべとやせば心得たりとて先の法然の讃を所々を直して

傳聞日蓮活如來　香座則是妙法臺
尼入道同愚痴輩　一遍題目殊勝哉

となさき其奥に

ぼうずく小坊主まめの粉にぬりぼうず

とぞあそばされけるとかや其頃また永觀堂の住持黒谷の讃のよしをきゝてよき寺のかうかつなりと浦山しく覺しめしかはどかるき御僧あるに何がゑ此方にも讃たのみやさんとてまづ一山の人々を呼よせ談合せられければ其中に一人やけるい何とやまでもあるまじ先宗の祖師なれば當寺に傳る半金色の善導大師の畫像に讃をたのまれよとやせば各々やうげに〳〵是は代々當寺の宝物なればこれに増したる物あるまじさらば其方使僧ふ成り玉へとて彼の半金色の善導大師の畫像を持せ一休へまゐり一休に對面してやけるい黒谷の讃のよし承りあまりにうち山しくいひて是まで参りていあれ此方の善導にも讃をあそばしたべとやければそれこそ安き御用とてかの畫をひらき御覽ありたちながら一筆さら〳〵とかき玉ひ元の如くしたゝめ使僧よわたされければかたとけなしと謹んでいたゞきいそぎ永觀寺へ歸りしか〳〵のよしをやければ扨もかるき御僧かな本望とげたりまづ一山をよびよせ讃非見せばやとてやがて人々廻しければ各々よろこびはしり集りさてかの畫像を方丈にかけ拜見しければいかにも大文字に歌一首あり其うたに

くろかちんころものすその黄ゐなるは
善導大師はこをたるらひ

とあそばしければみな人どつとわらひ興をさます人もあり感にたゑたる人もありしか今のよまで傳へて天下に一幅の名物とおりけるとかや

邪婬戒といふ事を御はなしやさんさても月日のたつゝ手間のいらぬ事入日かとおもへば明てひるにおる又八ッ七ッの鐘は諸行無常とひゞきぬるを今所に問事かなとて此無常といふ事をさへひとつ心にわすれねべ余り後生に嘆き事はなけれども世々あり〳〵と千年万年もあるべしと思ふよりおらもる罪業をつくる事なりよう氣を付て見たまへ目と耳にふる、事

一ッとしてながらへ止まる物でなく人の死別れ行はきのふやで語りなぐさむ男女今日はひなしくなり頓死いものをいひながらも息たゆるやうのとは世間に多き事あり花のちり木の葉の落ち露霜のきへ雲煙の行へ水のながれのかへらず泡のはかなく淵わせふなり或ひい山もくづれて海にあり川もくがちなり長明が方丈記をみれば地震火事に幾度か幾千万の家居もめつしあるじと家とをあさがはの露にたとへて書たるとく一物として常住なる物よりさはる物ごとみな無常なれば我命もたのまれずしかればうつかりといつも十三月に思ふてくらす内にかの無常の刹鬼がせめきたるとき俄にあいてさいぎてい詮ない事なりかねて臨終の用心が第一じや談義説法も明日の日かわると思ひもだんして夕をまだで死たるときい悔ても甲斐なき事とつねく合点したまふがよしある人のうたに

あすありとおもふて、ろにはたされて

けふもむなしく日をおくりけり

をいふにおどろかれよしれぬい人の命談儀をきくもけふがかぎりなるとおもへば一事を聞も大切に思ふ道理なれば此心得がよしさて談義はなしうちつゞいて大悲経の文の中れ種の字に心を付てはなしました昨夕のは彼の人を殺し子ところせし事に付て殺生のむくひをアましたが迚もの事に殺生戒よりついでに五戒のすがさをはなしやせとの御望ゆゑ今晩は邪婬戒の所大ていあらくやませう惣じて戒律については五戒八齋戒二百五十戒五百戒十重禁戒四十八きやう戒とて異類異形のいましめなどい梵網経四部律等にあまたなる中に儒い五常をもつて國をおさめ佛法い五戒をもつて悪をやめさせん其こゝろべせいおなじ物に侍る先此邪婬戒といふ文字いよてしまに婬をおかすをいましめらる我妻にあらぬを妻にする事を邪婬かいとやさるほどに此戒を在家戒ともやなり出家にいいらぬものかと思へども出家にもさまくあり是いたゞおのくの身のうへと思ひ玉ふがよいはづの事妻といふい女の手前から男を妻といひ男よりも我女を妻といふい男女通する詞なり壇屋判官が妻の方へある者文をつかいしけるに女の方よりの返事のうたに

さあきだにおもきがうへのさよころも

わがつまならぬつまなかさねそ

をよみこしたるは何れもおぼへのあると此やうなる不義の事をするゆゑにひかし今の代までもゆられぬ死をそるもけあまたあり何國も同じ色の不義京大坂にい殊に給草紙に賣るゝものあまたあり現在に恥をさらすい浅ましきをなり扨未來の事は経文の邪婬の罪衆生として地獄がき畜生におちもし人の中に生るれば二種の果報を得る一には婦貞良ならず二には二の妻相爭ておのが心にしたがゝずと説玉ふはじめの婦貞良ならずとは今生よて人の女房をぬすみたるもの後生にたまくく人間とうまれて女房をもちても其女ひたと又余の男にあひて我心ゐしたがいずとなりそれゆゑにはらをたて、又間男めをおさへてくゝつてと心

意のはひらをもやすやうゐるを婦直長おらず といふ義ありこれみな報ひやうのしなをわらいすもの二に兩の妻相あらそふとは或い本妻の手かけをねたみ妾は本妻をそねみ針をうちたりどくがひなんどしてそねみねたみたるい大きゐる禍ひとゐるまをゐ國に認言の臣下あれば君かならずほろぶとい聖人のをば下々に多きものいま婦じさかいなり大きなる壁をしてつかみあふやらなくやら敵がねをはなにかけて後はづかしきをわすれて常いかくす事もわめきちらしあたりほとりの外聞も方便もかへりみずとがもなき鍋をわるやら釜をなげはるやら道具家材たまつた事なし何事うと思へばかのりんきより事おこりての騒動これは、やとてもかんにんもせまじ又そはれる時宜でもわるまじとおもへばいつの間にやらなき寝入してたつた一夜のうちに中直り何の氣もないかはしてゐるせつかく人いあつかひ中直しのときは角もはもるきつ相して明朝はそれに引かへ小ばなしゐるとさて〳〵おかしい事と人の指さしをして笑ふをしらねといふ其人もおのが非わ見へぬものにて何國の夫婦いさかいもみなにたる事是等のものいひ口舌がわれば面々家職におこたりていかはど損のたつ内證のつぶれやらしれず然どもたび〳〵有もゑに終に家のほろぶるずいさうといづれもおもひあたりあるべき事也それまでい遠い事先此邪妬戒といふ事い天下の御法度なれば道を心ざし義理をたてんと思ふほどの男い念もないはず是等の非道いせぬ事とや一心さへみたさねはそのさよひのやひといふはなしをゆさん

○正月元日より三日の元一といひて歳のはじめ月のはじの日のはじめなれば一天四海の人々のかしこきも愚なるも愁ゐるも愁なきも貴もいやしきもいはひよろこばざるなく屠蘇白散にいどぶろこなりとも鏡につけ御鏡をハるとて尻もちなりともつきでそれ〳〵にいいひませるありさまい誠に昨日にかわりたるにはあらねども空のけしきものどやかに霞わたり大路のさま松立わさし家にい長き代のためしとしめ縄ひきめぐらし昨日夜の半過るまでい人の門打たゝきて何事にかあらんこと〳〵しく足を空にまどひたるもたゞ一夜あけぬれば引かへ心もゆ〳〵と又晦日の來るべき心もあく野邊の小松よ千代萬世をいいひそめいつ死ぬべきものとはなしに万の事といみをそれ朝の露ゐ名利をむさぼり夕の陽に子孫を愛し蟻が茶うすをめぐるがとく同じ事をくるり〳〵と五百七十年七まがりといいひて世を秋風の心い露ちりはどもなき人心を一休おうしく思しめし誠におろかなるかな朝がほの日蔭待まもさかり久しき花どながめかけろうの青天ゐ羽をふるひて樂しゐ間もなき世中に蓑に箔ぬる正月とばさゞ時の間の煙となりなんと打見るよりいで物見せん人々よと墓原へ行て髑髏をひろひ來り竹の先につらぬきて正月元日の早天に洛中の家々の門の口へさいとく〳〵と彼されからべをさし出し御用心〳〵と歩行ゐまふ皆人いまいしくとて門さしこめて居けるより今ゐ正月元日い門戸をさしけるなりといえりしかるに一休を見參らせて或人のいへるい御用心とい尤しでくゐりたとひいはひかざりても終にはみな人かくのとくされども世の習にてかくいはひよろこぶ折に其

むくつけなきしやれかうべをば家々へ出さるゝ事はいちがひあらずやとおもはれば是れよ我もいはひて此されかうべを各に見するなり目出たしといふといかゞ心得けるぞやむかし天照太神岩戸をひらきたまひしより事おこるといへども此されかうべより外に目出たき物はおしとてよめる

にくげなき此されかうべあなかしこ

目出たくかしこくこれよりはなし

是見玉へ人々目出たる穴のみのこりしはめでたしとそいふなるぞ皆人かくとはしるらめどきのふも過し心ならひにけふとくらしてあれか川の淵瀬つねならぬ世也とは目に見ぬはしに風の音にもおどろかぬ人々に用心せよと思ふてたゞ人ゝ是におらねば目出たき事ゝ何もなしとのたまへゞ諸人これを見てさても賢き聖とておがまぬ人はなかりけり

○一休のもとに犬あり或とき子五つうめり其三ッの子のうちひとつを親いぬにくみて乳をも自由にのまずしていがみくひふせけり下人とも此親犬をにくみうちけるがある夜和尚の夢につげていふ我身は前生にてかしいといひし遊女にて侍りしが五人の夫を持てしひしが四人ゝをになさけある心ざしにて淺からぬ思ひしが一人はいつはり心多くして却て我をわづらはしくせし事さび〳〵侍りしかば心にくゝ思ひながらうち過ぬ今此五ッの子はかの五人の夫なり四ッはむかしのなさけ深きが故に乳をのましめていとをしく思ふ也一ッゝ我をなやめし夫なれゞ乳をさへのまさん事心にくゝいひてかく當りしなりとはまやかに前生の事をわり〳〵とかたりしと一休旦那のうちへはなし玉ふと也

○七條邊に有徳なる町人ありあるとき佛事供養のため諸出家はゞに及ばず乞食までもかくのごとく慈悲をしけりあるとき一休をゞ入しもゝ〳〵不審ども尋ね次手に問ていゝく何れをさして善としいづれをさして惡とするや和尚こたへていゝく善惡かさりなし只善惡をしらんとならば其よし惡をなすみなもとにあるべしかれに行て尋ねよと答へたまへゞ亭主尤と感じける扨和尚たち玉ふ折ふし雨降ければ亭主暫く待て雨を止玉へとゞは一休ゞされゝるゝ

ふらばふれ降ずばふらずふらすとも
ぬれて行べき袖おらはこそ

と言捨て出玉ふ

○加茂河ちかき邊に五郎右衛門とゞものありかれがうちへいつの頃よりか犬一疋來しが打どもさらずある日人を頼み二三里外へやりけるが又歸りゐける此度はとらへうち殺しすつるにまた同じやうなる犬來るとき夢見あしけれゞいかゞ心もとなくおもひ一休へ參りくだんの事を一々はなしけるに和尚のいゝくもめ〳〵其犬にあらく當り玉ふなそれゝ其方が前生にてその犬のものと負つひにかへさずして今人となりいぬとなりてこゝに來れり全くわたくし事ならねゞすつるともころしたりとも業力は成あれゞ其家ぞはなるゝといふ事あるまじ實々

うしなひさくばかれに米一二斗はどあてがひおきたまへ喰尽たらん時はかへるべし左なくば何ぞおすともかへるまじとぞ敎へ玉ふさらばとて歸りて米をあたへ置けるにある夜の夢に汝われをなやまを事たび〳〵なり打ぞもころすともうせまじされども今はあの佛和尙におしへられ我をはぐくむ事まんぞくせりしかれば汝がもの喰尽す事やう〳〵一斗ばかりあり其間は我につらくあたる事なかれといふと思へば夢さめぬ此者いよ〳〵おどろきさては和尙のとしへに少もちがはざりけりと猶々じひをほどこしけるに彼がいひしとく一斗の米なくなりてのちくたんの犬かきけすやうにうせにけりふしぎ成し事なり

扨知恵にまよふ女意といふ事のいもろこしに林茂先といふ人ありしが學文しやなれども前世の因果がいかにしても貧にくらされしが其隣に大きなる分限者の文もうなる仁の女房わが男の不學なるを氣のどくがりかの隣の林茂先が才覺にほれてある夜ひそかに忍びきたりて學文のさどをはと〳〵と音づれたるに誰ぞと思ひてさしのぞけばどふしてこふして執心でござつてと袖にあまる涙をつゝみかねてかくさまよひきたり侍るとふかく思ひ入たるやうすにてくどきけるをたをぞと見れバとなりの内義也もとより器量も人にすぐれとに金もちの奥さまおれば我がやうに貧なるものがこちから戀したるとも今どきの後家さへ承知をまじきこれいかたじけなき事御意はおもく下地はいやでない事夢かうつゝか最早人しづまりわたりに誰をはバかるものなし明日い閻浮のちりともなれこれはじきに及ばぬところあんと若ひ衆此やうな事があらばなんといやどいやされまじまあ十人が十人あがら飛つくところと此林茂先じつとこゝろをしづめしばらく物もいいなんだがさすが學者といいるゝはどあつて皿ほどな目をむき出しかの女房をきつとよらみつけ去とては其方は人でなし妻一人もちて居ながちかゝる仕かたの淺ましや天地がくつがへるとも道ならぬ事を某はいたさぬぞはやく歸られよとまぞふたはたとさつるとき女房はなみだをながし是はどに申事をつれなくもかへし玉ふかせめて一夜なりともなげきてたちのかざりしを林茂先はしり出て孝下に冠をたゝさず瓜田に履を直さずとこたへまたなまめしきくどき事をとて小がいなとつて引立かへしければ力およばず〳〵とたちかへりぬ此林茂先い其明る年つひに官位に經立り菜花にさかへける道をまもる人のこゝろはいかふちがふてゐるでいないか今どきの物讀でも道を聞ても耳と口とにおぼえて居ながら不義おる事には結句もんもうなる男の律義なるには劣りて惡事をするがちなり是を世話にいへる論語よみのろんどしらずといふい此とならん皆さまかたも朝晩口でい結構言ぜられんかそれい世話しりのせはしらずといふ物ぞうし面々の身のうへい棚へ打あげおきて人の噂いいひ安ひものでござる又利口さふ申拙僧もこれい同じ事なり人の身の中でかしこひものい上下二まいれくちびると舌はうりおそくても大事ない事心と身とに先おこないせられよ此心か万事に通る肝要のところでござる或經に人となつて他の女をぬすむものい鴨にうまるゝと說玉ふは何だる因果有て鴨に

は成ぞと、へば鶏のきじにのといふのはめい〳〵に雌鳥を一羽づゝか、へて道をたゞし鳩といふ鳥は別て其やうなる事のきびしい鳥にて都にハない田舎でハ飼鳩ともひていろ〳〵羽色の見事なるをわつめて家を作りあらべ置にもし雄鳥のゑをひろふ内にも隣の鳥留主のうちにちよつとのぞくを見ると其まゝとびあがりて其男鳥をくひころすほどにせちがひ又わが女房鳥もつゝきさはりせちがふハいかさまとなりの男鳥のゝぞくからは合点の行ぬしかたといハぬ斗それは〳〵少々にても其けぶらひなる事もならぬに鴨といふ鳥は池やわせ道にいかひ事むらがり居るに是ハ誰が女鳥これはたれが男鳥といふともなく常住ながれをたどるやうに一日に男鳥の十羽や二十羽といふかずをしらず男鳥もまた女鳥の五羽も十羽も〻ちてわちらこちら相逢ふこれ此身になるものハ何が成とおもへばかの間男したるもの女房をぬすみたるものがみな此鳥るいに生る〻としりたまへ此やうなものに生たくバ好色のわるひ事を折角して思ふまゝに不義をなされよ御満足でハべらん誠にわずかなる樂みに永劫のくるしみをまふくる事はあまりに思かなる事なり遅たる事ハかへらず今より思案して見たまへ別にかハる事もなく刹那の娑樂に現世後生をとりうしなひ苦しむハいたましさと一分別して見やうならばこゝじやそれに付去所に男女より合おかしきけんくわせられさはなしといふて聞せませうか先未來の物がたりを一すいたさふ

○或人一休に問いハく人ハ死て躰なくなりとつれ共魂ハといまるとヤがさやうにてもあるやときはたましひが死なずにあらバ躰ハなくとも矢ばり其まゝ居て物がたりなどもしさふな事にてあるまじきか何れふしぎなる事にて我等が存るにハ佛に成たるものはたのしみにはこりて爰の事をば打わすれ來べき心は露もあるまじ又地ごくへ行は鬼どもにかしやくせられ隙少しもあるまじ又かやうにて未なきものやらん世中に妄盡として死したるもの〻來てさま〴〵の事をいひなどすると承る何れ是はいかなる事にてハや和尚のいわくされバわれも其儀はしらず候へども若きとき談義などをちと聞たるが誠からそかしらぬたましゐといふものが有て佛とも鬼とも成げにハそのくせものがゑんま王とやらんの前にて公事奉行の手にわたりしやバにて作る罪をくろ鉄か赤がねかはしらねども帳とやらんに付ておき鬼に見せてまづ是程の罪人なり急ぎ糺責せよといふに色々の鬼どもが受とりてさま〴〵のせめにあはするよし〻やバにて作るつみはどせむるといふさりながら毒藥へんじて藥となるといふ事あればさのみつみの多きもあながちになげくべき事にはあらじと見えたりかくいひしときは

作りおく罪がしもみはどあるならバ
ゑんまの帳につけどころなし

とあるときは鬼といふものも鈍なものの為り釋迦が一代の藏經はみな人間をいためんがためなりあらつらにくの釋迦どのやいろ〳〵のうそをつきおきたまへりそれハて、へば一字もいハぬといひ玉へり又さふかとおもへばしもつさんの語には一佛淨土くわんけんぼうかい卿木國

士悪皆成佛さう木も佛になるともいひあちこちとひた物に身ぬけばかりいひおちし人間ハ永代まよひの身にちかうしてありとおもへば又うたふも舞も法の壁柳はみどり花はくれなひあらおもしろのはるのけしき

しやかといふいあづちものが世にいで、

多くの人をまよハするかな

○去ざしきの天井に蛇をかきておける其座敷にて酒を飲けるゐ盃の中へ給のうつりしをのみてそれより煩ひけりある人きたりてわづらひのやうをしかくの事にてそれよりかやうにわづらひ玉ふよしをきけりと問ふにいかにも其通りなりと答へければ或人のヤさるゝハ左やうの事あらば何とも氣分あしくておきふしも是のみ心にかゝりてわづらひとも成べしさりながらさやうの事ハ一休和尚へ行て子細を御たづねあらばしかるべしとヤさらばとて參りしかくの事にてかくなやみヤ也いかなる事にてハや和尚の御しめ去に預りたくぞんじ是まで參りていとヤければ一休聞玉ひやがてしめしたまふ其語にいわく

まぼろしを知即敵はゝうべんをなさず一切のしよはふは皆是まぼろしなり何なれば水中影像をじつありとおもふや愚也早くなんぢが自心をあきらめよ

とて扇をもつてゝうくはたと打玉ふまづ右のこゝろはまぼろしとしりなば方便は有まじ一切もろくのなすわざは何事によらぢみなくうなり水のうちにうつろふかげをみて實のじやなりと心得やまひとそるそれおろかある心なり早みづからの心を納て見るときは實か無かあらはるべし其心納るときはすなはち病本服すべしとしめし玉へば此ものやがて得通して誠によくくしあんするに天井に給のあるといふ事思ひ當りそれよりして心すきとなりやがて本ぶくしけり何事も善悪の源をたづぬるときは心の一ッより生ると見へたり扨てこそ三界唯一心といへり

○伏見深草の里に森木善兵衛といふものあり其内ふつかゐる下女もとより邪見の女にて朝夕の飯の殘りをひさしとて非人にも呉ずして皆堀へ捨しに其ことくに皆蛇となりてはひ歩行家内へ這入しかば家内のもの人々おそれいか成をやらんとひしめきける其折ふし一休其近所へ來り居玉ふよしをきゝてやがて使をもつて請じ奉りことのよしをかたるに和尚きこしめし扨くゝそれハ笑止なる事かな是は此身上のくづるゝ瑞相なりそれは全く蛇にてはあるまじ皆飯の殘りしを捨し勢ひなるべし其蛇をのこらず釜へ入てたきて見るべし必らずめしとなるべしとのたまふさらばとて教にまかせ皆あつめて鍋に入一休經呪をじゆし玉ひたかせたまひしに成程きれいおるめしとなる此飯をあの女ヨ殘らずくひ尽させよ少も殘るならば身代あやうかるべしと仰らるゝさらばとてかの女にくはせけるに皆喰つくす事ならずして又かくしてをつる此下女あるときおのれが在所へかへるに道にて蛇にさゝれ死けり日をへずしていくゐもなく

して天罰あたりうせしはおそろしき事なりさるはどに一ッぶにても喰殘したるあらば決して
おろそかにそべからずとて和尚旦那方にて折々御物がたりあるを今こゝにしるす
さて男女いたづらの評判ありしを御はなしやさん此ころ町を通りたれば四五人うちよつて
何やらんせんさくしけるを聞べ世中に不義をして浮名おがしたるもの、事を評判して一人
の男がいふやうゝ世に女はどいたづらなるものはなゐ一人のをつとよ定まりて居ながら不
義なる事をしたがるはもだんがならぬ世界じや七人の子わなすとも女よ心ゐるすなとはよ
ふいふた物といへば一人の女房はちをたていや〳〵それゝわるひ了簡でござる男といふ
ものはどあさむかない、たづらおるものはなゐ我手前に女房一人もつて居ながら人の女房
をぬそみたがるは正真の生盗人じや其くせよ男の心と川のせは夜に七度かはるとはよふい
ふたものと云へべかの男ちとせゐていや〳〵男と云ふものはおどけも云ふて見るものじや
に合点する女がいたづらものと云ふ詞の下よりいや〳〵女の方から盗でくだされと云ふ女
房がいづくにござるどふしても男がわるゐ、や女がいたづらものとたがひに大きなけんく
わになり其あたりがもや〳〵にへかへりなしたこれゝ埒のあかぬせんぎにてゑ侍らぬかな
んぼ男が口説たとても女が合点せねべならぬ事なりたとへどのやうなよき男が火をくへと
いへべとてくひはせまひが下地がいやでないから御意はよしとつひらちもなひ事になつて
いけるされべいひかける男かひとりわるゐでもなし女もまたあしく世の中にはまたなるは

ど律義なる男に女の方より弥などやりてくどきかゝるかあれべそれも一かゐにいはなしか
たしつまる所はどちらへもかた付てきず付られぬ二人ともゐ悪と云ふがよき了簡とゐふも
の也是程におきとさへ二人で埒を明でかなはぬはとかく互に心をひとつにしてしめし合せ
ねばならず千人万人の中でもせまひとおもふ事は我心ひとつでたしなみやすし此鄙をよく
合点すればどちがよいわるいのせんさくはいらぬと思ひ玉へ然ども人にそゝのかされぬや
うにこゝろをもつものゝまれなる事なりみだるゝ心のうは氣なるは、おをさらす高いもひ
くいも身を持そこなひ恥ちじよくをもふくる事と皆此やうなよわき非義なる心よりおこる
事なれば若ひ衆はよく合点めされて大事おりとおもひたまへ女の心もちはうへは栴柳のや
さしき枝に春の雪つもる如くよは〳〵とはのめき心の内は石金かもかたくもち玉ひてかり
そめにもあだなるふるまひをせぬやうに化粧ものこしにも氣を付たがよしとさる上つ方の
教訓の文に遊したるが眞實なれども今どきゝ皆さかさまにして上はかたく見せ内心はよは
く心得るはひがとの第一じや女義に善悪のこゝろやきかせませう

○爰にはなしあり某とかやいへる人の奥方相果らをけるよ今端のときの遺言よわれら此年まで
佛とも法ともしらずしてかく成はつるなりことに女は引みふかきよし後の世いと心もとなし
承れべひらさき野の一休さまは今の世の達广とやらんいふなる間我等が引導をべ和尚さまへ
たのみ奉りて得させよと念頃にいひおきしかべ妻子ない〳〵一休の草庵へ参りて其由をかく

とヤ上げれば其年まで佛とも法とも知らずば大かたの事にてとうかみがたし去ながら我等が一句をさづけすくふべきなり水葬にせん間鴨川へつれ行とて其まゝ座を立ち打つれ川のほとりになりしかゞ其死人を出せよとて和尚かの死人の首に繩を付けひつかたげて川岸に立てのたまはく

河ふねをとめてあふ瀬の　なみまくら。うき世の夢を見ならはしの。おどろかぬ身のはかなさよ

とて川へざんぶとなげそてはや一かへり玉びける妻や子どもおどろきて御氣も、しやそゝろなるかこの一句は江口をうたひ玉ふおりかゝる事にてはうかびがたしとてかの死骸を引あげ念頃にをさめてある寺の上人にねん導たのみければ其宵よりかの夫も子もさゞめくにわなゝき夢見けるは一休の御引導よてうかみしものをよしなき上人の引導にて引もどされて中有れば旅にまよふに又一休さまをたのみて我をすくはせたまへずば夫子をも取ころし手を引て三途の川を渡らんとまでつくと夢さめぼろしに見へけれゞ是はとおどろき一休和尚へ參りて其由をしかくと申上げれば我よく引導せしに又異人をたのみしもゑなりとてふたゝびかへり見給はねば覬子のものさまくになげきしかば扨も不便の事やとてうつみし死がいと堀出させまた加茂川へかたげ行川岸に立て一首

大水のさきおながるゝとちがらも

身をすてゝこそうかぶせもあり

とてがはとしがひを川へなげすてかへられけれゞ其夜親子の夢ゐありがたき御引導にて今こそうかみけるぞとて白雪にうちのりて西の空に行けれゞみな人ありがたくぞ覺えけるとなり

○一休和尚山姥のうたひを作り玉ひしときひえい山に中よき人おわしければ談合に登の玉ふとゝ傍われば衆生あり衆生あれゞ山姥もありといたしける此次をいかゝはせんとのたまへゞ彼人もさすがの人にて定て柳は見ぎりとなされつらんと有けれゞ一休さてもよく推し玉ふものかな柳は見ぎり花はくれなひの色々扨人間に遊ぶ事と仕らんとのたまへゞさあそといひて興せられ誠に同氣相もとむる心ざしいとはづかしく思はれけるそてよき次手なりえい山の堂社を打みめぐり玉ひしに山法師とも是を聞て一休はかくれなき能書なり何にても書てもらわんとて手に〳〵硯紙を持きたりてたのみしかゞ一休思しけるゝ聖道のあて字とかや定て文盲なる法師ともならんと何がな書て取らせんといかゐもよみがたき一句さら〳〵と一筆に書ちらして遣されけれゞ一山の僧よりあつまりかゝる能書の名僧此山へ來る事は後の世までも寶物とも成べき語をかゝせ置べしとて其中の老僧のいへるゝ先より各かきてもらひけるは一字もよめず又語も余りにみじかくて此山の寶とも成がたしいかにも大文字にて長く書てさべよみがたきは有ても詮なしいかにもよみ安き事とたのみ奉ると一山ともに望ければ一休のたまひけるは紙筆は候か中々古へ大師のあそゞしける七八尺の大筆あり紙は何ほどなりともつぎヤべ

逆茶と
はさく
酒又
ゑんの
とも
ちろの
いろ有る
ゆ丸若の
うた

しとヤされければさらば紙つがせ玉へ御望の通長々き大文字を書よくよめるを仕べしいそぎ紙をつがせ玉へとありしかば何ほどなりとも紙は御のぞみ次第とてひたもの長くつゞはぎよえい山の金堂の前より坂本の人家までおが〳〵しくも紙をつぎけれバさらば筆そめんとて墨たつぷりとふくませべたと紙へかき付て一さんかけて不動坂まで一筋にひかれてよめるか法師たちとのたまへバいや何ともよめずといふ又墨つぎて不動坂より坂本まで一筋にはしり引にひきつゝよめるか〳〵とわめき玉へバ一山の法師たち肝とつぶしいや何ともよめぞといへば是ハいろはのあさきのくだりにあるしの字なりながゝとかきてよめやすきは是也とのたまへば若人衆をさまし扱も聞及しよりおそけびと一度にどつと笑ひて興しけるとなり今の世をでも其しの字ひえい山の寶物となりて有けるとなり山法師たちも望し事なればいやともいハれぬ御作意とみな感じけるとなり

前夜ヤおきまし た女の賢愚の心れもちやうとヤいさるところにうまれつきのうつくしい女房衆がありしに亭主の留主のうちに行し人わつて内々笑顔よき内義なればなるべき事と思ひよさそさと〳〵くどさけれど女房何となさ顔にてそれハ添なき御執心其うち折をのわせて御談合ヤべしといふに男うれしさかぎりなく此上は亭主をたらかそまでの事と前方よりむつまじくとさら亭主もまづしけれバ無心もいハぬこなたより金銀に氣を付て借などしけるに男ハ其心いけとハ夢にもしらず後日のため手形書ヤべしといつば彼の男隔心なき

躰にて合力ととあまりあなづりがましけれどたゞやりヤべしとて金の四五両もつかはして二三十日も日かずたち男のひまを心がけてひそかに内儀にちかづきせんどヤたる事御談合せんとヤされたるは何と談じ合も今宵はどよき首尾もなしとしなだれかゝるを女房かたちとたゞしされバ談合とヤは御ぞんじの通り私も男ともちたるうへは我身ながらも我まゝならずこなたの望のとふりを亭主へ談合して見るべしと思ひ先日よりいひ出すよすがもなくてとやかくと思ふうち遲なはりヤたり今少しまちたまへ明日は亭主と談じ合亭主のもるしを受たらば御心わしるがひヤべしといふに此男大に驚き談合とは御亭主との談じ合かそれハ何とも迷惑なりさて念頃になすなかに不義なる事をいひかけしとさげしまれんも迷惑なりとに短氣なるうやれなれば我等が命にかゝらんも云るべからずされバ此事ハ決し思てひとゞまりかさねて申出すまじ必らず御亭主に御さた御無用なりとさま〳〵とわりてかゑり其のちはたま〳〵行ども此女の手さへもなんとなくはづかしくありて後々ハ終ハ遠ざかりましたなんと此女はかしこい女房と見えました又人によつてまた〳〵不義をせまじと思へバ人の害わなるとも思はずたけりまとる人あり去年の冬であつた日ころ念頃に出入いさす者がひとり來て語りまするは夕部さる所わて二三人はなしに參りましたが元來心易き方も名夫婦の衆と一緒よこたつへあたり四方山の咄しのうちひとりの男そさう者にていかゞしたりけんかの内儀のぶとも、のあたりへ手か足かさハりたさふにござるが、の内儀

其まゝこたつをうづら立といふ物にばつと立て八の女房にキをさすは覚期してしやるかよ女のといちとちがふ所こそ多きに男のあるそばこれはなにとしたるじたらくぞやいたづらな女にはそのやうな事したらうれしかろうはんに木のそらへのぼりやるなと大聲上て勝手へはいりましたが此手ざした男たれと知らねど自身に覚れゞ顔に血をあげ巨たつの檜にひたいを付て夢になれとめいわくがるわたくしはそばゝ間何とあいさつのしやうもなく汗とたら〳〵かきゐたるに亭主はさすが世間をひろくいる人はどあつて惣じてゐの女は少しの事をも仰山にいふものでござる此やうによりこそつてあたるからい手もゐしもさいるまひものでないふぎやうぎなやつにてはなしのじやまをやせしたま〳〵おの〳〵遊び玉ふに無亭主ぶりなとかく何れも御かまひあさるまじさて今のとなしの跡はどふでござつたといれしにやう〳〵色となはしかへりましさがこれは何と賢女といふものでござるかと問ました此やうなる悪な女もある世の中これほど人にさすを付めいわくがらせいでも女のみち立ふとおもへば何のさたなしに我胸のうちにてすむ事なるにいかに間男をせぬと云ふ潔白を見せんとてたけ〳〵しく是はゐまりなる事也能々合点してみれゞ此やうなひんしやんとはねさいる女が結句内しやうでいたづら事をしてゐるものじやとさる人の云いれしもかくあらん事ぞかしとかく女は物事しづかに只心の内ひとつをかとう持が道と云ふものでござるこゝをきつとのみこんだるがよしと心得べし成賢論の偽ゐいく愛欲無厭鹹水を飲で轉其喝を増が如しとあるは此色欲にふける有さまは塩のからき咽のかゝく物を仰山ゐ取こみひたもの湯水をのむ物のとくのんでも〳〵あたる事なきは丁どそのやうなもの又たとへていゝ犬の祖骨をかむにひとしと有は犬がひだるきあまりゐ死人原に入てしやれたる骨をくらふにかたきものなれゞ己が口中をやぶりて血の出るを知らず此汁は骨より出ると斗覚て終に舌も咽も己がでにくひやぶりて死すといふに似たりかつへたるときにいあと先覚へずくらふは愛欲さかんになりてかんにんならぬと何の事もうちわすれて主あるものをも盗み終にはなんなくとらへられてはじをさらし世の人にうき名をうたわをて我身を我心でころすと此まよひの一つとしり玉ふべし恋の源をさがしてみれゞ濟とにごるとのふたつなるは次ゐ御はなし申さふ

○さて御目のさひる御はなしヤそふさる田舎人はじめて京都一見のために登りけるに或人のいむけるいその方京都へ登らるゝならゞ文を一通ことづけ申べし所も名もしかとぞんせず定めて都い通り〳〵明らかゐしれ小路〳〵は猶しれやすきよし承る何方にて尋ねいとも心やすくしるゝと申し間此文をまゐらする口上にても申きかすたしかゐ覚えられとゝけ玉へ則名いさにし秋北春南五百の涙の立かへるとたづね玉いれもし口上わするゝ事もあらゞ此文と見せて尋ね玉へとて渡しける此男文盲なればいふより早く忘れさて都へ登り文をとり出し人に見せけるに讀もの有ともことばりのとふりしるものなかりける此男申やうさて〳〵きのどく

なる文をたのまれしものかな是をとゝけをして歸りたら賴まれしかひもなくふがひなしといれんもはづかしたづねんとそれば埒明すとやせんかくと案じわずらひしがある人申やう此文を千日千夜たづねらるゝとも合点そるものありがたかるべし所詮この文をもち是より北西にむらさき野といふ處に一休和尚とて名智者のまします此僧に尋ね見玉いゞ發明にまします ほどに定て教玉いむ早く參られよ先都ひろしといへども是を合点し沙汰申ものいかつて覺え すとかたるとき此男さらば其紫野とやらんおしへ玉れといふにくわしくおしへけるやがてたづね行き此よし申ければ和尚弥の上がきを御覽じて是い都の烏丸通りどこそこにて雨や千阿彌とたづね玉へとくわしくをしへ玉ふ此人さて〳〵かたじけなしたづねまゐるべし、かし此義理をとてもの事にとき、かし玉へと申ければさよしあり北と南といふときはみなあめ也五百は涙の立かへりといふ時い五百をふたつ合るに千なりさてなみとかくときい雨やの千なみとならでい讀くだらずとをしへ玉ふ

○又和尚御在世のとき下京松原通中ほどに制札あり其札のこしらへやうは板を丸竹にはさみ其竹のように錢を一ぱい入札の書やうい

一餅食たがるもの、事

一酒すひたがるもの、事

一茶のみたがるもの、事

右之通くひたくば買て食べし只世中い皆錢也已上

年　號　月　日

かやうに書付立ありしが一休折ふし通り見玉ひさて〳〵めづらしき制札いかさま是い子細あるべしと立よりうかゞひ見玉ふに世の常のせいさつといかはり柱を竹にてこしらへたりしい心ありげに見へたりとて供れものに汝いこの札を取てかへるべし我少し思ふしさいありはやとく〳〵と仰らるゝ男ヤやうい是い和尚さまとも覺へざる仰られ事かなかりそめにも是い定めて公儀よりの制札ならんしかるをひげに奪とつて歸らゞ後のわざいひいかゞあらん我等に於てい御めんあれとヤける和尚き、玉ひ尤も汝がいふい斷なれども去ながら子細としらねば道理なり先此札をはさみたる竹の内に錢あるべし此札をうゞひ取べしとの書付なり早くとりてかへるべし若た、りあらゞなんじが身にいとがいかくるまじ此一休が心にまかせおくべしかづい我あたまをまん丸めし身なれゞ半錢も身にい付じみな汝が穴一せに、とらせん早とれ〳〵とす、めたまへいきやつもはしくや思ひけんさもあらば取べきとてはしりよつて押たをしまづかなめを引てみてあつばれ和尚い神通にてましますとよろこびいさみ打かたげそれ世の中にぬれ手であいをつかむといかやうのことをいふらんとてちどり足にてむらさき野へぞかへりける其後公儀に此札を一休うゞひとり玉ふよしはのかに聞めし和尚へ使を立られけるゆ和尚かしてまつてやがて目代へ上り玉ふ奉行のいいくいかに御坊何とて往還に立し札をうゞ

ひとられけるぞ一休されば制札のおもてを見しに餅酒はしくは買てくふべしよの中にて錢があるほどにとか、れ候扨も御公儀は御じひにましますかなとありがたくぞんじ殊に頁僧の事なれば取てかへりて候とヤさる、奉行聞しめし根本これは君より御じひのために國々にたてられ此書付の面をよく合点いたしたるものゝ此札をうばうべしとのしたくなりよし〳〵歸へり玉へかしこまりて一休はむらさき野へぞかへり玉ふ奉行の曰さても〳〵あの坊主ならでいかやうのふだを引ぬくべきものゝ覺えもたとへ心を知りてうばひたく思ふともとやかくと思案しあるひは世間をとゞかり即時にうばふべきものゝまれなるべきに何のはゞかりもなくうばひしはきたいの坊主かな末の世ゝ至るともかよふの坊主と二人ともあらじと感じ玉ひけり

さて御約束の戀の源と申御はなしいたしませうまとに人の身を觀じて見れば地水火風空仮又合してうすきかゝのうへゝはりたるところゝ男女のかはり有て美人もあれば見にくき人もへだてあれども彼一重の下は高きもいやしきも不淨穢らはしきうみ血のくさきを包むる斗畜屋に似たりつぼに色々のさいしきをして畫をかきて見事なりと思ふなかゝ囊を入たるがどくむさきものとのたとへなり先男女の八穴九穴とあるまづあたまに目二ツこれもやにといふ物がながれ出としよるにしたがひて常に汁が出耳にもあかの出るを長崎療治といふ唐人のすがたしたる男が何やらん陳ふんかんといひて誰なりとも耳をよくしてもらふとき見れば異るい異形のものが耳の中よりわきさけてもくさくきたなきものが出るこれも不淨なり鼻からは青はなをたらし口よりはよだれをながし或は口ねつありて人によりてはさしむかひにはなしもならぬほどくさいにほひがする物もあり其外戀といふ其みなもとをたづぬれば濟とにごるとの二ツありて頂上よりあなうちまで一つとしてきれいなるものはなしそれをたゞ有がたがりて戀しがりたのしむ凡夫の心を佛は見通してさてもかゝいの衆生や誠にたのしみといふは此穢土をいとひて極樂といふ國に生れてむさいともひだるいとも思ゝでくらす極樂をいやがる事のむざんや何とぞしてすくひとつてやりたいと思しめせどもかの〳〵我等ゝたゞ此世界のみに煩腦さわりに戀をましていつまでこゝに遊びたゝむれ能事かしたしと斗思ふより種々さま〴〵の罪をつくり又しても迷ひふまよひをかさねてはなるゝ事がならぬは此邪婬といふひとつより事おこりてのせんさくなりかもへばむさいものといひ少のまの歡樂に未來惡道にだざいして長きくるしみをうくる事はやうもおいものぞき扨邪婬といへゝ人のつまをおかすべかりかと思へばさにゝあらじ子をはらみし女をおかすも邪婬の内乳祖母を犯すも邪婬あるゝ非所といひて寺道場の内在家を持佛堂のあたりさて非時ゝ盈や彼岸親先祖の命日逃夜さていわが女房の心ざしありて精進する日持齋のとき、かゝぬ男何の大事かあらふとて犯すも邪婬また非犯とて若衆を犯すも邪婬のうちなりとある經文に佛の說玉ひたりしかれば今どきの出家も男色をおかゝゝまだ手がらのやうに人もお

もひ其身も殊勝なる心ざしてあると自まんしらるゝ少と合点のしぞこないかとおもへばそれにはとり得があるといひ分をかし先此やうなとまで邪婬戒といましめ玉へば覺へて居たるがよし何と息もすきもならぬ御制戒これ〳〵さたかるいと戒門についてそれ〳〵四重四提二不定僧殘滅諍舍陀單陀五戒八齋とてどうもならぬつとめが侍る爰が了簡の付どころき、玉へ五戒の事はさて置き一戒も半戒もこのやうな六かしき事あれば見ぢんもふもつ事ゝならぬしかれゝ佛にゝ得なりがたしこの法師も咄してきかせまするれどさとらぬ内ゝ心もとなしさて經文などみたまへ女犯は七百生三途におち非犯ゝ五百生惡道にしづむとあり女犯といふゝ女をおかす事非犯といふゝ若衆をおかすせかひに人の數何万何億あらふやらこの二つをおかさぬものゝ有まい然ばいちにんもほとけになる事いさておき皆々惡道へおちませうおか〳〵落るにきまつた事いかにとあるゝ佛のいましめおかせられたをやぶるから

ゝおちいで叶ぬ事さだめて惡道れせめゝ往生要集其外方々談義講談にも聞玉ふべきがこゝいともくるしいともいやといゝれぬかしやくにゐひやすと思へばそこへ落せいとて多年後生をねがひ寺參する事じやがとかくゝ我々ぼんぶの力で地ごくへおちまひといはれず佛ぼさつのゐりがたいといふが大事の所なるぞ然にあみだ如來末世濁惡愚頑なる惡業ふかき身の一戒もゝたぬ惡人三世の諸ぶつの手をうちはらひ玉ふ凡人をそくひ玉ゝんとの御誓ぐわんむなしからず不取正覺とちがひたまふ此なむあみだ佛をとなへ奉れば身は不淨にあらふとも戒律をたもたぬかゝる罪ふかき惡人を西方あみだならぐこそ助玉ふ一心不亂に一念十念の御念佛のくどくによつて八十億劫の生死のきづなをはらりとをしきり弘誓の舟にのびのると大慈大悲の追手のかせに帆とあげてせつおの間に極樂に往生するは何をありかたい事にてゝ侍らぬか扨又この法華經には惡人の提婆とはじめ龍女は女人の手本をあらゝし乃至一不成佛ど、き玉ひてたゞ一遍の南無妙法蓮花經に卽身卽佛をとぐるはうたがひなしとかく惡業はさんせずとも只しん〳〵のひとつで往生成佛は決定と思ひ取てとおへ奉るより外はなし能たねといふゝ此念佛題目わるい種といふが此邪婬これよて種の字の心がそみましたる又御咄しゝ次にいたさふ

○ある人牧溪和尚の御筆なりし靈照女の給を持けるが一人和尚の活機なる事をしたひ誤をたのみヤべしとてやがて一休の卿菴へまゐりしかぐ〳〵のよしたのみヤければそれ社安き事なれ望の贊して參らせむと筆おつとりたまひさら〳〵と書そのものに渡されればありがたくいたいきさてもかるき御僧かなとよろこび内へかゑり友だちをもよびよせヨごろの給に一休の御贊なされ下されしとかたりければおの〳〵拜見ヤさんとやがて床にかけて拜見しけるとばかなまじりに

汝が親の依作り　馬祖にだまされて
阿龐居士の娘　實を海にすつる

と遊しければ皆人よこ手をうちさてもたわけたる御事かな鹿居士も靈照女も唐土にての賢人なりとみな人いひ傳へしはどこそ定て左樣の心をもわそばさるべきかとおもひけるに格別なる御事かなまとに天下の活祖師にてをしまそとみな人感にたへさりけると也

○又一休和尚ハ金を山に捨玉を淵にあらべてもわらんゐけしきなれバ元より一鉢のもふけより兼てたくハへおかりけるに大晦日の暮方になりければ一僕ヲやう明日は元三なりなにをか参らせん八ッ木ハ一合もなく青き銅ハ一錢もなしとおげきければ一休さゝ玉ひてそれハ歎く事にあらずいざ出よとの玉ひて一棒ふりかたげ山家街道へ出玉へば折ふしかハらけ賣通りければのがすまじく追かけたり彼者かゞろき一荷のかハらけを捨てにげければ扨てそとてめしつれし僕にもたせて是をしろなし初春をむかへ玉ふがはからず大名はて玉ひけるとて和尚を引導に請じければいや參るまじとのゐまふ何とて御出おきゞとヲければ錢をくれねバ行んてのたまふ安き御事哉何ほどか御用なりとヲせバ一貫八文ほしくといへり安き事とヲ奉りけれバ其錢をもちひて彼かゆひはぎしたまひしところへ行てかはらけ籠に錢をくゝりつけて札をたてられけるハ先月の大晦日の夜の土器の代一貫八文但一枚に付一せんづゝ帳けし玉へと書つけて傍に一句

貧のぬすみハ偷盗戒にハあらずいかんとなれば
戀の歌も邪婬戒にあらざる證據あり慈鎮和尚と

て貴き聖のよめるなり

わが戀ハまつをしぐれにそめかねて
まくづがはらにかせさハくなり

と侍りけひとかやゝかれバとて邪婬戒をやぶりたる人々といいひがたし
我も貧のぬすみなれバ偷盗戒とやぶりたるとはえいふまじきなり

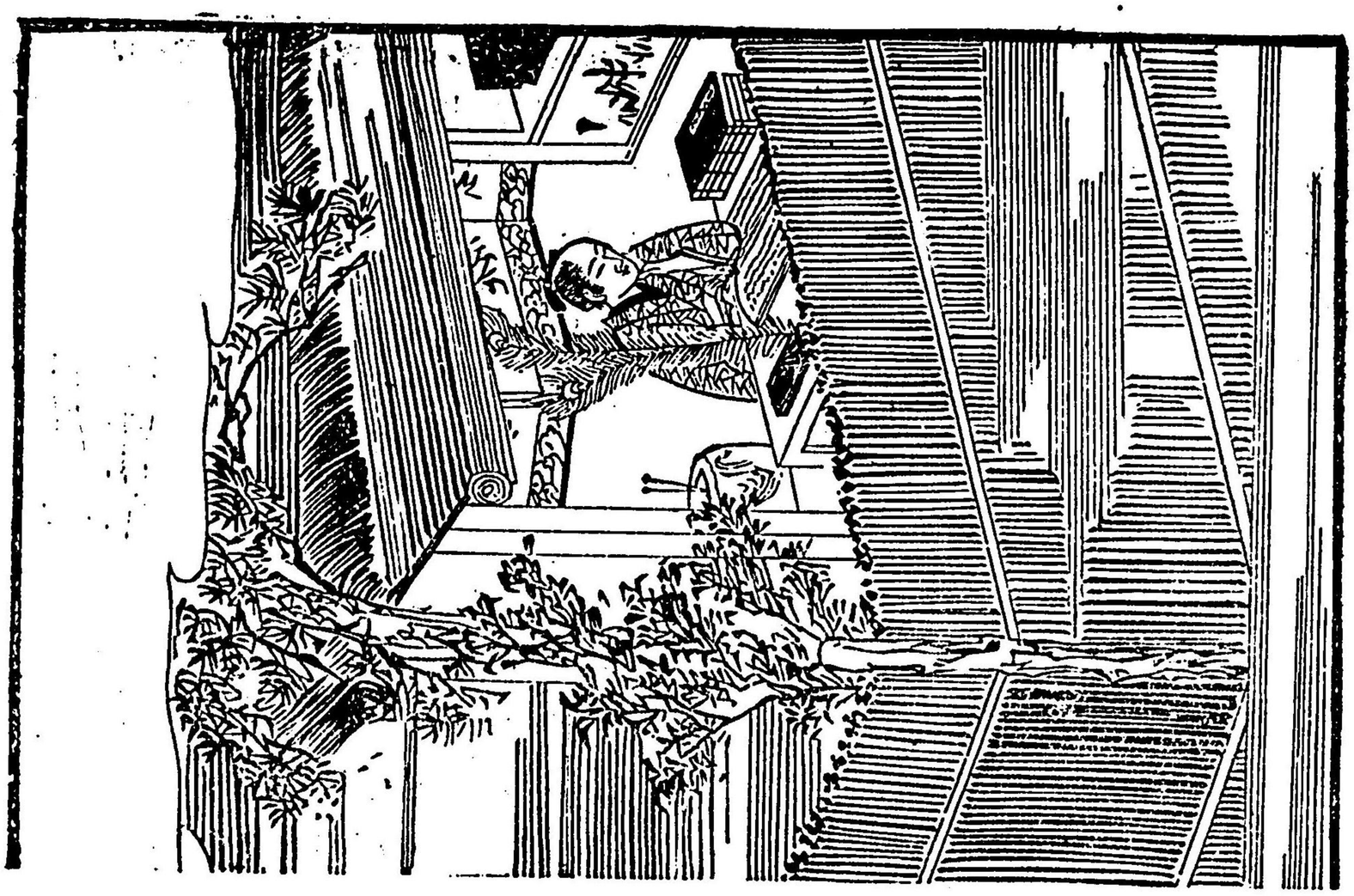
と書れけるとかやさて引導ハ出玉ひて曰

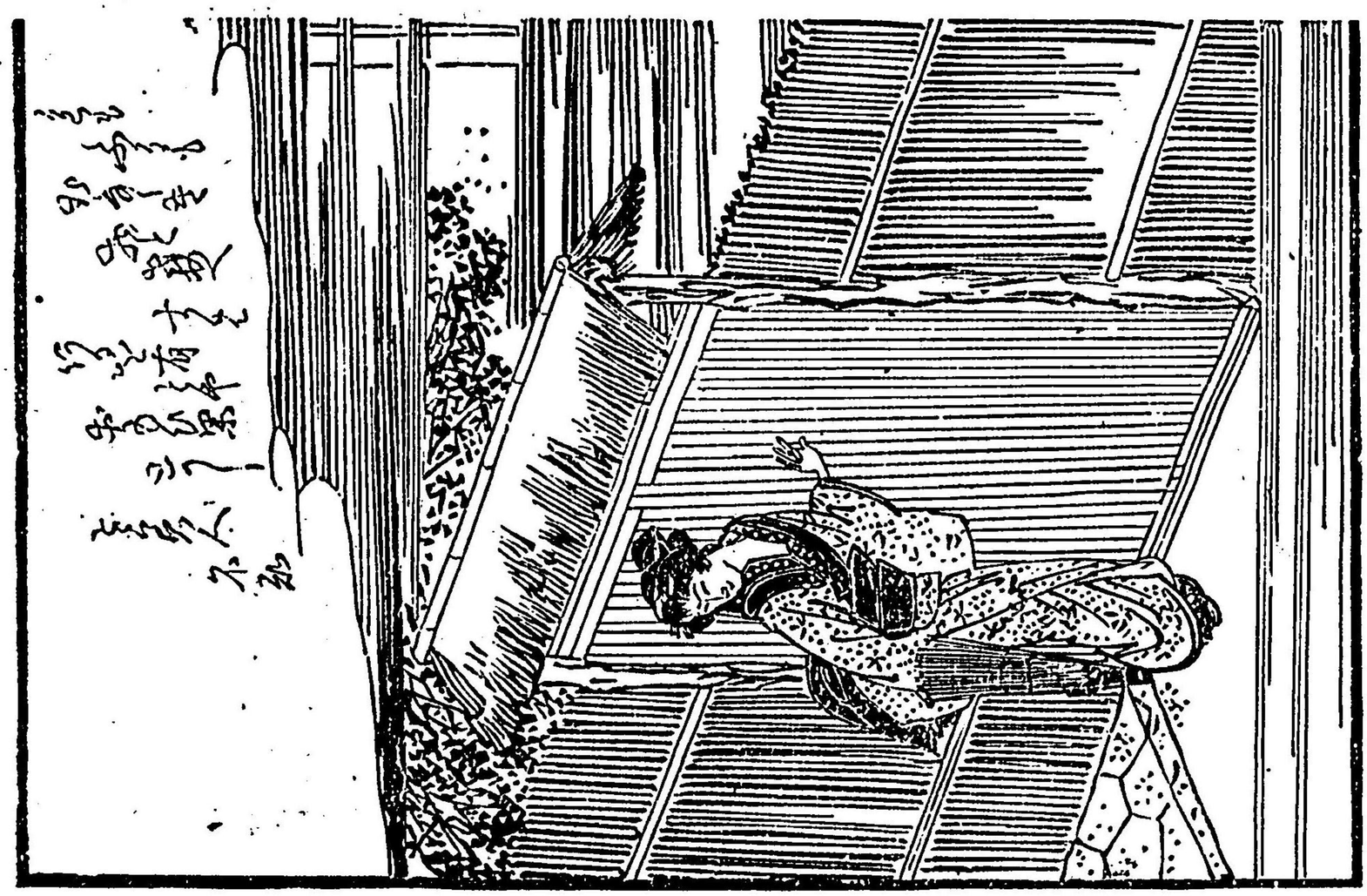
人は六道の錢とて六文出す汝は引導とて一貫八文出すさつしんがいちじう
されば汝は人に一貫貳文まされり十方に道あり行たい方へつゝと行成佛ま
さにうさがひなし是いかんとならバ有广地獄のさたも錢がする

とのたまへばみな人さてもおどけ人やとて感せぬ人ハなかりける

○或僧一休の活機なる事を聞つたへいか程なる道徳かあるとて大徳寺へ行てたづねければ折ふし一休ハ門前の酒屋が方へもき酒にたべよい前後もしらず臥し玉ふところへ小僧きたり只今唐僧とかや見へし大和尚の一休ハと尋玉ふはや御歸りあれと引おこしければ一休愚めいまだ覺ずうかゝとしておハせしに酒屋の亭主出て御醉眠御心よく侍りたるゝとヲけれバさてもよき氣味やとて一首よみて亭主ゐ取らせけるハ

ごく樂をいづくのはぢゝおもひしに





杉はてたる双六の門

とあそばしければ亭主大によろこびけるとなりかゝるところへ小僧またきたりてはや御歸りあれ先にヤせし和尚の御待かねとヤせば答もなく双うちかへしていびきかいてそりがへりて寐玉ひしかば小僧うへりて何程おこしてもおきあがり玉いずとヤせばよし〳〵その寐入て何とも思ひよらぬとき引おこし一問かけたらば志いよ〳〵しれ侍るべしと彼唐僧一休の臥たるところへさし足して行枕元へどうと座し何ともいはず引づりおこし目もいまだあき玉いぬに一越聲を上て曰

西來意の祖師の話に俗語ありや

と問へばその息もつぎあえぬに一休も大音にて

汝が俗よ

とこたへてつきこかし玉へば彼大禪師も舌根をふるふて立れけるがさても活祖師やき〳〵に十倍せり汝が俗よとは即時に出まじき答話なりと感氣肝にめいじて歸り玉ひけるとなり

或とき新右衛門雖の話を參じけるに一休しめしていはく

釋迦みろくは是他の奴しばらくいへ

他はてれ阿難とゝひ玉へば新右衛門歌よみて答へけるは

たそといふことばの下にあらはれて

とよみければ一休これをかんじて此一そくにて千七百則をゆるし玉ふとなり

○一休和尚老年に及玉ふ頃親をもてる若きもの〻心得べき事諸經の中にこれありとて示し玉ふに〻人の子として親に一日も孝行の心わそるべきやうなしといへども就中孝行の心おこすべきは

正月元日　五百日の孝行に向ふ　同十五日　百日にひかふ　二月五日
三百日に向ふ　同晦日　百日に向ふ　三月三日　百十日ふ向ふ　三月十日
千日に向ふ　四月十五日　五十日に向ふ　五月五日　百日に向ふ　五月晦日
九十日に向ふ　六月七日　二百日に向ふ　六月十八日　七十五日に向ふ
七月十三日　五千日に向ふ　八月十六日　五十日に向ふ　九月九日　二千日に向ふ
十月廿九日　千日に向ふ　十一月七日　五十日に向ふ　十二月晦日　四万六千日に向ふ

毎月朔日千日に向ふ

右の日親に孝行の心を猶更用ゆるものゝそれ〳〵の日數に向ふと釋尊の經說にもあれバうたがふべからず勤よかし〳〵孝行といふゝ左のみ六かしき事にもあらずゑゝ親たちにかうもなしかくもいたしたならば安心し玉ふか何とぞ安心させヤたきものなりとするとなすとに朝暮恐がけるのみこれ則ち孝行なりさて勤めをゝりたると前にヤた種となりて其子もまた孝の心

父に倍増するものなり主人に忠義といふも名目こそかはれ心持はこれに同じと常にしめし玉ふい有がたかりける事也けり

一休諸國物語圖繪卷之三

○爰に天台坊主に秀清とてなさこびに惡こびたる坊主あり多の人によこしまなる道をすゝめ凡佛法はわが心にあり身の外に佛なしなどいふてあるひゝ宮社等の木を伐せ佛像を破却させ先祖をもとむらはす邪見放逸の坊主なり内々かれが中ゝ承はれば紫野一休和尚と申小法師ゝ何程佛法だてを去て悟道はつめいの僧なりと世間にさたするとも是もつておかしきぞたとへば非の内の蛙が大海をしらぬに似たるべしあれこの坊主にあひなばおそらく只一句を以てぼいこみ都の住居させじあッぱれ途中にても逢たきもの哉とより〳〵是をうかゝひけるあるいて日夕ぐれに一休かへり玉ふに其頃ゝ和尚眼病氣にて一眼ゝあしき折から彼坊主に大宮通一條の辻あてはたと行あひたまふ秀清されば去そねがふところれ幸ひなりとおもひてする〳〵と走りよりいかに御坊〳〵といひかくる一休この方の事かと仰ちる、其とき秀清のいはく汝一眼とてらし歩行する事もしあやまちある時ゝ黒闇なりあやうき事全く賴みがたし一休やがて汝が両眼より我一がん星まん〳〵たり一月おかへがたし見物するときんば明らかなる鏡のとしかやうに答へ玉へばこの坊主かさねて一言に及ばず尻からげて足はやに行方しれず飛うせぬ

○或ときこ一休お問ていく何と和尚さまつく〳〵世のあり行わり様とみるに人間のきやう界を

おんぞうれ我々が智識どいやどもす幾人どいふ數がじらず大かた先だち行けるがつねにだれあつて言傳ありといふとも聞ずいかやうの處に何のやうにして居るといふ事もなしこれのみ心元なき事ともなりやう〳〵あちこちとする間にいひつじのあゆみ近づき車の庭にめぐるがとく我々が番に當り侍らむなげかはしき事どもなりかやうなるとこれ死てい先なにゝ成侍るぞ一休の曰

死てのちいかなるものとなりぬらん
めし酒だんご茶とそなりけり

と仰られければ此人また和何のかる口れいを出し玉ふとどつとわらひけるが又そばなる人の言けるいさりとて御坊このうたの心面白くいがまた行もあり行ざるも口よしこれはまたいかに成事やらむ次手ながらきかせ玉へ一休

とゞやるとおもはゞそこにとゞまれよ
行とおもはゞとく〳〵とゝまけ

といひすて、歸り玉ふ

さて前册には邪婬のすがたに付て未來現在にむくふ次第をあら〳〵佛法ばなしをのべましたがまだ中事がのこつてあるを少し中聞せませうさて經文は前よりよみまし た大悲經第三の卷の中の種といふ字に付て中事なりとかく何の身になつても種がなければならぬ世界の人數いか程あるやらしらねども同じ目口鼻手足はありながら脊の高いもあり低もありあるひはやせたも太つたもあり目もひからめのたれ目のしはの目の笋奉行といふ目はやぶにらみの事じやげにはざる此種は方等部の中の經に眼目瞭瞭なる者と他の婦女を邪看するもの、中より生るとは說なされた此眼目瞭瞭とはすがめとも横にらみとも讀字なり他の婦女を邪看するものとは他女房をよこしまゐ見ると讀字なり是はどうしたる經の心と思へば世間に人を横に見るやうな人の目がござるィヤア此内にも其やうな目の人があるかしらぬこのやうなる目ゑ生ついて來る人と過去にも人の女房のよいのがあれば人と語るうちにもひたと見ぬやうで尻目でよこみたるむくひによつて今生には常住よこばかり見て居るやうな目に生つくものなり見度ば眞直には見ずして おせによこには見るぞといへば人に惡う思はれなひと己とあやまりて横にみるを他の婦女を邪看する者の中より來るとはとかせられたかくやたらばまた目のろくに生れつかれたる衆のおれが目はもはや惡い目でないと思はれて油斷あされたらば未來でまた眯が目になりませうぞわるふ合点あさるゝなこれ目ではかり邪婬してさへはや目がかくのとしとかく目といふが大事じや目がいたづら者千里の行も一歩よりはしるといひて千里万里の道を行もたゞ一足よりはしるとくたつた一目見るといふより事おこりて及ばぬ戀の思ひのと罪を作りて果はさま〳〵のせんさくがあるばかしの人も

みずとこひしとおもはざらまし

とよみ置れしも聞ゐたまたしからばこせ座頭はなに事も思はずわくらもかと思へば見事心をうごかし情の道深く結句目のわきらかなる人々よりはいかうあり且そこが壇のうらき物のくさり味ひがするやら漆よかはの如くなものと問おればあながち目ばかりがわるい者も定められぬ古人の詞に月花もさのみ目にて見る物かはと書おかれたは能ずませばおもしろき詞じやまづ各われらは目でなければ物を見ぬやうに心得て居まするをさのみ目でばかりみる物かはそう見た物でさらになし心でも見よみる目さへわれば犬も小判は見るけれども是い黄金といふものにて七寶のうちのたからともてれさへもてば何もかも自由自在に買る、ものじやのと見たる斗でいかにしてもその見らるゝ物の正躰をしらぬされば目で見さばかりが見たといふものでいない物をに心を付て其道理をしらねば其方を今殺すがといふ書た物をみても其文字を覺えねばいか成事が書て有やらはそ長きは見みずといふ字にてあらむすいりやうにやつて見れどもわいぬしからばさのみ目にて見る物かはといへるが而白でないかさらば目にてみる見ぬのはなしを引て聞せませう先は茶ひとつ

○洛陽に天文はかせ某といふものありけるとき一休の庵へ行けり和尚出合たまひその方は久々見えざるが何方へ参られたるぞされば私は此ごろさる人にたのまれ南都にまかりありてい二三日以前に登りや候和尚の日何ぞめづらしき事もなく候や博士こたへて曰されば奈良にてめづらしき事を承り候それはいかやうなる事にやありけるぞ博士はんにや坂の邊りに齒をぬくものあり一ッを二文づゝにて取と聞て去もの、虫くひ齒をもちて時おらずいたひときにい身体さへたえがたきとてもだへける者かれが事を聞および齒をぬきに行一ッを二文づゝなりとや此ものいひけるいそれがし聞及び遠方より参りたり一文にまけてぬかれよといへばいやく少もそら直いなく候御用おらば何ぞきおりとも御越われといひてまけず色々をはりを言つくしせんかたなくかへるべきと思ひしかども切角此事に参りてむなしく歸るべきにもあらずとやおもひけん是非々々まけなくば二ッを三文にてぬかれよといふ先方のいふやう扨々其方はてまかく直切たまふ人かゐまけておましやうとて二ッを三文にてぬきとりけり此男かしこくも直ぎりてぬきたりとおもひ大きに自慢がはして歸りしとあたりのもの、申やう扨々たい今の男はせんなき事をしけるものかな其ぬくべき齒ばかりをばぬかずしてぬくまじき齒までもぬくは一文の錢をゝしみてぬかでもくるしからざる齒とぬくさりとてい世にめづらしき笑ものこれは小利大損ともいふべきかと笑ひけるかやうの珍敷ををき、て飯りましたとてはなしける和尚をかしくおぼしめしころ〳〵とわらひ誠にそれいおもしろき咄しなりされば世間の人利やうに心ふかきは事にふれて利ぶんをおもふほどに因果の道理もしらず常來の苦忠をもわきまへざるが如くなど、四方山のはなしおはりて和尚西の方の遣戸をあげて出らる、

博士みてやがてかくどといひける

いかばかり西に朝日のいづるかな

一休やがて心得たりと

天文はかせいかゝ見るらん

といひ玉へば博士手をうちて大に笑ひいとやもこゝでかへりける

○爰に一休和尚の庵ちかきほとりに四十からといふ小鳥を養ける人のありしが物のあたりにや生かる者なれば死する期あつて籠の内にむなしくなれり朝夕愛し手なれし可愛さに殊外不便に覺えいとゞなしくて子にわかれたる思ひをなせり凡非情無心のものにも各佛性を具せりまして引導わたさばやと思ひ一きう和尚の庵へ参りてしか〳〵の事頼みゆたきよしなげきければ折ふし和尚の弟子出あゝとやすき事なりいで〳〵成佛得させんとて佛前に向ハせ

ひゝし釋尊八十三ばつたい河におゐてねはんに入

今なんぢ四十から紫野に成佛をとぐ

とたからかにこそさづけゝる彼者たのもしくおもひやがて葬りてかへりぬ是を一休ものでしに聞しめしたゝ今のゐんどうは、よくでかしさる小僧かな風骨によると思しめし大きによろこびたまひ様嫌よき事なゝめならずとかや

維广文殊のはなしいたさふ扨維广經の中に文殊大士もまい居士の病をとひに御こしなされて何と居士御宿にか御見まひのため不來のさうをもつてきたりゆたと仰れたこのこゝろは不來の相とはきたらざるすがたを現じて來るといふ詞じや何と來ておゐて來らぬすがたをもつてきたとは何とやらむ六かしき公事でいでざらぬかそのとき維广は方一丈の庵室の中におわしまして今どき寺の長老和尚の御ざるところを方丈といふは此てゝろじやしかるに維广この詞をきかをてこれは〳〵文殊ばさつようてこそ御出なされたれと維广もゆいまで我不見の相をもつて見るとこたへられたこの心は不見の相とはそなたさまの不來のすがたでゆゑしなされたなれば我もまた見ざるすがたをもつて見まするといふ心じや何としつた同士の出合はおもしろい問答ではござらぬかさのみ目にてみるものかはさのみ足にて行もれかいと書たきものされどちなみに申さふなれば鴨の長明が海路をへだつる戀といふ題に

おもひあまりうちぬる宵のまぼろしも

なみぢを分て行かよひけり

これをあじはふてみれば寐入たるうちにて思ふ人の方へ心がかよふたなれば此行やうていと足はいらぬしかればさのみ足にて行ものかいと書たいとゆが實じやまたまつしまの法心上人のうたとて

足なくて雲のはしるもあやしきに

なにをふまへてかすみたつらむ

どよみ玉ふよし沙石集の中に無住法師のかきたまひてこれ楞嚴經のこゝろよかなへりとありいかさま雲のはしりかをみのたつゝ合点がまゐらぬ春たつといふばかりよや見よしの、山もかすみてともよまれたかよふによんでも同じ事じや歌に

足なくて舟のはしるきわやしきに

なにをふまへて浪はたつらん

賀にも楞嚴經の中よ釋迦如來と阿難尊者との問答に眼見心見不見の見などいふ事があるぞと殊勝に有がたふおもふ事じや此やうな理に似たることをアさうおらゞある者の聯句に舟よ乘りて山の巓に上るといふ句をいたした世間に無理な聞へぬ事を山に舟を乘やうな事じやといひまそる是に和を付あぐみましたいかさま付にくは難句なるを是にさるものがつけましたは

田子の浦なみ間に富士のかげ見へて

なんとよく付たでゝござらぬか舟に乘て田子のうらに魚など釣ながら下を見れば富士の山のかげがあり〳〵とうつりてその上に舟をうかべたときには舟にのつて山のいたゞきに上る心がしましよがな池に望めば天脚下といふ句もこの心と同じ事とかく物ゐゝ感をなして見たり聞たりせいでは見たうちでも聞た内でもない月花を見るゐも月といつもまるさ物どばかり覺へて花はいつも咲てゐるとおもふて本の目ではかり見た空いふもの也月もかげ花もちるといふとを合点をるを心ともに見るといふものでござる此心をもつて邪婬をいましめたがよいそれはあせにとヤにきりやうのよい女を見るにもたゞうつくしい執心やと氣とうつすゝ目でばかり見るといふものじや心をそへて見るといふはあの女いかう美目よふておれが心が何とやらときめくなれどはやあの方にゝ主があるによつてならぬとかくおもふまい主ゐる者にこゝろをかくるゝ生盗人といふものなれゞその證據にゝ罪におこなわるぞとじつと分別をしてひどうなる事をやひるがこゝろをもつて見るといふものじやさてこの心を納めてからゝ見たとて科にならずへりもせずとてもの事に此こゝろがあるおらゞ見ぬがよいはづ見てもとても埒とわかぬと男の胴骨をすゑて持がたしなみなりさて物と仕ぞこないもなし侍ゝ殊さら此つよき根性をさげねは武邊も高名ならず先いやらしいゝ見聞からなまねるく誠の用に立さふもなふ思はる、ゞ兎にも角にも詮ない事は是にかぎらずわはうらしう涎ながして見ぬがよいさて女房の山神とヤはなしをめざましにいたさふさりながら蟇川

といふ男の才智發明の義をちよつと入ます

○蟇川新右衛門親當その身いみじき才智發明の道士なるが和尚のもとへ立入禪法に參じられける誠に佛心の妙具をつたへ正法眼藏をきはひ英雄の士といひつべし和尚も心通相かなひてもゝしくおぼしめさるゝもとはり也されゞ定業期きたりて寂滅の室にいらんとそ胎下のむかし

より是を待と年久く思ひまうけたる道なりとて快氣の望さらにあく既に一門はせあつまりお
の〳〵今はのかぎりゐ名殘をおしみしたひ歎くとよその見る目もあはれにてしらぬ袖さへぬ
らしけるはことはりとぞ見へにけるかゝる愁歎の折ふし青々たる西の空より紫雲さなびき空
中におほひ音樂きこへ靈香薫しはなふり妙なるかな三尊廿五ぼさつ赫々たる聖衆を引つれ間
ちかく來迎し玉ふはふしぎなりとも中々有かたかりける瑞相なり實うたがひもなく新右衛門
は西方十万億土極樂世界に往生せしめて九品上刹の臺にいたらむとはたなこゝろを見るがと
しとをの〳〵感にたへざるいなかりけりされば落日よちかき老士まだ物なれぬ若盡のやから
い天をあをぎ地に伏しともに死なんとぞくるひける道理の至極とぞ聞へし其中に嫡子は新右
衛門がひざの元によりそひ泪に袖を包みながらいかにわれ御覺いへ賴母しく思しめされて往
生安全にとげ玉へと指をさしておしえける其とき親當ねぶれる眼を活と見ひらき我子をいた
とにらみてそれ弓馬の家に生れけるものたとへば安養淨刹にいたりて九品蓮臺に座すとて弓
箭をわするべきにあらず書院の床に立たる重藤のぬりごめに矢をそへてもちきたるべしとい
ふ間人驚かざるはなかりけりこはいかにと見る所に親當が弓勢何人ばりとはしらねどもさし
もつよかるらむと思しきがやがて引くはへ引しぼり暫しかためて兵とはなつ其矢あやまたず
三躰れ中尊ひかりを放ちて立たまふ阿彌陀のむな板をあなたこなたへ射とうしてければ空に
あまねき紫雲のよそほひも諸の聖衆とおぼしきものたちまち消て蔭もなしいかなる事ぞと了
簡すれば所に久しく經るむじなの化かうを經たるにぞ有ける誠に希有の次第なり終に一首の
辭世を作り殘されける

生ぬるそのあかつきに死ぬれば
けふのもふべはあき風ぞふく

とかやうゐつらね臨終をとけ玉ふ奇なるかな空寂の玄妙を會得し邪广の障碍をはらひ其身は
死門に入ながら活人れねぶりをさまされけるは世の人の珍事とぞ所なりその後一休を導師
とたのみ奉り御引導をこひければ一休もこの新右衛門にゝ一かはりかゝりて引導すべしとた
くみとましておゝしけるにはや新右衛門が亡骸を輿にのせて來りければ一休たち出たまひ
てかの新右衛門が乘たる龍をたゝきたまへば死たる者高らかなる聲を出して一首の歌をば一
休によみかけゝるこそふしぎなれ新右衛門も只人にはあらじと今の世までも人のいひつたへ
侍るなりその歌に

ひとり來てひとり歸るも我なると
道をしへんといふぞをかしき

とたからかよとなへければその詞のおゝらざるに返歌をし玉ふこそ有がたけれ

ひとりさてひとりかへるも迷ひ也
來たらずさらぬ道をおしへん

とのたまへば新右衛門も實もとやおもひけんその、ちい音もせぞ成にけり世人これをつたへ聞て一休は誠に人間ならず佛菩薩のかりおあらいれひとり來てひとり歸るも道といへば來たらずさらぬと卽答なし玉ふい所謂老子も死てもかろびざるものい命ながしといへるもかゝるためしなるべし

○又新右衛門が最愛の妻いとけなきときより萬よ心みぢかく武々しかりければかなしき者にも慈悲のめぐみなく召つかふ童にも哀憐のなさけ薄かりければ人は似を友とそるならひなるに悟道の居士になをそひて尊きをしへをしらざりける事いかさま報のがちなるべしと皆人ごとにさみしける新右衛門あけくれ不便におもひてもとより道者の事なれば たましひをくだき柔和のをしへとすゝめけるしかれども露ばかりもしたがふ氣しき見へざりけるとき余りいたく制しければ女房顔をあかめて聞へけるやう

あさいとのながくみじかくむづかしや
うむのふたりをいつかはなれん

とたゞかやうによみておとも せず親當おどろき日頃のふるまひに相違して歌の心あまり殊勝なりければつかしくおもひわが敎るに及ばずとてきもに銘じて感じけるふしぎなるかな今までは放逸邪見に身をまかせ誠にくらき人なりと思ひしがさてい我より先おさとりける物をと思ひ舌をまきける其後い夫婦のなさけあさからずひよくの契りふかゝりけり上しも水魚のこゝろ同じひつびけるがつらき者のいひなしにてやありけむ密に異夫をかさねて二てゝろあるよしまことしやかに新右衛門に告ける新右衛門もとよりいついりを信ずるにもあらざりけれども實に思ひあたる事ありとて物に忍びぬをのこなりければ暫の延引もなく離別してこそ里へおくりける女房はをりふし懷妊の心ありて腦みければ恨みの心わさからずつるぎをのみはのを、かしむらんともだへかなしみけれども力なく出にける無實の程こそあわれなる然れども跡方もなきいつわりなれば誠つゐにあらわれて詭言のしわざとしりにけるより新右衛門後悔して又よび迎んとて我おやまりなるよしいひつかはしければ女房返事に

秋かせの人のおゝろに立ならば
見のらぬさきにいねといはざる

とかやうふよみおこせて二度かへらざりける夫より女房のなさけたぐひなくいさぎよきふるまひは返てまさりけりと褒ぬものなかりしとなん或人かたり侍りいみじきおもしろく覺へければかゞ耳の底にとゞまり忘れもやらず有けるを仮初にあらい し侍るそればかの歌にいづれもかげうたありしとなり

扨女房を山の神とやせば御さしつかへもゞざろふかもしらねども山の神といふものに目を見合すればそのまゝ死ぬると柳人のつたへて奥山ふかく入て木を樵に山の神らしゐものゞもわたりへ來て態と見らるゝやうにとまん前へちら〳〵それども見るとに死るによつて隨分

見ぬやうにする也もし同じ山人でもまづどのやうな、りな物ならんとおもふてちよつとでもかの横目をして少しばかりでもみると死るとが一度じやこれをわすれさせらるゝな世界のうつくしゐ人の内儀たちを常住山の神じやと思ふて見ると死こそはせまひけれどわざわひの種じやと思ふてちつとも見ぬがよい兎かく見ると死ぬるとさへおもへゞ手がつかぬ若い衆合点させられたかそれもゑまとに人の女房を今どきのはやり詞に山の神〳〵といひまする此やうなをかちいふかしりませんたゞ〳〵悋もじがきつついによつて山の神のをくてわいといふ事かそれはいづれもがよくにぞんじであらふ身どもらがやうな法師のしらぬ事〳〵迷の衆生は爰がわさましう御ざるぞ何でも見たがるひとつとして役に立ね事をひたもの見たがるなんぼ心に合点して居からは見たりとも何の大事がとあだ言にも弁口をたゝきて遷の泥より出て泥にそまらぬごとくこゝろが清淨なれゞ一心が極てからはとてもき見事にいふけれど一さいさやうにきれいにいふほどの人の泥にそめたも一心の極ちぬをも視てきましたにようてまづは眼で見るに煩脳にさはるものでござるさふな程に今の山の神をわすれぬ様ふして見たりとも夫が小判を見たやうに心得てでざれしたが今どきの若い衆や氣たいのよい親父たち笑止なとは後生でみな藪白眼のやうな目にならせられうと思ふてきづかひに存ずるが後には世界に生れてくる程れ人が横にゝらみやうでござふと思ふておかしうござるそれふつき邪婬のむくひばなしをやてきかせませう御世話方御茶一ッくだされ

○爰に霊鷲大原と申所にゆるりや庵兼夫と申ものあり久しく京都に住けるが元來出雲は生國なれば又本國に歸りて住けるが京より國へ下りさまに妻をかたらひて下りける此女京にてねんごろしける男のかたより度々たよりをうかゝひ互に文のかよひありけり此よしさる者ひそかに知らせゞ男わるときあまたの文どもの有けるをとりかくしけれど我はひとつも讀ず無筆なれゞ力なくたれにか是を見せばやとおもふに頼むべき人もなく打過しが折ふし一休この藤太夫が近所にましますゆやがて和尚を請じてよき次手ありとおもひて件の文ども取出し御坊さま内々ながら御ぞんじの通り某は目を持ながらの明めくらにひとしけれは此ふみ少し子細あるとにていも一々よみて給われと申ける一休安きをなりとて此文どもをよみかへて只尋常のふみによみなし玉ふ時に此男さては苦しうおき文どもなり余人に讀たちんには疑ひもあるべきが殊に和尚のよみゑまふ上はさらにいつはり玉ふとも思はぜさては人の云しは皆いつはりなりけりと不審をはらしけり此女和尚の恵みあまりのうれしさにひそかに禮ふみをつかはす次手に

しなのなるきそぢおかけし丸木ゞし
ふみ見しときとあやふかりけり

とうれしさのまゝかきてつかはしける一休返事に

見しときはいかなる事とゝふ太夫

よみをはりてとゝろもるりや

これよりかの女ふつ〳〵身を慎みけるとなり

○都に口痹の妙藥を覺へて秘藏しける者ありけり一休功能をきこしゐいかにもして知らばやと思召されやがてたづね逢玉ひてしか〳〵の御藥を知らせ玉ふよしを承り及さふらう天晴この愚僧に御相傳被下たくはる〳〵是まで尋ねまゐりいと中々の事にいこの妙藥と中は我尊代々つたへ來り一子相傳の秘方なれば他にもらす事思ひもよらず去ながら貴僧もゝしき御僧と見奉れば否がたくこそいへふかき御慈心にてわたらせ玉はゞ他に口傳あるまじき御起請をかゝせたまへ然らばもるして敬へ侍らんとぞいひける和尚聞しめされわが身の大事一代一紙の誓文なれども愚僧におしへてたびいはゞ心得侍るとて墨くろにて書れけるやがてならひ得て庵にかへりあざわらひて宣ふやう人の病よ藥となるべき物を秘藏して獨覺へたらむは慈悲のうとき心也是等の事を秘藏とせばかそらくは秘してもひしがたき一大事の因緣をばいかゝせむ去ながら佛神の冥罰そらおそろしさらば札を立て世に知らせんとて

一口痹のくすりの事もし口痹とやむものわらはかならず密柑の實を黑くやきてのむべし治る事すみやかにしてふたゝび發ることなしこれ奇代の大妙藥なり

と書付たてられけるさて敬へける男これを聞以外に腹を立せはねをいからしていそぎ紫野へはしりもき一休をたづね出しいかに御僧破戒無慙の寶主坊主かな何とて大事の秘藥を習ひ得て他に口傳せまじとて起請を書ながらあまつさへ高札を立て萬人の目にさらす事いかなる曲事ぞやと打はたしても忍びがたしと眞黑になつて怒りければさしもの一休なれどもおめき殺かとぞ見へゐけるされども驚くけしきもなくそらさぬ顏にもてなしわらと〳〵しの有さまや何事を斯はのたまふらん起請をかきしも誠なりしかるに札を立しもいつはりにわらず去ながら口傳せまじと書ぬれば口傳は一人もせざるなり札をたてじと書されば立たるがあやまりか起請に少もそむかざれば佛神のばちもおそろしからずとてそらうそひてまし〳〵ける彼者あくまで罵しり怒氣におかされ方寸にせまりけるが一言のぬけ句ふ返答をうべいき歸りける

○一休和尚とひとしき沙門ありけり我が繪像をみづから書てうつし心づがら一入よく出來たるよこうれしくてさもあれ一休ゐ見せばやとおもひ急ぎ紫野にもて行ける和尚この繪を一目見玉ひあなみぐるしやとて目を閉大きに嘲り玉へばいかなれば所存をかへりみをかくわらひ玉ふぞと打腹だちのゝしりける此時繪像を取て庭上へ投付土ざうりをはきながら散にふみゑじり一筆かうぞかゝれける

世をすてゝかたちをすてずひとつをきりて煩腦をきらずかりに繪像をかきておのが惡業おかすけ畫繪像大きなるかいわくなり

と黙々と貧をかこちておたされける藤門つくづくと感じやがて懐中して歸りける

○五月雨のふりつゞきはれ間もみえず打しめり四方のけしきうるはひ梢もみえわかたぬ徒然わびしく思しけん紫の戸をさし込みたん然として在します處へ六十ばかりの男とみへて破笠をかむりいかにもおもひ余りうれひふ沈みたる有さまにてしづかに物ヤさむとうかゝひける一休たそやこなたへと宣ひて柴のあみ戸をひらき玉ふ彼男いふやう我は近きはたりに侍る者なるが明日いさる心ざしの日ふ相あたりしへども智識をたのみ奉つるかたなくしへば恐れながら和尚を請じたてまつりおろそか成齊をまゐらせ上たくして是まで頼み來りし也とおもひ入てヤける一休聞しめしもとより出家のいとなみにいと易きとなり何處のほどぞと問玉へば男こたへてさんしわが家居とヤはにごり川通そこぬけびしやく町と申てかくれなき所にて侍るなり尋てわたらせたまはゝ門にしるしを置候べし必らずまち奉りしとていとまヤて歸りける一休あとにてつくづくと案じ玉ひ案は玉ふしぎなる教へやうをいひつる物かなさらば了簡して見ばやとて聽て義理をぞひらかれける抑にごり川とは今出川なるべし底ぬけ柄杓といひしハあがわ町といふなるべしいで〳〵たづね行て見んとて思ふ當どをとひ玉へば案にたがハヤる名の町といふ處に行あたらせ玉ひける印といひしハ何なるらんと見玉へば表に杓子をぞつりけりこれぞしるしなりとてやがて内に入見玉へばきの玉ふの男にあひ玉ふ目出たかりける事なゝめならず我等のおろかなるたハふれをヤ參らせしへど一々にとゞわかち遂ぞもすJn

せ玉ハヤ御入しこそいつわりもなき天眼通にておハしますとてひとへに釋迦のごとくゝ思ひける男もくせものあてひつかしく難問をかけんと思ひけるが法事も過ぬれば勝を出しすえたりける其とき和尚膳にひかひ殊ふは亡者法界のため之かうをなして三界に手向と蓋をあけ見玉へば飯ふハあらで小ぬか也ふしぎに思めされ汁のふたを取見玉へば是も同じく小ぬかなり殘りの物もみな〳〵ぬかなりければ よこ手を打てあらいたわ玄やさては亡者の三七日にあたりしハよとてかぶりもふらずのたまひける男はいよ〳〵きもをけし恐れをかして敬ひけるそのとき男いふやうハ仰のとくそれがしハ父をうしなひて三七日になり侍る佛果にやいさりけんもし地獄にやおちけらむ後生の事おぼつかなくてかなしくしハと問ひければ一休仰られけるハ何事かあるべきたゝ存生のふるまひをば他人ハよしとはむるや惡きとぞしるやいかゝいふぞとひそかに宣ひければ平生ハ常によこしまなるとしハすひとへふ正直にてまつたき性なれば他人ハ佛にてありつるとはむる者多くしハとヤければ一休聞し召しかればきづかひふる事なし是ふみだにもあらず觀音にもあらず則 正 直佛ふり佛果を得ると疑ひなしと事もなげに仰られける男つくづくと承りさてハ心安くしハ又それがしが兄にてしハもの三年已前にむなしくなりたりしが常に佛道をもしらず徒にあかし暮しくづかしながら天性愚頓にして人の口にぬかりものと名を得しハ事くちおしき次第なりたゝし罪もつくらずしハへば佛果も得しハんや問ひける一休聞し召中々つゝみをがなしとしハへど愚佛にハなりがたし左樣のものは愚僧がも

るしても人がもるさゝれば其落ところの地獄を則あはう地ごくといふなり但し今生のごとくに後生の事も侍れば佛果と地獄と少しも疑ふとなしと仰られける

さて又因果のひくひとゞはなしをいたさふむかし今都今出川のほとりに色ごのみなる男ありあるとき水無月紅の森の夕すゝみうちひらいたる河原にかり茶やたちあらび京中の上下うつして御手洗のながれあて汗をすゝぎ暑をわすれかへる時分西山に入日かげ四五尺ばかり殘りことさらひえの山おろしもひや〳〵と心よく又も御出の茶やの床机に腰をかけ休らふところに今出川ぐちのかたより大勢出來る内にもかづきのゑりふかく風俗のよきが年ふけたる姥一人つれてくるよ〳〵と目をはなたずはるかに詠てゐたる間に近く來て此男がかけし茶やにつとはいりあらあつやとてうばがいさめもきかずして水をのみて片かげのかたへにひたと顔ふりてゐらるゝを見れば日ごろる執心におもふたる人の女房じやまでこれは夢かうつゝかとそろり〳〵と近づきて是とようこそ御參詣といへばされば最前よりこなたさまをも見及びて居まゐらすれども御ぞんじのとふりこちの人はいかひ世話やきな人にてかやうなところへ參るとはきらいれますから參るといふでゝ御ざりませぬわたくしの里へちよつと往てまゐるとゞて横にきれてまゐりましたゆへ誰にも逢とがいやにてそれもゑ詞ゐもかけつせなんだといへば此男をれいわたくしよくしつて罷あるしからば暮ぬさきに神へはやふ御參りなされたまへの御出ゐ此うちに見へじかくれ家ゝ人の見ぬところなれば

ばわれにてもるゝ〳〵御すゝみなされもし日がくれたり共私が御供をいたし御里へ參れば別義なし御歸りにかならずおよりなされよといふを聞すでゐ女房は神前へまゐりたるうち男はうれしく茶くむ間に今れ人のおゝしたらばともゝくとめて玉ゝれといふうちにはや只今歸りますもはや日も暮れまするといふを茶やのかゝも心得てひりに袂をひかへまづ御茶ひとつとさしつけてかの奥の方のかりざしきへ引ぱり行ところへかの男出きたりてもはやわたくしもかへりまそとむりよとゞめて酒よそうめんよといふうちなんなく日も暮すましければ此女衆もかねて此男がこゝろゐるよしゝりたるにや姥はあるじのかゝと物がたりするうちにつゐ間男よなりて扨それより親里までふくり道すがら行末の落あふよどみはや談合して人しれずその夜ゝいとまごひして別れたげにござる世ゐは性のわるい男も女もあるものじや然るに人の心ゝそめるにいろをますじやてそればかりでなく事か其のち二ヶ月三ケ月と逢にまさりてしたしくなり互ゐ心をかよゝ〳〵折から東山の邊りに此女房の方の家へいつでも齊におじやる出家の袷をせんだくたのまれこれも後生と念佛かたてに縫しまひのたりに硯のあるにまかせ其ゝかの男のかたへちよと文して音づれんとかさねはながみに一日二日御とゝ〳〵しくなつかしさに近きうちゐかの方にて御めにかゝりたさもるゝ〳〵かたりなぐさみつもる御物がたりいたし度神かけてなどこまぐと書てきり〳〵しやんとむすぶところへ亭主何心なく來りしに南無三寶とかはに血をあけながら縫立し此せんだくも

の、袖にちやくと入てかくせしを亭主これを見とゞけながらさもなき躰にもてなし間近よりて飛かゝりまづせんだく物をうばひとりかの文を取出し女め是いかにとひらき見せるに女房たまらずすがり付をつき倒をして何々御なつかしさになどよむに女いもはやつゝまれずおくに走り込かみそり取てけどふへかきゝりたをれける亭主いこれもしらず文二三べんよみかへし名がきを見るにそれ迄まゐるとばかりあるにぞさていこの此せんだくものゝ主坊主めにまがひなし袂にあるこそふしぎなれさても〳〵畜生めと女房を引たて見れば早息たへたりいよ〳〵かんにんならずと其頃の大守へうつたへければ坊主をめして問いせ玉ふにさらに覺へなきよし雲りなき通りあきらかにやわけすれども相手の女い死してかの袷のそでに入おきしが證據となりていひわけ立がたく終に引わたされて女の死骸と、もに木にのせられしいいと淺ましき事さても先世のいかなる因果がめぐり來てかゝるからき目にあひぬらん人の身にいいつむくひがめぐり來るやらむしれぬい現世に覺へがなくとて此坊主のとき油斷いなりませぬぞさてまたかの間男めが科なき法師を殺したる因果のむくひにてその身の果なが〳〵しきおはなしがござる次におはなしやそふ

○さるところに何ともならざる邪氣なる男ありあまつさへ身をよろしくして万不足なく殊に下人多くもてりあまりわがまゝをいわんとて表の入口に法度書をしてけり其札ふ

一　へつらいあつて奉公はしがちの事

一　つかひたをしの事くひたをしれ事

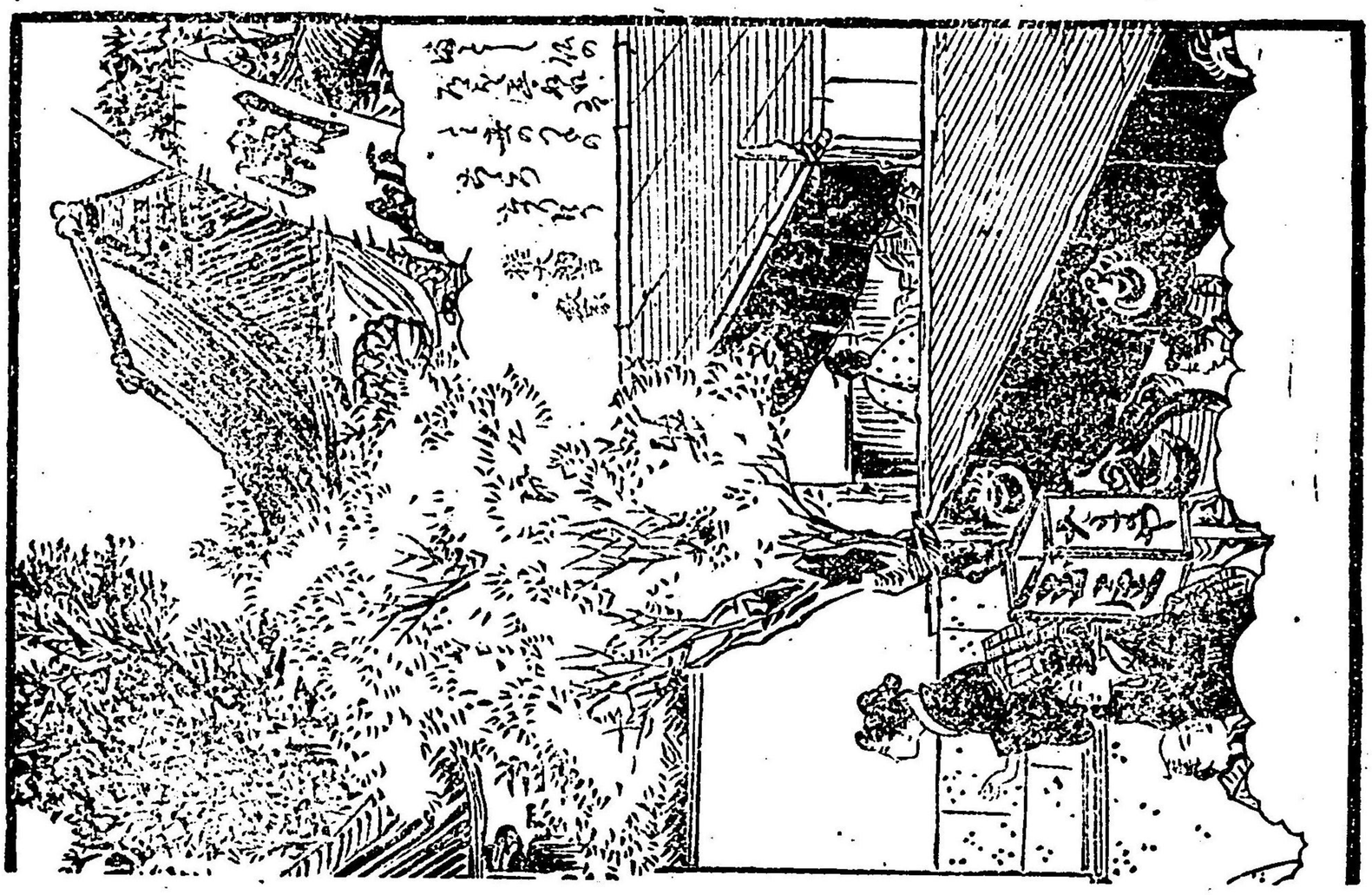
一　をんはとりがちもらひがちの事

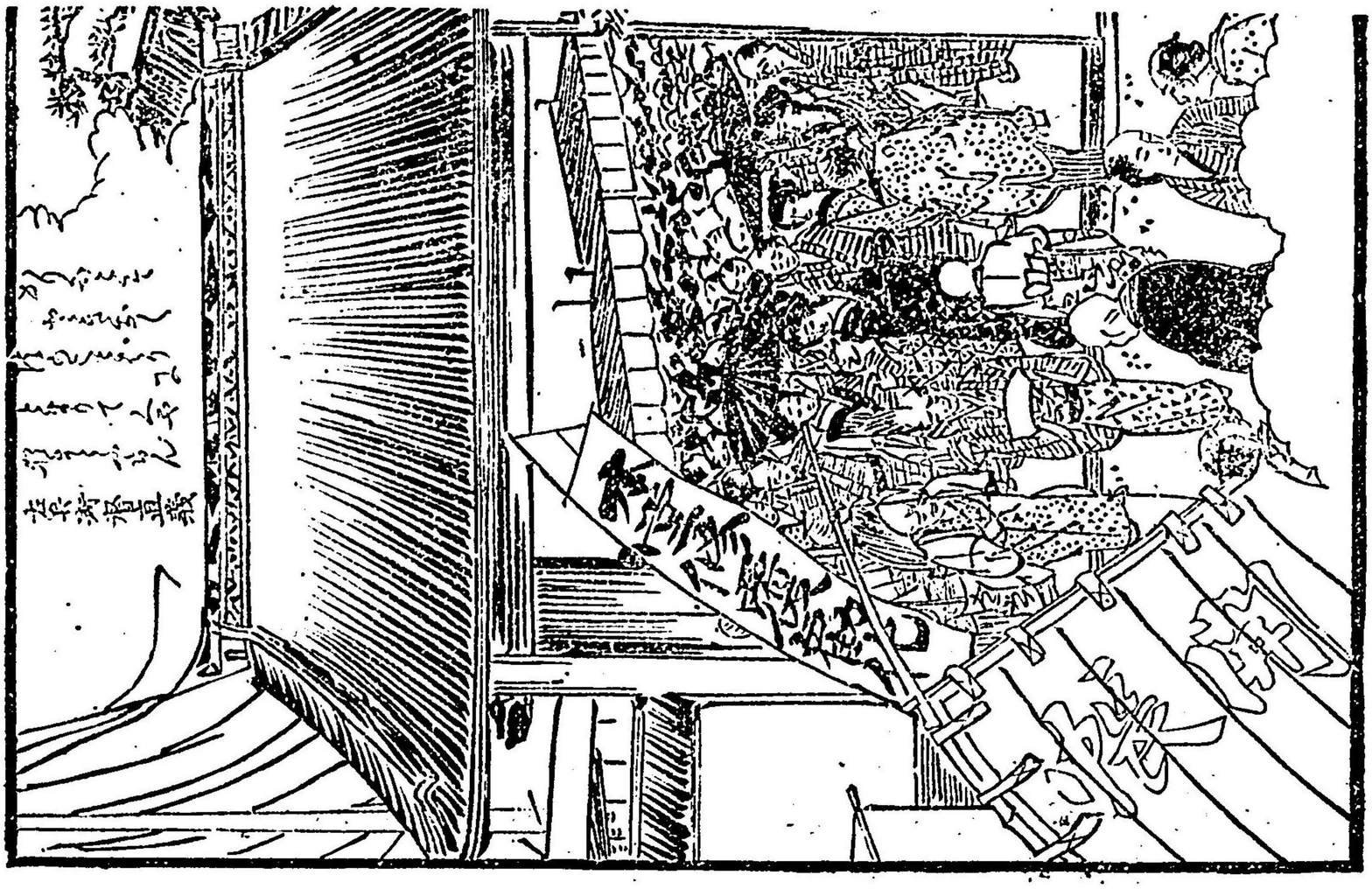
とかやうに書て立をきけりあるとき一休を中入万の咄おいりて一休申さるゝい何とこれの表にいめづらしき札をかぎて立玉ふあれは下々への法度がきにて侍るか亭主なか〳〵とこたふ一休おかしく思ひ玉ひやがてかへりさまにかくかきそへらるゝ

へつらひてたのしきよりもへつらいで
まづしき身ことこゝろやすけれ

うく書てひそかにおしとかりて歸られけり

○或人一休にとふていいく世の中の人の中事にていい人の人たるといふ事いいかなる事を申候やいく休答へていいくされば此坊主もしらず足らん身にて候ゑいんや人の人たる事をしるべきやさりながら若き人の心ざ〳〵あつてやさしくも尋ね玉ふをしらぬといふもいなものにて候むかし物しりたる人の咄しとちと聞はつり置候ほどにやてみ候いんまづ人に人たる人と又人たらぬ人と候がもろふ人たる人を人とやげに候たとへば鷹おゞの鳥をよく取い鷹の鷹たるに候鳥を得取らずして鼠などをとるい鷹の鷹たるにて鷹といいひがさし猫の鼠とよく取いねこのねこたるにて候へもし又鼠をゞ得とらずして肴おんどを盗みくらん候いゝ猫の鼠たるにてこそ候へねこの猫たるといいひがし人の人たるといい人の道をしりたる者をやげに候又問てい





いく學文にうけ賣と申事の候いかなる事にて候や一休答ていいくされば是もしかとい知らざる事ながら申て見候いんまづうけ賣と申いあるひ四條五條の辻にこまもの店とて棚ひとつにいろ〳〵さま〴〵のものを取あつめおき人の用次第に賣ものに候此者に一いろにてもあつらへて見玉へ何れにても我が職にあらずして皆上手の仕置たるを請賣にいたし候間御用ならば其人にあつらへて參らせんというがをく學問にもうけ賣の人こそ多く候へあつらへて行いん人いまれにこそ候はめことに老子莊子諸子百家のさたまでも取まじえて評論し物知りて のいしるい皆こまもの店に似てこそ候買手の爲にい用にこそ立ともやあらん賣手はさせる商人にても候いゞ一言一句にても我ものにして守り行ふ人は、るかにすぐれてありがたかるべしとヤさる、ときこの人つく〴〵と聞居てさても理りかなとてあつと感じける

○頃は七月十五日の夜若もの、飛上りのあと先しらずの男一両人申やういざやかた〴〵一休のかたへ行夜すがらなぐさまんと申一人がヤやうされば我等もさやうに存ずる處よくこそ申出されたりかの坊主もうきにうきし坊主の事にあれゞこよひはとさら十五日いざ〳〵往てうからかさん尤とてうちつれ行はどに折よく和尚寺にまし〳〵て何れもよくこそ參られたり祝義なりとてはや酒盃を出されて舞つうたひつするまゝ一休たつておどられける竹の切よのたゞり水すまずにごらず出ず入らず人とちぎらばうすくちぎりて末までとげよ紅葉ばをみようすいがちるかこきぞ先ちる物でいおどれや〳〵人々よ若がふたゝびわる身かや只何事むかともわかき時にいだれもかもいたづらくるひいあるものよそれもくるしいものでもおじやらぬどく藥髮じてくそりとなりいなにをなげくぞ川ばた柳みづの出ばなをなげきいそれをなげかばなげかうまでようらゝか身にかゝる事にてあらばこそ牛いうしづれ馬いうまづれあだなうき世いどんなものじやと破れ扇のひやうしを取てうたいいうたへまいゝ舞へ釋迦のおか、はやしもたら女〳〵よい人々とおどりをおさめ玉ふみな人いこれを見て扱々御坊のおどりを久しぶりで見ました歌のせうが一だんおもしろしと一度にどつとわらひけりいざ〳〵此おもしろさに町へ出ておどらんゆ坊も同道ヤべし一休心得たりと太郎次郎とヤ下人をつれ玉ひ已上四人の人々思ひ〳〵にいでたちしが先和尚のしやうぞくにとかつたいかきの布なげづきん紙子のそでなし羽おりこしにいい九寸五分にひやうたんをぶらりしやらりとさげられけりわきざしは門前の彦六が一子お竹がしやうぶがたなをかねひらざしにひらめきわたして出たまふさておどりいい五條の橋より四五丁西にありとてこゝぞくつきやうのをどり場なりとてうちまじいりて爰をせんど、おどらる、彼二人のつれも見うしなひさゝ主從にこそ成玉ふ何としたまふらん足もともしどろわなり若き女のかたへゝら〳〵とところびかゝり玉へゞ女もともに土つかむ彼をつとが是を見てそつじなる曲者かなのがすまじといふまゝに大でゑ上てはりかゝる一休も心得たりといふまゝに大はだぬぎにはだぬいで大手をひろげてかゝられけり五人三人取つきてあなたへはひら〳〵此方へいひら〳〵とおしかゑしおし戻しゞし捻あふ其ひまに

頭巾早やぶれとびければ紙子いうしろのすそよりもぼんのくぼまで引やぶり前後ふかくにひしめきけりかゝる所へ太郎次郎い見るよりもまかせたりといふさゝに大はだぬぎて相人のすねかと見ちがへておぼんのすねをむずとゝり史やつといふて引ほどにおぼんのつけに打たふれ腰に付たるひやうたんも見ぢんに成て失にけり大勢打よりろうせきいさせまじと我もく〳〵とはしりよるやがて御坊いおきあがり東をさしてにげらるゝ下帯はづれてけつまづき命からく〳〵しのびて寺へ飯らるゝおかしかりける事どもなり

○都にて大富家なるもの大事のとむらひをしける事ありけるに折節導師にいいかなる人をか請じ奉るべきと思案まち〳〵に暮しける其頃名たかき知識あまたおいしけれ中にもむらさき野の一休和尚にしくはあらじと明日い法事になりけれべとていそぎ人をゞ遣しける折よく和尚卿庵のちりをはらひ庭のさうじしておいしましけるが少もあづまぬ御僧なれば心安く領掌し玉ひけるが思しよる事のあるにや、がてづかい人に身をやつし手足にすゝをにとり付くさり衣をまとひもくづの中より出たるやうに身をやつし彼門にたちたまひ乞食ののしるを御供養の御施行そたべ御慈悲を下されよとゝとりく〳〵にのたまひけるあるじ邪見に腹を立見ぐるしき奴原おひ出せよと下知しけれべ其とき下男二三人はしり出供養い明日の事なるに今日來ておいく出者やとて元よりたれとはいざしらずいたいしや一休をたゝき出し奉りさんく〳〵にてうちやくしふみたをしてぞ入りにけり一休はからき命をやう〳〵に助かり無さんのしいざと思しめし紫野へと飯りたまふ明日にもなりければ昨日のさまに引かへてわらたに湯あみし玉ひて衣と改め召されつゝ七丈の御袋裟とすそながに引かけ命禍まじりに取つくらひきとよりしもしやうに見へ玉ふ一休御こし玉ふぞといひ込ば旦那大によろこび佛前へこそせうじげりされども和尚ずゝみ玉いずいやそれまでいまゐるまじ愚僧いこれに候といしうそになりにじりさまいず旦那はもだへて是い何ことにておいしやすあらいまいしやこゝへい下郎の莫なりこなさへとふらせ玉へとて手を引たて奉れば一休御らんじてしからば此衣ゑ料供を給いるべし愚僧がたまいるべき子細ゐしとて一首の狂歌をかく

わうばくの三十棒とあてられて
身にはれきたる蟬のぬけがら

とよみ玉ひてこつじきも愚僧も同じ火と水ゐれ共きのふい棒をくらひ今日い御齋をたまいる事偏に此衣の色が光るもゐなりとぬぎ捨てこそ歸り玉ふ

さて前夜御やくそくやたひくひはゝやきとや御はなしやせうかのさへよやた間男どの日頃の本望はやげ共うへ後難をさへのかれたれども其のちい一人もいられずして女房とむかへくらしましたが此女房に子なくして年の十二三年も家つぎおきを人の命はしれぬ世なりとて親類のうちより異見して手かけ足かけなりともこしらへられよとすゝめて去方よりのきもいりとして土手町邊にかゝひ置しがまたこの本妻しおれたによつてすぐに御手かけを

内へ入おきて一年たゝぬにさつそくおなかゝたゝならずつひに安々平産とりあげ見れば玉のやうあわこさまができて是い末のはつものと一家一門いゝひよろこび御ふくろさまゝで御達者にとていつしかどのをさまに直し奥さまおついなつてうゝ見ぬ女とおるしかるに此御手かけはじめいおやさとにねられたとき一へんかた付ゑん結ばれし男がありしに貧福はしれぬもの不仕合にて渡世もおりがたく一先江戸へ下りてかせぐべしとて四年己前にあかぬ別をなしあふさかのせき越て東にくだり三年が間あづまに住ども仕合おもしろからずしてたより音信もなし其のち親のうちに呑たけのびたる女子をかゝへおく事もなしがたくして爰に奉公分に出したるにかゝる仕合とむすめのかげうれ去かりしにかの過にし頃江戸へ下りたる男かへり登りていとまもやらぬ女房をとゞめ〳〵しくねだりかゝれど三年い待たるにまがひなしとてとりあげずこの男元より身躰ふらちゑ外には足もためられず何れおかゝりてなりともとおもふ所又今の男い身躰よしなれば彼といひ是といひ女めもにくしと彼のところへ行てだん〳〵をかたり尤我等たより音信ざるい越度およつてゝやうに手をさげゞ事おればはじめの女房おさがひな〳〵只わたくしにゝへしてたまれといふに亭主何がひざふの新内儀なれば念もない事やかへすといはじしからばもらひかゝるからいかくでいたした程にとけしきする之手代や中間どもよりおひたゝき出してやつたじやまでされどもいきどほり底心にてつして無念なれば今日はゝたしにゝけ込んぬいさしちがへゝとさたするを一門よりこのひ談合してあつかひになり命があつてこそと銀十枚より小判十両までにてかんにんしやれといふを一ゞ反までいとおもふ心があつてなか〳〵かんにんせず又亭主も命にかゆる事なれば一貫目や二貫目やりたとて身躰のかいになる事にてもなけれども出してすむべきが然るべきに少れとところがかのしわん坊とかく右の通りにてかんにんおらずいともかくも分別しだいとつきはなしけるにしからばかくでいたしとて宿にかへりましたさて其じぶん東山近きほとりに万日の回向がはじまり貴賤の参り下向引もちぎる間もなくゝんじもの中より脇ざしのさやはづして切ていづるものい今の男おりしかるにかの亭主がまゐりたるを見かけての事おれゞやがてそれといふ間ににげまわる何がこのだんになつていゝ内のものどもとおたりにつかなんだときにかの已前に間男しられた男とふりし参りあひ近付なれゞにぐる中にかけへだて、あつかいんんとせしにつきのけ〳〵難なく大げさに切たをし女がたき愛へたるかとそのうへに腹かけて見事に自害してはてました何とむくひいおそろしいもの何のあやまりもなき出家を無實にころしたむくひが此やうにめぐりきてそのをとこもあやまりもなきに死しこの間男め命を大事につゝみだまりゐて出家を殺させよそに見ておのがとがをもづりても何のむくひもなふして今までおたるよむくひ來てかくのをくまた取さへたる眞の男も甲斐もなく結句あまり太刀さきにて胸のわたりを手負しが當座には死るまでもなく百日ばかりあやみてくさり死になりました何と惡因の業報とゞたり其の

ち此はなしをゞ糺の茶やにて取くみたるとき付てゐた姥がはゐしました此姥も姥でかの坊さまの越度になりましたればまそ何のせんさくもなくわたくしが命もたすかりましたとかたりヤたが此姥めも出家をころさしてよくおのが命をかばふて居た罪じやいづれもよく聞しやれこのだん〳〵の因果そのとう分〳〵には目に見へねど自然もくねんと此やうにつゐにゝ追つめられて死ると因果とが同じものでなにもの若きうちゝいつ年がよつていつ死るといふ事をまだ遠ひやうに覺へはるか手のとゞかぬやうにおもへどとやかくとするうち一日たち二日たち今年が去年になり去年が又去々年になりさて來年が今年になつて一ッ〳〵年がよるほどゑ十といひしが廿になりそれから後ゝ月日もはやくめぐり心もせゝしくなつてくる三十六遍をくるよりはなはすみやかにはや正月かこをゝしたり又盆か節句か朔日か晦日といふ内ゐ暮てゝ明て玉手箱つい白髮の雪をいたゞきてしかたをおもへゞ夏のよの夢よりみじかき市太郎長松にはや子が五人三人またその孫にも子が咲枝がしげりさて冬がれのしぐれさだめおきかたはしよりころり〳〵と死ぬるをおくりて歸くる人もはや空しくなつてあるは無くなきはかずそひまさる世界に見しりたる者ゝみなどこへやら往て見ぬと思へゞ彼未來とやら來世とやらへ日々ばらり〳〵と果行くほどにもはや地ごくもごく樂もつまりてさう〳〵借家もたてられまいとおもにちがひて無量無邊のひろい國かして一人もつまりて居られませぬとて歸りたる者なしそこへ行ものゝたくさんにあそこへも生れてゝにも鉢まきしてゐらりくらりとうみ出そゝ一日のうちに國々村々町々に何万何千何億にもせよ此世に生れくるほどの者はみな死ないでかなゝぬものなれどもいつか〳〵といんぐわの道理も一度ゝむくわいで叶ゝぬもの也余所の人ゝあれ程惡い事したるゝなけれど今に達者で息才で仕合もよふてゐらるればむくふものでもないかと必らずおもゝる、なとヤ事じやそれゝ〳〵おそいかはやいかせひに參ると心得るべしさて今の物語のありさまを聞て合点し玉ふべしたま〳〵婬欲の少ない人なれば又妻子をおろそかにして邪見にわたるものもありかゝる物ゝ狼中より來ると、かれて狼の生れがゝりなり成は婬をこのむ物がたりを悅び人々にあいせらるゝものゝ鸚鵡の中より生をうけあるひゝ邪婬をすけるものゝ又おのれが女房にのみほだされて親にあしくあたり不孝になるゝけつく婬のつみよりもまだふゝしこれらのものゝ斬舌地獄におちてくるしみをうくとも說せ玉ふ誠に三界に人をつなぐきづなゝこの婬欲なればいづれもやめ玉へしかしながらとまらぬゝ此色のみちなればかたゞ往生成佛はなりヤまいかとぞんじいふきれふヤたる如く戒をたもち威儀をたゞしてヤ念佛にもあらず成佛しがたき所のおの〳〵わきらと助けましとはいさゝか思しめさねども願はくゞゝてしにても御苦勞をかけ奉るがうとまし又おのが積犯の惡業つよけれゞをのづからをのれと引さがりてちがひの網にもれなんも淺ましけれど二百戒五百戒はたもたぞとも先さしあたりたる所の御法度の邪婬をゝうしてわられぬはぢをさらし玉ふなとヤ事也わるうきかせ玉

さずともすこしにでもわしき事はせぬうちに心をもち扱そのうへの念佛題目はいよ〳〵すぐれて佛もうれしとをぼしめすべしたゝ種の字は今の因果のたね木の實にて有と日ごろ合点してござれこれまでにて邪婬のさたはみました其うちまた〳〵御はなしゃさんわなりし

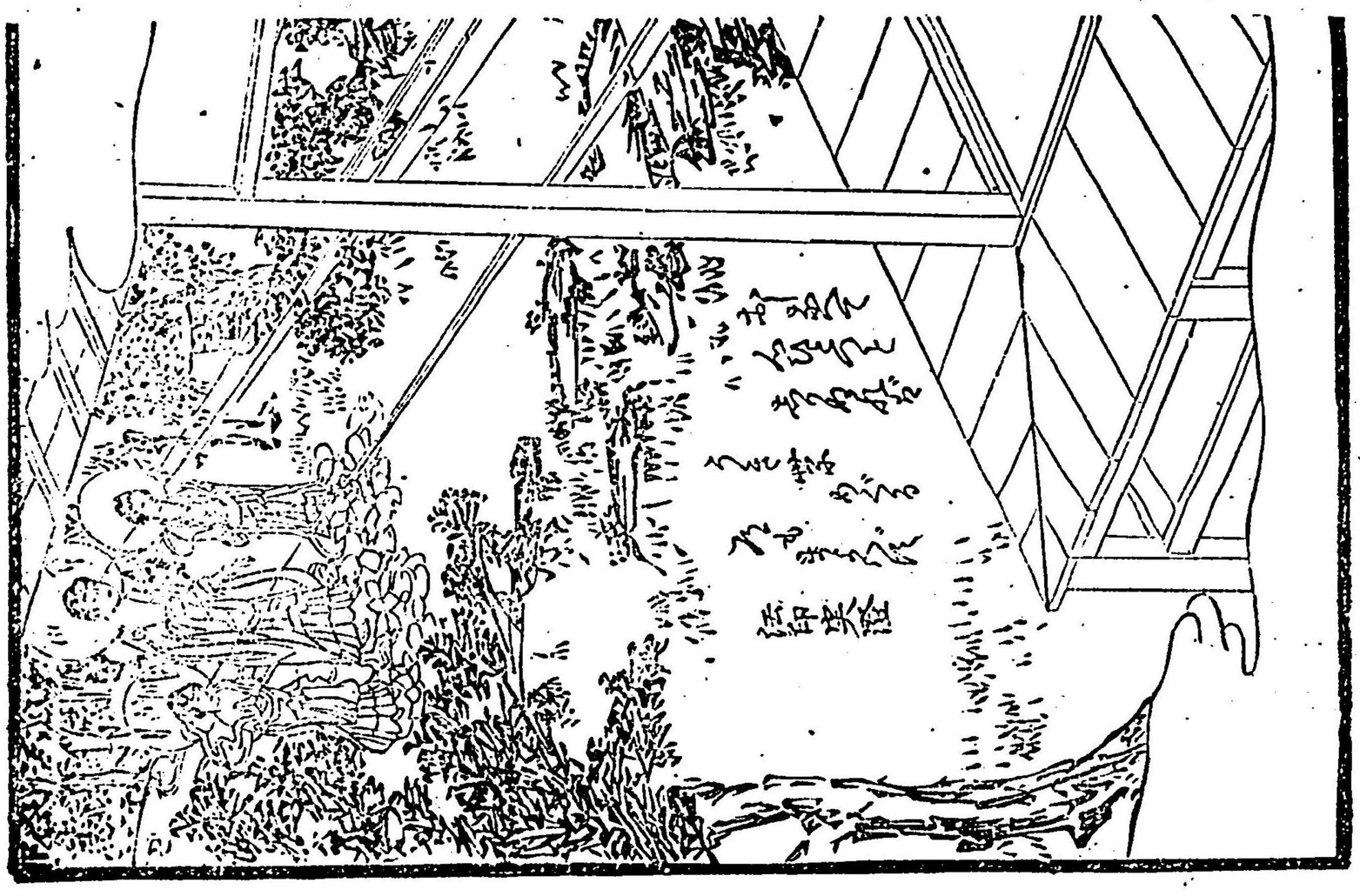
こゝ〳〵

○扨も一休和尚は活佛にてましましけると世上に風聞しけるがあまりにいとんとて去人ゃけるはこの間一休へ參りければよく來るとのたまひ虛空に座し玉ひて御庭のまつの枝に御腰をかけられ居すゝみなされしなり不思儀なる事にあらずやとしか〳〵とかたりければ皆人それは偽にこそ人間と生をうけかゝる自在のなるべしやと取沙汰しける事をほのかに聞めし一條の辻に札を立られし書に

佛法の修行せでに道なり天眼通を得たり虛空に座せんとすれば則ち座し座せましとおもへば則座せず通力自在を得たり若うたがふ人あらば見物をべし

とかゝれたり皆人是を見て此間人の評判しけるが、く書せらる、上は更にうたがふ所なし去ながら魚をくひて生して吐と仰られしも誠ならず左ある事にてやわらひといふ人もありしがいや〳〵それとい品かわりたるとてすこびたる人二三人つれだち一休の庵室へ行御札の表うたがひいわるまじけれと直々おがみゃ度いてこれまで參りたりとゃ一休出あひ玉ひ中々の事天眼通を得ゃひと仰られければ其中にすこびたるものすゝみ出ゃけるゝ是いいつわりにてあるべし虛空の事思ひもよらず先この扇の上にあがりて御覽あれとゃければいとやすきことなり去ながら其あふぎの上へものらんと思ふ心出れば乘る今日い早天よりのらふとおもふ心なし虛空へものぼらんと思いねばのぼらず重ねて御出あれのぼらんとおもふとき上りて見せんと仰られければ皆人あきれて皈りける其中の人ゃけるいいかにしても一休なり人のあまりにいはんとて天眼通を得玉ふといふをおかしくおぼしめしいましめ玉ふなりと感じて歸るとなり

○或旦那さたりてゃけるはこの御寺へ出入致し候人々ゃけるゝ話則の一そくもぬけたるかなゝどゝてわれらの愚痴なるをあなどり何とも迷惑いたし候問何にても一そく御とひに示し玉へとゃければ安事なりさらば參じられと有ければ參ずるとい何なる事にて侍るとゃすいや何なりとも佛の道にて合点の行ぬとを尋られよかしこまつて候とて佛殿さしてはしりいづる和尚おかしく思し召見ぬ顔しておはしけるせつあの間に走り皈るをいづくへ行れしとのたまへゃ佛の道に不審あらばゃせと仰せられしにより佛の道とは佛殿へ行く道なりとぞんじ一走視て參りましたがいかゝもがてんのまゐらぬ事こそ候わの山門の邊りの松に巣をかけて候が何の巣とも更に合点まゐらず大方鷲の巣とも見えて候得共しかとわきまへずいとゃければいや〳〵からそこそ今時分に巣とかくれとのたまへばいやとてもの御事に御慈悲をされて示し給れとゃければ其儀ならばはしごを持てのぼり見玉へと仰られければかのものいそぎのぼりて彼巣をおろし見れば子鳥の子もなく何とも見えぬなり一休何なるぞとのたまへば何も



中には御さなく侍るとヤせば

鷲の巣をおろしてみれバからすにて

これにつけて見たまへこゝが一そくなるはとおほせられければ彼ものなか〳〵何ともつけヤべきこゝろはなくとヤけれバ一休仰られけるはそこなるハ我も汝に一則さづけしらすへき心はなしとしめし玉へバかのものおどろきさては一休和尚をまも仰られかたく侍るかとヤければ自心自佛と答へたまへバよこ手をうつてかへり終に自得しけるとなり

○洛陽にある遁世しやありけりあるとき一休の草庵へたづね行はじめて見参に入奉らんよしヤける折ふし和尚御病氣ゑて此間はたれにても御目ゑかゝる事まかりならずハ御用の事もとかくかさねて御出あるべき由ヤ出さるゝに此坊主かさねてヤやう御病氣のよし御尤なりしかしながら立ながら御見参に入たきよしたつてヤけり一休かるき御僧もゑわはまじといとゞさて感したりとおもはれんもいかゞとやがてたち出たまひたいめんしたまふ此坊主ヤけるハ某ハ洛陽にまかりある坊主にてハ天台の法門をもかたのをくうけたまハりてハしかをども御坊へそこし不審をたづねヤたくぞんじ参ハ一休いかなるふしんバしハや我等ハ愚僧の身にてハへバいろはの講釋もしらぬべら坊にて返答ヤさんもおもひもよらざる事なりとのたまふ其とき僧のいハくいかなるをりこれ草木成佛一休容へて云く艸木成佛よりなんぢが成佛としるや又とんせいしやその成佛はいかなる所にかある一休なんぢが心にとへと答へたまふときやがて此坊主閉口して歸りける自心の成佛をもしらずしてあんどや外をたづぬる愚なりたとへば盲目が黒白をわらそひふんかうが月をのぞむにさも似たりそれ道人といつぱ生死の一大事を心ゑかけてひしのりんゑをたしむとするこそ道人とはいふべきにおのれが心をさへ悟らずして外を求といふぞをかしとて笑ひたまふ

○一休和尚ころしも春の半のとなるに花にてこゝろをよせ玉ひて幾枝もあつめ花籠にたてまじへて酒など参りてこゝろもわか〳〵しくなりておはします所へ一休の旦那の奥がた参りけるよくこそ來り玉ふとてさゝなどそゝめかしきをなを御はなしありてひたもの酒のみて遊バれけれバ日もはや西山にかたちのたつきもしらぬ御寺ゑ彼女房もべん〳〵とはなし居ける和尚いかにおぼしのしけんこよひは御とまりあれと仰られける女房のヤけるはかりそめに參りてあそび仕いさへなにとやらん似合ぬやうゑ侍るに一夜とまりヤさバうき名やたちヤべし其うへ夫ある身の事にハへバいかに心はさはおもひかなひがたく侍るまづ御いとまヤすとて立かへりしを一休袖にすがりひらにこよひとまり玉へと引とゞめ玉ふに女房ヤやういきゝではなきまは生釋迦のやうに思ひしがわらいに御心のありてとゞめ玉ふかや狂がるとはとかなとヤければ一休笑ひ玉ひて其方ハ心をかくれバこそ愚僧も是非にと止めヤせ心かけぬ者が御とまりあれとヤものかと仰られければ沙汰のかぎりや夫ある身がかゝる事侍るべきかとふり切て興に乘立かへりけるさて夫にわひて一休は佛のやうに思ひそなた樣もをぼしめさんがい

たづらなる御坊なりわらはに酒をすゝめ玉ひて今まで引とめ剰さへこよひは一夜とまれとかなに御いれけるかならずわの寺へ参り玉ふなと二心なきいけんをくりかへし〳〵申ける夫はさるものにて手を打てわらひさりとては御なり汝がかくいふも顔よりよく思ひ見よいかなるものにても我をたのむ旦那い女房になれ〳〵しげに一夜とまれとはなか〳〵出家の身わていひがたしよし一体和尚と枕をあらそれば今生後生のうつたへ成べし我等をかね侍らず急ぎ行て一夜遊びたまへなに〳〵の誓言ぞ我等のねたみ心なしと申せば左あらば引かへし参るべし御よるさびあるべしと申ければ急ぎ参りてもゐ〳〵と和尚をなぐさめ玉へと申ければ女房よろこび一間の處へたちこもりおしろい口紅きゐねの化たるがとく引つくろひ衣裳をかざり急ぎ興にれり一体へこそ参りけり一体はや疑玉ひしに門ほと〳〵たゝくをどろき立出玉へばかの女いかにも細々としたる壁にてさきには是非に一夜とまれと仰られけれども夫の心うかゝはしくてふりきり立帰りしが余り御殘り多くて夫にいとまを乞いへば苦しからんと申もゐおはづかしながらとまりに参りたると申せば一体いや〳〵もはやいやにていと御かへりあれさる程いこゐたへ心かゝりたるがはや心かゝらるはや御かへりあれ〳〵とて門戸をかたくしめ音もせずさりとて御なぶりかと申けれどもあへて音もせず是非なくかへりて夫にしか〳〵と語ければさあらんと思ひけること、て笑ひて天下老和尚也心うごくときゝ動かしうごかされべうごかしたまはずもはやいやとは誠に行水の如き御心やいさぎよし〳〵とかく凡人にてはなしとていよ〳〵尊みける

○扨一休和尚の時代までは方々の寺々より七月十四日には大内へ灯籠をさゝげゝる大徳寺にも開山大灯國師よりもゐゐありてさゝげしかば後々まで例になりやめがたくありければ一休こむつかしくや思召けんあるとき大裡へ灯籠をあげるとて狂詩を一首つくり灯籠にそへてさゝげ玉ひける

性靈今日出來迎　雨露直供二萬葉柵一
挑得灯明天上月　松明流水讀經聲

と遊しければ　帝叡覧まし〳〵てさとに一休の詩なるものをやうなき灯籠をもとめけるなり自今以後大徳寺よりも何方の寺よりも七月に灯籠をさゝぐる事あるべからずと仰出されけるとなり世の人これをきゝさてもゝ〳〵名僧かなかゝる御心ざしにては定て御寺にも性靈祭りはあるまじ若あらばさてそかはりたるとにてやあるべしいざ人々一体の御寺へ参りて見物し末代の語り句ともなそべしと四五人づれにて参り一体へ御目にかゝり此間　禁裡へさゝげ玉ひし灯籠の詩洛中ふて是のみさた仕い定めてかゝる御心ざしにいとゞ性靈まつりも遊しや間敷いとゞければいや〳〵われらは三界の衆生をおもふもゐに有縁無縁の悪鬼をまつりてしゆ〳〵の物を手向いもゐ廣大無邊なる性靈まつり仕いと仰られければ皆人案に相違して此御寺には見えゞさずいが何れにて御まつりいぞ申けれべこれより四五町わきをかりていと仰ら

る皆人ヤけるはとてもの御事に見物仕度い御人そへられ下されよかしとヤけれべきどく成事をいひ玉ふ方々や人さでもなし我等同道ヤべし水むけし玉へと誠しやかに仰られければ皆々よろこび御跡に付て行けれべ東の河原へ御出あつてこれ〳〵見たまへとて両手をひろげ玉ふ皆々どこもとにていぞとうと〳〵しけをべ一休是見玉へとてくる〳〵と舞ひ手をひろげたまへども皆がてん行ざりけれべおれ〳〵は見物かなるまじきぞといてきかしべし只耳にて御聞あれと仰られけれべ皆人あきれて立居たり一休一越調あげて仰られけるは

山城のうりやなすびをそのまゝゐ
たひけになれや賀茂川の水

聞玉ひけるが是大なる性霊たなにてはなきかと仰られければ皆人さてゐ〳〵いやともいはれぬ御意やとて感にたえてかへりける

あるとき鑑川新右衛門來て佛法はなしなどしてあそびゐけるゑ一休の仰らるゝは今ごきの出家心ざしうすく佛い五百戒をさへたもち玉ひしとかやせめて其かず取の五戒とべよくたもつべきをなりとのたまへべ新左衛門ヤされけるゝ眞に沙門ゝヤにおよばず俗のうへにてもせめて五戒ゝたもちさき事にとヤに一休いや俗ゝ是非なきを也出家にゝもたせたく思ふ也去ながら目に見て耳に聞ゆるもの五戒をたもちがたしわづか一尺の扇さへ五戒をやぶるうへはまして僧俗生としいけるものたもちがたきをゝりなら新右衛門これをきゝて此扇子さへ五戒をやぶりゐや中々やぶりたりこれ又和尚の出來口にて侍らんいで一々とひヤさん答へてきかせ玉へいつもの御頓作のゐかる口うけまゐらせんとヤければさらば一々とひ玉へ新右衛門とふて曰

如何是殺生戒　答て曰　竹を切て骨とはなさゞるや
如何是偸盗戒　答て曰　虚空の風をぬすまざるや
如何是邪婬戒　答て曰　かなめと〳〵あはせずや
如何是妄語戒　答て曰　給そらとをかゝざるや
如何是飲酒戒　答て曰　開ててさゝんざいはさるや

これ扇の破戒ならずやと仰られければ今にてとじめぬ口なりけれども一入ありがたくぞんじたてまつるさりながら五戒のうち偸盗戒のおん答に不審ヤたくゐ和尚の曰いかなるふしんゐぞや新右衛門のいゝく古語に

扇是日本扇　風不二日本風

ときくときい扇こそ日本のあふぎをうごかしめ風は日本ばかりとはかぎらず千里同風とあるからとぬすむところいかやとおぼけて一句ヤければ一休新右衛門とのたまふやわといふ音もなく香もなき人のこゝろゐて
よべべこたふるぬしもぬすびと

とあるはしければさてもよき御口や先はどよりの問答を御六かしながら一筆あそばされとて書てもらひてそのまゝ掛ものにさゝれけるとなり此かけもの都の中に持たる人ありこれを聞す

○或人一休にとふて云く何と和尚さま世の中に化ものゝ人毎にきどくふしぎとヤものと覺えいさやうにていや一休答て曰いや只中にぶらりとこたへたまふこのをとこ大にいらをたてさても御坊はきて之申さぬ御返事かなそれ人の物をとひかくるに凡そ法こそ有べきに中ゝぶらりといふあいさつはつゐにうけたまいらずそれは人をあぶりたまふか御出家には似合ぬきぶんや是非とも此上は子細をたづね申さで置まじ坊主とはいはせまじ訪八まんも御示現あれと大よいかりヤける一休この有さまを見玉ひさても〳〵其方はたんきなおそろしき人かなそなたのやうなる人といもの、咄しもならぬ子細は其はなしくはふといふ氣ぶんなり先よく合点してゐみやれそなたはもの、不思儀をとふもゑにそゑたへ幾度も申聞せる事なるに同じ事を又はいひ又云おめさるにがてんのもかぬ人かなともおひて只今のやうに返事いたす事也それもの、ふしぎを立れとふしぎ不思儀もおしと思へばふしぎ成事は一ッもなしまた佛も神も有とおもへはあり無とおもへはなしされバあるゐもおらず無にもゐらず扨あるときは中にぶらりといふ物ではなきかといはるれバ此人手を打てかんじけるとなり

○一休和尚の御弟子に雲知坊といふ者あり江州に住けるが年月を經て師の御もとへとひらはんとて紫野へ參り寺門へ入らんとするに小法師棹をもつてうたんとすこい何事ぞといんとすれども物もいはれずにげ去ぬ是はいか成事やらんはるゝ〳〵思ひたちて來りしかゐもなく空しく歸るべきかとおもひて又行ときに小法師此うしはいかさま思ふ事れあるやらん度々來といひてたづかたはらに引入つなぎおく其時我身を見れバ牛なり心うき事かぎりなし是い日來の信施のつみふかきもゑにこそとおもひて尊勝陀羅尼こそしんせのつみをせうめつする功德あれとさすが聞置て誦せんと思へども苦しらざる事なればかなはずせめて經の名なりともとなへんと思へども苦こはりていはれず只そゝめくバかり此牛は病のあるゐや艸もくはず水ものまずそゝめくと人言けれども心うきに食物の事をもうちわすれて三日三夜そゝめきしが心ざしのつもるにや尊勝陀羅尼といはれたりけるとき本の法師になりぬさてつなをときて和尚の御前ゑ行ぬ和尚仰らるゝは御坊はいつきたれりといひ玉ふに三日已前に參りたりと答ふいつくゐ今まで有つるぞと、ひ玉ふに馬屋ゑさふらひつるとて有し次第をかたりける和尚不便におぼしめして彼尊勝だらにを、しへたまへばいよ〳〵此坊主得道しけるとなり淺ましき事なりをそるべしはづべし〳〵

○江刹しやうれん寺わ一休はしましける時ある夜ふしぎれ夢を見さまゝ其隣家に角助とヤもの、親喜助といふもの三年巳前に死けり今生に居るときはまさゝく片目にて有しが一休へ夢中にかたりヤやうはわれは死て雉子になりたりいつ幾日には地頭より御狩に出たまふさらば我命はたすかりがゑし此寺へにげ入事あらバかくしてたべ生々世々にうれしとをもはん我もとよりたゞんじのをくかた目しいたりしが其折からなれバ定めてきじのかばも多く飛入る事あるべけれども片目しいたるをしるしにたすけたまへとものをもひたるもがたにてなく〳〵かたると見て夢覺ぬあやしく思しめす所に次の日あんの如く地頭たかゞり有けるじかるにきじ一羽寺のうちへ飛入ぬ和尚御覽じて扨はかの夢に見つるきじは是ならんと取て見たまふに彼かいひしとく片目なしやがてかのま中へかくしてふたをおしさあらぬ体にもてなし玉ふところへかり人うち入て爰かしこ見けれどもをらず力なくして出けり和尚此きじを取出して今の世繼角助にしたうをくわしく語りさまへバ角助なみだを流し此鳥をもらひ飼ごろしたると聞はべるふしぎなりし事どもなり

○江刹ゐ竹林寺といふ寺あり此住持生質背低くして三尺バかりなりけるがさる方ゐ思ひ入たる美少年ありしをひそかにかたらひ折々寺へよびよせねんごろせられしが何とかしてうちたへ久しくさたらざれバ此住持大に氣をくさらかし何事もうちすてね間ゐうちふしけるが下人少しのゝちやうはふありしを腹だちまぎれに枕をなげうちしてさん〳〵に惡口しける所へ一休もとより竹林寺はしたしければ、からず來られ此体を見て是と何事をいひて腹立し玉ふぞまつ〳〵かんにんめされよ何とバしいたされしやとヤされけれバ住持ひそかにかたりてかやう〳〵の子細ありて此ごろは打たへまゐらす何とぞしてよび度いが親兄弟の前をしのぶよし承るが何ぞ次となきかこつけしてうちたへきたらざるはいかなる事ぞとひ、やり度候御坊ゐい才覺人なればよろしく頼むといふに一休うちわらひ夫ハ何より易き事なり此ごろ澤山にある菜と錢と小豆とをすこしづゝ紙につゝみて遣り玉へ竹林それはいかなる事ぞ一休ヤさるゝはなぜにこゝかといふ事なり竹林さゝて一だんおもしろく候さらバ明日はこれをもたせやるべし今日は雨中にて猶さら心さびし幸ひ坂本より珍酒をもらゐたり一ッまゐられトヤ飛たべヤ

さんとてたがひにさいつさゝれつ酒宴なかバに一休たつておどられけるがせう歌に

君がこゝとてまくらがしろか枕なゝげそとがハなしちくりん〳〵ちんちくかん

さなちくりんじやはどゐきのそんよなをぞりはなんよさでちやせんやころさ

とうたひかなでゝかゑられけりおかしかりし事どもなり

○其頃江刹烏山村といふ所に六條なにがしどの、御領分にてありけるが久瀬又右衛門と申家老どうよく心のもの成がもゑ百姓をひたものせぶり取あまつさへ農具までもとりつくすにより百姓をのづから耕作もならず在所に住まれもして一人づゝ行方しれぞのく程にやう〳〵殘る百姓わづかになり何をもこれをあげきいかゝせんとひしめきあへり其中に一人がヤやうい

いかに百姓なれバとて是いあまり無道なるしやうかな耕作の道具までもとられては何を以て作りをせんしかれば在所にありてもせんなしとても死する命なれバ此事を一先うつたへて其後はともかくもあらんとおもふいいかにとヤける此儀もつともと一同しさて訴狀を認むるにおよんでたれかれといふといへども皆一文不知のものどもにてたれか書んといふものもなし折ふし一休はちわ行玉ふを幸のとなりとて皆々立よりて訴狀を書て玉へれといふに一休きゝ玉ひて何事の訴へにやと問玉へバしか〳〵のよしをかたるに一休聞ていや〳〵それは訴狀ごとでには及ぶまじ是をもちて六條どのへさゝげよとて歌を書てやり玉ふ

又もまたとりてもきかぬ一村の
のふ具殘らずくせやとり出

とよみて是をつかはされければ百姓どもかゝる事にて中〳〵とり上候事思ひもよらずとヤけれバ一休いや〳〵これにてよし是非これをさゝげよと仰られて歸り玉へばいづれもいかゞあらんとおもへどもみな土百姓のあかゞりどものより合なれば論ずれどもめづらしき分別も出されバ是非なくして彼うたをさし上ければ六條どのはらんありてめづらしき訴狀かな百姓の分としてかゝる事は思ひもよらず定て人だのみて書つらん有のまゝにヤべし若陳じなばくせ事なりと仰らるゝよつて一休をたのみしに一休これにて事足とヤせし趣をヤ上けれバされバこそ其おどけ僧ならでハか、る事いはんもの有とも覺えずと興じさせ玉ひて其のちハ農具をもかへして百姓になさけふかゝりしとぞ

扨も前冊につゞいて講談かたりつめ終り侍りしがまとゐかやうに座をおなじうし詞をかわすもみな他生の緣とヤそのはなす事もおほくあるひは役躰もない物がたりに夜日をあかしときをうすは同じ事ながら日のつゐへとさらいかに馬があたりとて人事そしりてかたりあそぶハせんもない事たがひに罪になりますれども此やうな講談說法のまねをいたして一遍の念佛題目をとのうるとまづ惡緣ではなし座興にもおどけふもよい事のまねをずいぶんしたがよしわるひまねはなるものよい事ハうそにもまねられぬつれ〳〵卿又も此こゝろをかいておかれたとふりたとへバ氣ちがひが丸はだかになつて大道をゑしりあるくになるはゞ氣のちがハぬ人があの狂人のまねをして見せんと丸はだかになつて同じやうにはしりまわらバこれもともに氣ちがひといふものなり然も其心ハ違ハぬなれども形がうごけば先誰を人にしても亂氣でないとはいハぬたとへ內に惡心があらふともまゝ身の行ひ心の持やう物のいひやうをまねびて儒者のやうに身をもてバ其儘じもしやといふものなり扨內心は俗であらふともあたまをそつて衣を着けさ袋かたちでもくびに引かけしやくでうふつて虫もころさぬやうに形をもてば御出家さまなり誰か俗人といふべきや然れバ惡のまねをすれバ惡人善人のまねをすれバ善人といふものなりとかくよいまねをすべしよいまねとヤたら身体のならぬに金持衆のまねをなされよといふ事ではないせめて眞實より佛法はありがたい

物といふ心ハをこらすとも身のうへにまねをしてなりとも善根をつむやうの手立とゞ事なり故に悪心僧都は名利の二字を拜見し玉ひて

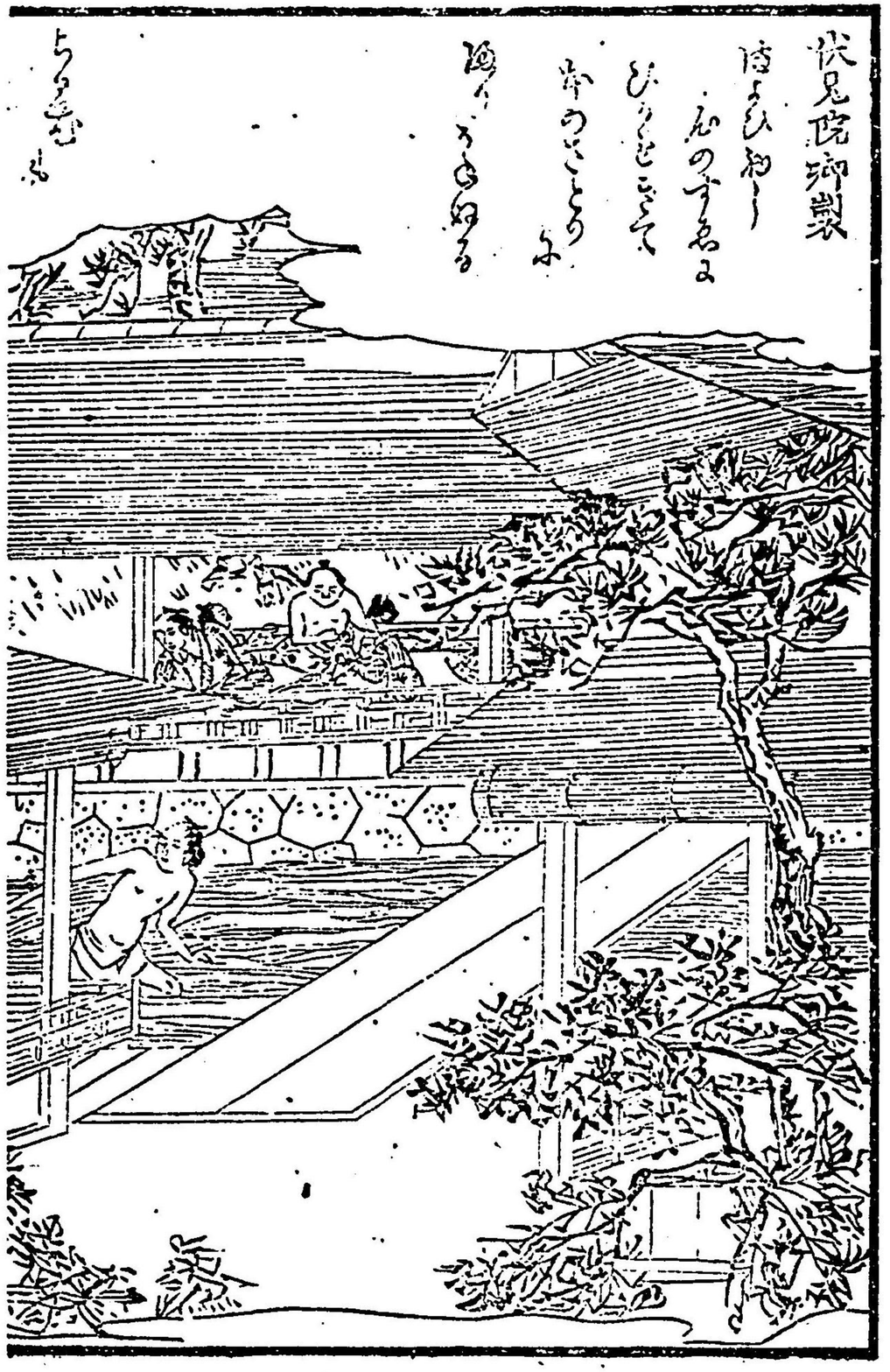
世をわたるはしと思ひてふみ見しに

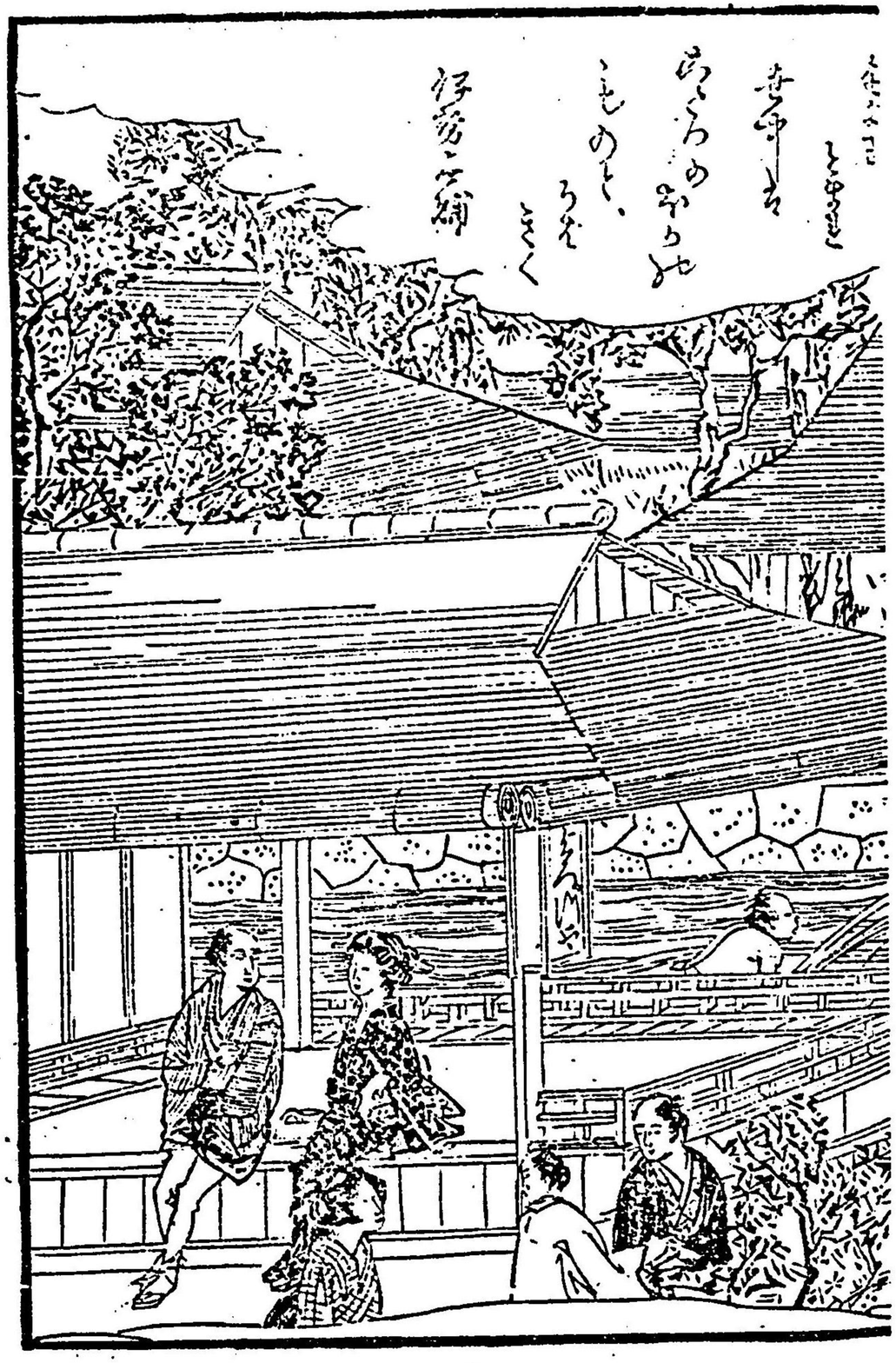
まことの道ゐ入ぞうれしき

とよませ玉ふ僧都もはじめはたゞ佛道をそれほど眞から底からには思しめさず彼禁中において紫の御衣などたまわりしやうなる事と手がらにし人ゑ學文者といわれたや知識とあつて人に用ひられたやとひとへに名聞利養に修行し玉ひたがいつの間にやら誠の佛心にかなひ心がうかびてやれ今世でハ名利ゐばかりか、はつて一大事の所をとり失ゐわんとせしよゞ急度心をとり直して見れば今かくのとく大道心の心はおこるとこしかたの名利を求めん〳〵ゐもふて修行したるがもと、ゐりぬれば世をわたるはしと思ひてふみ見しにそれがたねとなりて真の道に入たるハ世上もなきうれしさよとよませられた此僧都さへはじめハ名利を心にかけ玉ひたとあり今どきの各何ほど後生とねがひだてなされてもさゐ今其方がくびをきるがそれでも佛道が有がたく思ふかと釼をふり上たらばもはやすきと後生ハねがひますまひもるし下されとゞゑ人多かるべしすれば身命おしまぬ佛道者後生ねがひといハれずもとより今生から釼にて身をさかるゝといふハ今世からなる修羅道じやかうゞ思僧ゐどなか〳〵それほどの信心ハおこりませぬ其くらゐに成てもひかぬ佛道者ハいゞどきはめづらしい事殊に名利にさへ後生をねがふと有ハとかくまづ命かけるまでハちかひ事名聞に成共佛道願ふがまねよきと思しめしひたもの談義寺参りもゐされたがよし又貧きものもあらばほどこすもよし心〳〵に叶ほど善根のゞねをし玉へまねにつゐてはゐしが御ざるが次に仕ませう

○さて一休江州にましますときある寺の卒都婆がばけて八尺ばかりの入道よな〳〵そとばの影に立そふて居ける下部のものども是とおそろしがり用事をと、のへる事もならず増てあたりへハ猶参らずいかゐる子細ぞと知人もなし或八和尚こかくとかたる一休その卒都婆と見たまひけるに文字のちがひありさてハとてやがて改ため書さてられける或ときくだんの安鼎夜半のころあらハれ一休の前ゑひざまづきてなみだをはら〳〵とおぼして曰我地獄の中に入てさまゞの苦を受る事たへがたしあハれ御僧すみやかに救ひ玉へとたゞしは〳〵とくどきける和尚のいハく汝圓通より出て圓通にいゑる何れの所にか地獄ありやと仰らるれば入道こたへて曰いやでくちうを論ずる事なかれたゞ此躰と見と和尚のいハく其躰まつたく佛性同体にへだてなしとのたまへバ又入道ゞやうしからば名を付てたべといふ一休のいハく本空道入禪定とゞさゐゝとき其まゝ靈き之〳〵としてうせにけり其後ハ二度出ざりけり一休にとむらハれんが爲に來れりと皆人ゞあへりけるあハれなりし事なりけり

○あるとき一休病氣にてこしをいためのびかゞみも自もうならず迷惑玄玉ひいろ〳〵養生し玉





へどもいたみやみがたしさる人來りてヤやう其せんきの鹽風呂がなによりもよく候其いたむ所をいく度もふき付れバやはらぎて即時によく候私も此頃せんきさしおこりしを風呂にてふき候へば其まゝやわらぎあくる日ハもる〳〵と立ゐも自由にいたし候間御内の次郎太郎はつれなされ〻れに其いたむところをよくふかせ玉へとをしもるにさらバとてやがて鹽風呂へ入玉ふ次郎太郎もともに入けりさてかのいたむところをふけよとてふかせらるゝに二人のものやがてふきにゝりける其ふきやうにちくしやう〳〵といふてひたとうちたゝひてふくときに一休つく〳〵とき、玉ひて何とか合点し玉ふやらんそのまゝ返答に不奉公〳〵〳〵とこたへ玉ふ太郎次郎もふしんにおもひけれども主人の事なれバいかゞと問ふともならずしてうち過ぬる人湯よりあがりかたすみにゐてつく〳〵と聞てはらすぢをよれり此人わざとだゞり居てあくる日和尚のもとへ行ヤけるハ和尚さま夕部風呂へ次郎太郎を連させられ御入なされいやされバ此中ハせんきにてめいわくいたし居る所へわる人のかしへヌて風呂へ行てそのいたむ所をよくふかせよと有もへ夜前湯へ參り候其方い何として知り候ぞいやさる人れはなしにて夕部うけ給り候しかれば世わい風呂をふくものも多くふかるゝものもおはさになんぞちくしやう〳〵とふけバふかるゝ者不奉公〳〵〳〵とこたへ玉ふはさて〳〵めづらしきふきやうふかれやうと風聞仕候さやうにふき又こたへ玉ふはいかなる事にて候ぞとヤければ一休それハ次郎太郎がちくしやう〳〵と云は合点さゐらず拙僧ハもとより畜生にてもおしはたちくしやうといいるゝべき覺へなししかしちくしやうなるしはざがもしあらバ彼らが奉公のしやうがわしきもゑならんさるによつて不奉公〳〵とこたへたる也とのたまへバ此人おどり上り手をうつて感じけるとなり

○江州堅田の浦ゐ彌五郎といふ船頭一人ありけるかのがわざながらいやしきいとなみわやつれはて一生がゆ穂の禊揖の枕をそバだて眞の道にうとく〳〵して心ざしさゐがらゑびゝの丸重の花にわそぶともがらには、るかかとりかのづからいやしきになれていみじかるべき事を露しらずかたくなゝ鈍きかしへをはぢくやまざれバいとあさましきよすがなりけるがつゐに身まかりて死にける妻子したひなげく事かぎりなくさてあるべきにあらざれば火にやせん土にやうづまんとかなしみけるせめていかゐる知識をも頼みて後世のくげんをたすけたきと思ふ折から一休風雲の行衛を思しめして浦のかたにねまりゐて四方の致景をたのしみておわします所に妻子これを見て衣のそそにすがりたゝ今かやうのあさましきもの、相果いがあれはしひをたれて役もの、後世のくるしみを導きてたまへれかし生々の厚恩にて候べしとかなしみける一休ふびんに思しめし何より安き事なり引導さづけ得させんとて此家にきたり玉ひ其し玉ふ儀こそふしんなれ先々死人を米ともにつゝめよとてたはらに入て繩をかけ丸太舟にかきのせ湖水の波にうかべけるおきにいたりて聲をあげ高らかにのさまふやう

此俵ハこれ元來米俵にもわらず豆俵にもわらず汝はかたの彌五郎俵なり

江河にしづんでうろぐづのゑとなり佛果を得よ喝との玉ひ水の底にぞつき入ける是成佛の引導也

○又一休堅田の庵におんせしとき海はたへ立出給ひては毎日つりをたれて魚をとりてまゐりけるに御弟子兄弟の僧達これを不律なる仕合なりとて一休を一間のところへよび入口々に異見しければ一休の曰各たちを學門をするとて何事をかし給ふや我等を古しへの祖師の眞似が禪宗の學問と心得たりしかれば例なき事を仕らずいで〳〵古の例を知らずば見せんとてもとより給ひきやうなり蜆子の海老をつり給ふて喰ふ處をあり〳〵と給に書一首の歌をかゝれける

いにしへのかしこき祖しは蜆を釣し
我とわほうて魚をつりてくふ

と遊しかの僧たちにさし付さあらぬふりにて居られけるみな〳〵かの給を見てさても奇容なる給や見事なる歌の書ふりやと感じける其中にての老僧あざわらひ古の祖師の蜆を釣參りしとて貴僧の若きなりにて魚をつりまゐらんと鵜の眞似して烏が水をのむといひし類ありさて貴僧のこの蜆子和尚のゑびつりてまいりし御心根をしろしめしけるか中々及なき事やと笑けれゞ一休少しもさわがず色をもかへずさて〳〵貴僧の愚なる心にてゝ蜆子海老を喰し心根がてんゝまゐるまじそれ人ゝ若にもよらず老たるわもよらず道におゐてゝ老若ゝあるまじ老たるが悟道せゞ門外のむく犬も悟道すべし世尊ゝ三十成道とうけ給ゝる我等が祖達广大師のいにしへを承るにある時般若多羅尊者の來り給ひて光明かくやくたる璧をさゝげ三人の皇子に見せ給ひつゝ心をためさんとておの〳〵此玉と寶としたまゝんやと問ひ給ひしとき御兄二人ゝこの璧にまさるたからゝ又あらじとの給ひけるに達广大師ゝ七歳にて一の乙皇子なりけれども此玉ゝ世寶にて寶にあらず智光の珠こそ又なき寶なれとて彼玉をなげうち給ひければ尊者おどろきかゝるいとけなき身にしてふしぎなる人かなとて則御名を達广と付られけるはじめゝ菩提多羅とヤせしとかや達广とゝ萬事に達し通じて見がき立たるやうなる人なりとの心とかやしかれば悟道ゝ老若にゝよるべからずゞ一休手を打て彼老僧が異見の拙きを笑ひ給へゞ老僧も人中にて込付られ赤面してヤされけるゝかる口にまかせてヤされたり如何に口にていふとても心ゝさもなきものなり貴僧ゝ實正蜆子のゑびまゐりし御心根をしり給ふか一休答へて曰中々存知たり老僧ヤ出るゝ各いかに思しめすそれ禪宗ゝ以心傳心なりいかで蜆子の御心が知るべき蜆子の心ゝ蜆子ならずゞしりがたしとあざわらへば皆々尤と打わらひて蜆子の心ゝなか〳〵凡人のしるべきにあらずしかし一休ゝ蜆子になりて御覽じけるが一休少もおくせず扨々おの〳〵ゝおろかなる事をのたまふものかな我等ゝ蜆子にならねども蜆子の心はよく知りたりと宣へばみな〳〵それゝうけがたき返答なり一休されゞとよおの〳〵は此一休が心になりヤさねば愚僧が蜆子の心になりたるかならざるはしれヤまじと大に笑ひ玉

へばかの〳〵藤咲門にてにげられけるとかや

さて爰に善悪ともに眞似によると申事の御はなしやそうわる人曾我ものがたりの淨るりわやつりを見物に行き彼十番ぎりの處がおもしろしとのみ思ひこんで彼五郎十郎が祐經を討た所が不斷目に見ゆるやうにあつたときに日頃念頃なるものひとりきたりて酒ふ夜をふかしてつひにそこにねて前後をしらず高いびきしてねるに此十番切のすき男居ねむるに目がさへて寐られず折ふし彼夜うちの五郎十郎が淨るりをもおもひいだしてむかしの祐經がうたれしも此とくね入つらめなぐさみに兄弟が討たるところを仕方して見んとふつと思てあたりに刀脇ざしあるにまかせ両鈔きめて其方は工藤ではないか我こそ曾我の何がしなり親のかたきのがさぬと刀をすらりとぬきながらねぬ入たるもの討は死人をきるに異ならずかくもゆたかにねるものか覺悟せよと枕元の縁におどりあがつてふみならせば此男目を覺し南無三寶とふんどしもせずにゝげ行て次の間の屏風の間に飛かくれてふるひ〳〵さしのぞきまとては人たがひならんさら〳〵身に覺えなし我は生たる鼠一疋ころしたる事待らずと手を合て色青く其興を覺せしかはを見て此男もをかしさかぎりなく是はあやつりのまねじやと大笑ひになつた各〳〵にすゝめるが此たとへなりかたきといふは八万四千のぼんのふの敵つるぎは念佛題目の利鈔也かれ煩脳の中の大將無明や元品やといふ敵めは聲聞や緣覺といふ修行者さへ手に余りますまして二ぬた方の千人万人の勇力では行ぬ事じや是が行くらいならば何れもまねになりとも名聞に成とも後世をねがはせられよ善人のまねをし玉へとは申さめとてもそれが行ぬに方せめてものとにといまねをめされよまねに成ともすれば今の如く人たがひでござらうにきもをつぶす敵もあれば どこでは功をつみ德をかさねて名聞の中より眞實の道理があらはれて眞の道に入事が有ぞと申事を惡心僧都もくれ〳〵仰られし事なりさて眞似よも物事さま〳〵多けれども此やうに經文のはしくれでもよみたり聞たりするまねが其中ではよし少でもわるまねなどせぬがよい世話ゑ佛のまねはすれど人まねがならぬといふ金持どのや位高な衆のまねおのが分に似合ぬまねがならぬといふ事じや今の眞似といふは其やうあけつかうな形すがたのまねではなし只心内をあしく持ずかたちによき取まはしをうつせといふ事をうたに

かしてきにうつせばなどかうつらざらん、

花の色なる山ぶきのいろ

とよみたるやうにうつそふず又まなぶと思はゝ品形はめん〳〵の生付貧福は過去の業心はなどゝかしてきよりかしてきにうつさばうつらざらんと書たるをよく心得て眞似なそれよと申事也今の間まがひなきやうに身を持給へ又まねに付ておかしきはなし次に申ませう

○爰に一休の時代に堺に新右衛門尉親當といふ人ありけるが禪法に身をやつし心をあやましけるに一休の發明なる事をきゝ及びて道師とたのみ奉るべしとてあるとき一休の草庵へたづね

行柴の扉をぼと〳〵たゝくに折節和尚出たまひていかなる人ぞと問ひ玉へバいやくるしうもいはず佛法修行の大俗まゐりて候とヤされければ一休はやとひたまはく

なんぢはいづくの人ぞ　答曰和尚と同國

國には何事も侍らぬか　烏はかう〳〵雀はちう〳〵

こゝはいづくとかしるや　ひらさきに染たる野邊

いかんとしてか染けるや　尾花朝かゐ紅菊柴間

ちりての後はいかん　宮城野かはら

原には何事か侍る　水は流れて沈々風は吹て颯々

よき哉やこれ〳〵と請じ茶をまゐられよとて

なにをがなまゐらせたくはおもへども

達广宗には一物もなし

返し歌

一物もなきをたまはるこゝろこそ

本來空の妙味なりけり

ヤされければ一休のたまひけるとは開及びしより鱗川どのには道心者なりとて感せられけるさて四方山のはなし過て親當ヤさをけるは少し承りたき事あり邪正一如といふ心得はいかなるがよく侍るや一休問玉へとて邪正一如の心を

生れては死ぬるありけりおしなべて

しやかもだるゞもねても杓子も

又問空即是色とはいかん答へて

しら露のおのがすがたは其まゝに

紅葉におけばくれなゐの玉

又問色即是空の心は

花を見よ色香もともにちり果て

こゝろなくても春は來にけり

又問世法はいかに

よの中ぞくふてはこして寐ておきて

さてその〻ちはしぬるばかりよ

又問佛法とはいか成心得をよしとし侍らんや

佛法となべのさかやき石の臼

紿にかく竹のともずれの聲

と一々問ふ言葉の下ゐ歌よみてたへられければ親當舌をふるはかして聞及しとりたけき活

僧かなと頼もしく思ひければいよ〳〵道を示したまはれいつまで語るも濱の眞砂のかず〳〵なれば先ばいとまやすとてしほり垣の邊まで歸りけるが手をはたとうち立歸りて一大事の安心わすれたり佛にはいかゝして成けるぞと申ければ一休きやつはくせものかなと思しめしそれはいと易き事也とてふんぞりかへりて目口をひろげてかくして佛にはなるよとのたまへば親當おどろき活大禪師かなと心空及第してこそうへりける

○一休和尚は奈良のさき木といふ處に折々はおはします其邊の村々は近衛どの、御領地にて有けるが左近尉といふ家老百姓をひたものせぶり取ける百姓どもはあれをなげきていかゝせんとひしめきあへり其内老人申けるはいかに百姓よあたりきつしとても武家とは、るか遊べし御公家の長袖なれば訴へ申て見んとて訴狀をたくみける所へ折ふし一休鉢をひらきに出給ふ百姓ども一休を請じこの訴狀を御書下されよとたのみければ安事なりいかなる事ぞやとのゐまふにしかく〳〵の事のよし申けれゝ長々しき狀までもあし是をもちて御館へさゝげよとて

よの中は月にむら雲はなに風
近衛どのには左近なりけり

とよみて是をさら〳〵としたゝめつかはされければ村々の百姓かゝる事にて免多くたまはる事思ひもよらずと申ければ一休ひらさら此歌をれみさゝげよと仰られて歸り玉へばせんかたなくこれを御館へさゝげゝればこれ何ものゝよみけるぞと仰出されける百姓申けるゝ薪木の

一休の作にて候と申せばその放者ならでゝかゝる事いゝん人今の世に覺えずと興じ玉ひて多くの免を下されける

さておどけたるはなしおれどもある座頭がよそで山椒にむせたるがおかしさゐういさしたればさかしき男居あいせわたくしそのまねをして見せませうとて手元にありしさんしやうを二三りう口へいれてひとつふたつしわぶきして口をとがらし目を白く黑くなして舌をすゝるうちに此男誠にむせて息を内へばかりして水を〳〵といふさへ息いでそころりとそこへたをれて目を見つめたるに一座にありしはどのもの誠にむせたるとゝ夢さらしらずさてもよくにたり眞に物のまねが上手きような男じやうつりますよいや〳〵とほめて心にあまりながきまねじやとおもふうち炉の中へてけまろびたるにもさだわきよりいまねと思ひたるに炉にてこぶんをやきわまつさへじまんのほうひげけむりとなしたる躰を見て是はまとにむせたるやらんとにはかにみかく〳〵おどろきて水をのませ藥をもちひてよびつけしにやう〳〵の事にて息出まつわたま灰だらけなるを打はらひなどしてさぞやくるしかりつらんと笑止がれば彼男へらず口に何とあせり眞似がねんいりて眞心のくるしさに而目灰にまぶしやたと秀句にし大笑して座をたちました其頃は近邊に此さたばかりをなして笑ひしとなり先此やうなまねはとんといらぬもの今どきの若衆ゝとかくいらざる役者またはものもらひの眞似などをなし給ふ同じ口てんがうならばよみもの切はしでもあそこで一日て、で一

日開て庭訓往來山高さが故に貴方に向て武道勝利を得ざる事子程子のいゝく孔子ゝ大學のいにしへなんどたとへ取集めわけもなふよめどもかやうの口てんがらゝ閑安し扨はうたひでも爰一町で十番ほどうとふぐらゐでも余の口まねよりゝき、よしかりそめにもよい眞似をなそれよと中事也かやうの事ゝ子どものときから親たちが心得てやういひきゝしやりませ先入主人とゆて子どものとき覺たるゝとしよりてもわそれざるものなり

○一休丹波路へおもひき給ふある山里に二三日とうゝ有けり在處のもの、ゆけるゝいかにたびの御僧この郷境に二町ばかり南郷に天台の寺の候が此寺夜るになればすさまじき家なりして色々ふしぎなる事どもあるより我すまんといふ坊主なし其子細ゝ去々年たびの僧たのみおきたるに去方より三年忌の卒都婆をたのまれ此坊主の書たるが其より時ならず火焔もゆる其火の高き事一丈ばかりあり郷内ゝ中に及ばずりん郷二三里の外までも其かくれなしされば其坊主もさま〳〵經多羅尼を修しとむらひしかどもしるしなければいつの頃か此事はづかしくや思ひけん夜ぬけして行方しれず故にこの里の女わらべよるにもなれば恐れて門せどへも出られず其のち或坊主を入置しに是も三日とこらへずして又出られ其よりわれ住せんといふひとりなければおのづからあき寺となりぐちはてんこそ惜う候へ是はいかなる事にてやあらん一休聞給ひてさやうの事はいかはどもあるとも也それゝ別のことにてはあるまじ定て卒都婆の文字の書ちがへしもゑならんそれがし書なをし參らせなゞ別の義あるまじさらば同道中さんとてくだんの寺に行見給へゞ法華經要品ありあんのとく文字一字ちがひありあらため書直し給ふ其文字にいゝく十法佛土中唯有一乘法無二亦無除佛方便說とかきこれを立おかれよかさねて子細とあるまじとて和尚はそれより西國方へこゝろざし給ふ其後は此寺無事になりにけりひとへに和尚を神佛の化現なりといゝぬものなかりけり

○又丹波のそのべより三四町南の在所にかめといふ女あり母一人にゞ有けりその三四軒となりの喜八といへる者の方へ縁付のやくそくありしに或者いかなる意趣やありけんさま〳〵いひきかして契約變がへさせて隣郷よりあるもの、娘をよび入けり此女これを無念におもひて病となり終に死たりしが、の喜八なるもの、かたへ亡靈よをにきたりて恨をのべ喜八の首とひる事たび〳〵にして其恐さかぎりなしさながらかのむかへし女もおそろしくて親里へにげ歸れり喜八が親類此事をなげき神子山ぶしをたのみてさま〳〵祈禱をなすといへどもさらよ止ざりし折から一休園部にましますよしをき、て此よしをねがひしに和尚破地獄の誦をかきてこれを喜八が首わかけぬるべしまた家のうちにはるべしとのたまふを敬のま、になしけれゞ其後ふた、び亡靈きたらざりしとなり

○又讃州三木の郡より二里ばかり奥の山里を修行し給ふに在所のめん〳〵ゆけるゝ修行者にゝ何國より來り給ふ人ゞ此邊ゝ草ふかき山なれば元より佛をくやうする事なければまして御僧などにゝ一鉢の慈悲をほどこそといふ事もかつてしらず誠ゝ今生の罪人といふゝ我々が事な

らんあれ是にしばらく逗留ましませかし一偈一句の道理をもうけ給へり活佛にこそならずともせめて死佛ともならばなどいひて四五日もて、にとゞめ置けり一休申さるゝ是より北にあたり松林の見え候いか成ところにて候や在所のものこたへて御尋なくとも申上たき事にて候あの林につきて御物がたり有抑あの林のうちに古寺ありしかるにむかしより魔化ありて其形何ともしれぬもの三人出よな〳〵おどりくるふいか成法師にても三日と住せずして立のく也此寺古來より由來ある寺にて本尊は一刀三禮春日の作とやらん申傳へし也尤什物もあまたあるよしなれどかの變化こゝてたれか住せんといふものなし御僧貴くましませばあはれ變化をもしりぞけ給ひて此寺に住したまはゞこれにすぎたるよろこびなしとくゝしく語りけるば和尚き、給ひそれこそ一だんの望みなり佛道修行もさやうの寺をとりたて、こゝ末賞と申べけれいづれもたのみ申すはや〳〵肝煎られ給はれとのたまへばいづれも大によろこびてやがて同道し彼寺にとゞまり和尚ひとりを殘して皆々にげかへりし、うるに其夜五更にもなれば聞しにたがわず人音して三人の變化出きたりおどりくるふ一番に出しべけものがうたふをきけば

東野のべづはいとしい事やいつをらくともおもひもせいでせはねはそんじわし
うちをりて終にゝのべのつちとあるゝ〳〵

又二番目の化もの、うたに

西竹林のけい三ぞくゝあるかひもおきかたわにうまれ人のなさけを得からひらで
竹のはやしにひとりぬる〳〵

又三番目の化もの、歌に

南池の鯉魚はつめたい身やな水を家ともじきともそれべいつもぬれ〳〵ひや〳〵
と〳〵

とうたひ、たものおどりける一休一々合点したまひ何さまきやつらをしりぞけん事やすかるべしと思ひてさて夜を明し所の人々をよびよせ變化のやうをかたり先一べんに東野のべづといひじと是より東の野原に馬れされかうべなるべし又二番は西のやぶのうちに三足のにくとりあるべし三番ゝこれより南のかたに池ありて其うちに鯉すむべしこれを取集め給へとの給ふはどに人々ふしぎにおもひそれ〴〵さがし求むるに其ものみな〳〵ありしかば一休其品と葬りて讀經し玉ひしかば夫よりかつて怪しき事なく一休すないちしかるべき僧を住持せしめ和尚はおは〳〵奥へと心ざし玉ふよつて今にいたるまで一休をはつ者といいぬものぞなき

さて今ばんの要義は妄語戒のあらまし講談いたしやさんさて妄語といみだりにかたるとよみてうそつく事といましめたまふあり經にいく妄語の罪衆生として地獄畜生がきに墮してくるしみをうくたまへ〳〵人間に生るきべ二種の果報を得る一には多誹謗せられ二ッにいつも常に他人のざめにたぶらかさるとあり此心はうそをつきたるものゝ地獄におち又餓鬼道に

おちはてゝ畜生ようまる其あひだ十年あらず三十年ならず百年二百年ならず何千何万年といふ限りあら間此三悪道をへめぐりそれよりやう〳〵出てたま〳〵此世にて念佛の聲經をよむ事をちよつと耳にふれさる功徳によつて人間道にうまれきてうれしやと思へば今の二種の因果とゝ誹謗せらるといふて誹もそしるとよみ謗もそしるといふ字にて人ゐひたものそしらるゝむくひを得二ッに多く人のためにたぶらかさるゝと切てはの盗人めに何れかれとだまされかどわかされて手に持たるものも人にとられ當分我が身のよき事と思ひて談合にのる程の事皆かたりにあふて損をする又しても身躰を持そこなひてゝあはれ手に取事も大はづになりつゐに身をくづして路頭ふたゞずむ身となるを多人のためにたぶらかさるゝとゝ説玉ふなり何れもこれを聞たまへうそを付て當分人をさぶらすとゝおもへどもむくひが皆おのが身にむくふてあたまのゐがるとのないはみな大きなうそをつく故に物を埒があかぬ事なりかりそめにもいつはりをいゝぬやうにし玉ふがたしなみ是に付て商をおしやる衆のふしんがござるうそをついて當分後生がわるからふなら私どもは得うかみますまひとあるによりそをゝ又なせにと、へばされば商ひをいたそからいたとへ五十目いたす物も六十目とも七十目とも中わはうらしい田舎男があれば此男をぬかをはぬくものゝ有まひと思ふて十匁のものを一貫目とい、かけて九百目はどに直を付ても未ふそくらしきかはをわざとして恩にかけてまけるふりをいたし扱同じ都同國同いなかの内にても商の功者の行程此やうなうそをつく故に又其外人のしらぬ内證算用あひの所でもわれながら是はかいて出るはどなうそじやがぜひんじながらすぎはひの事なればヤさねば埒あかじさて今晩のやうなる安語のいましめをうけ玉ゝれば こわいすさまじい罪を得ますなれば これゝ何とも了簡にあたひませぬがどふぞこゝをば談合なされ下さりませなんだかといふ人がござる此ふしんにもなふて叶ゝぬ律義ないひぶんで侍る此うそが罪ゐなるかならぬかのせんさくは明晩いたして聞せませう

○さて又讃州ゐ柳原兵内とヤ武士あり久々わづらふて醫術を尽そといへどもさらに其しるしなし殊に重病なれば最期近づきぬ折ふし一休鄕内にましまそよし其かくれなく内々殊勝なる御坊のよしき、及ばれいそぎつかひを以て此度りんじうの一大事をもきかせ玉ひてすぐなる道へ引入たまゝゝ有がたかるべしとヤつかゝしける一休聞しめしそれこそ易き御事なりとて其ま、つかひとつれて參らる、和尚とりつくらふ事もなくやぶれ衣にやぶれ紙子の所々ゝのりはなれさおがらとびの身ぶるひしたる風情もこれよりまだましならんといへる風体にて病人の間近くより給ふ家内の人ども日頃き、およびし僧なれば何さま成佛安心至極のむねを聞べきと我も〳〵と次の間につめかけかうべをかたぶけ耳をすましてきく所に一休おにとなく病人の耳に口をあて、大音あて曰ふは

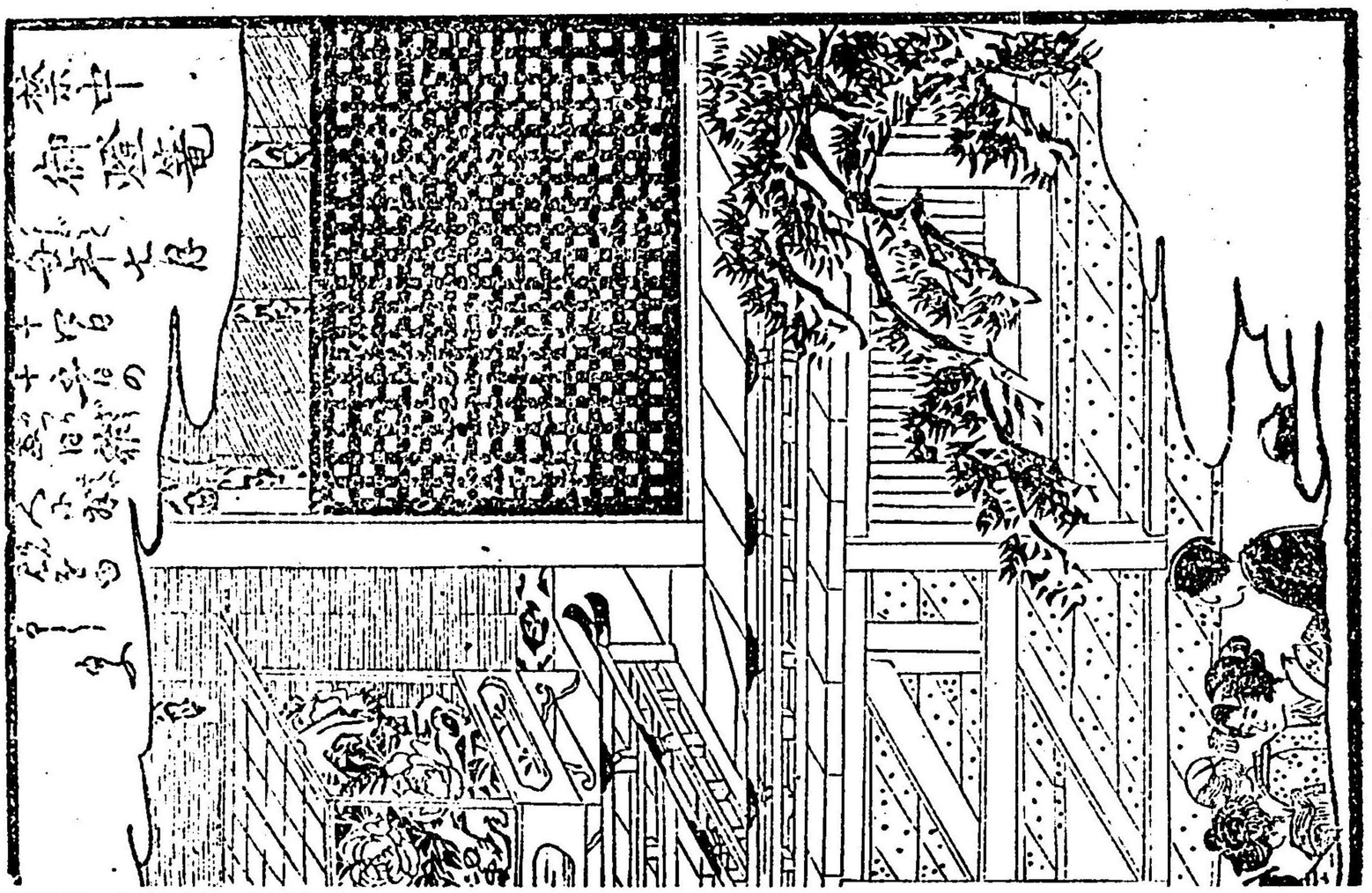
汝すでに末期や我も行人もゆく只これ一生は如夢幻

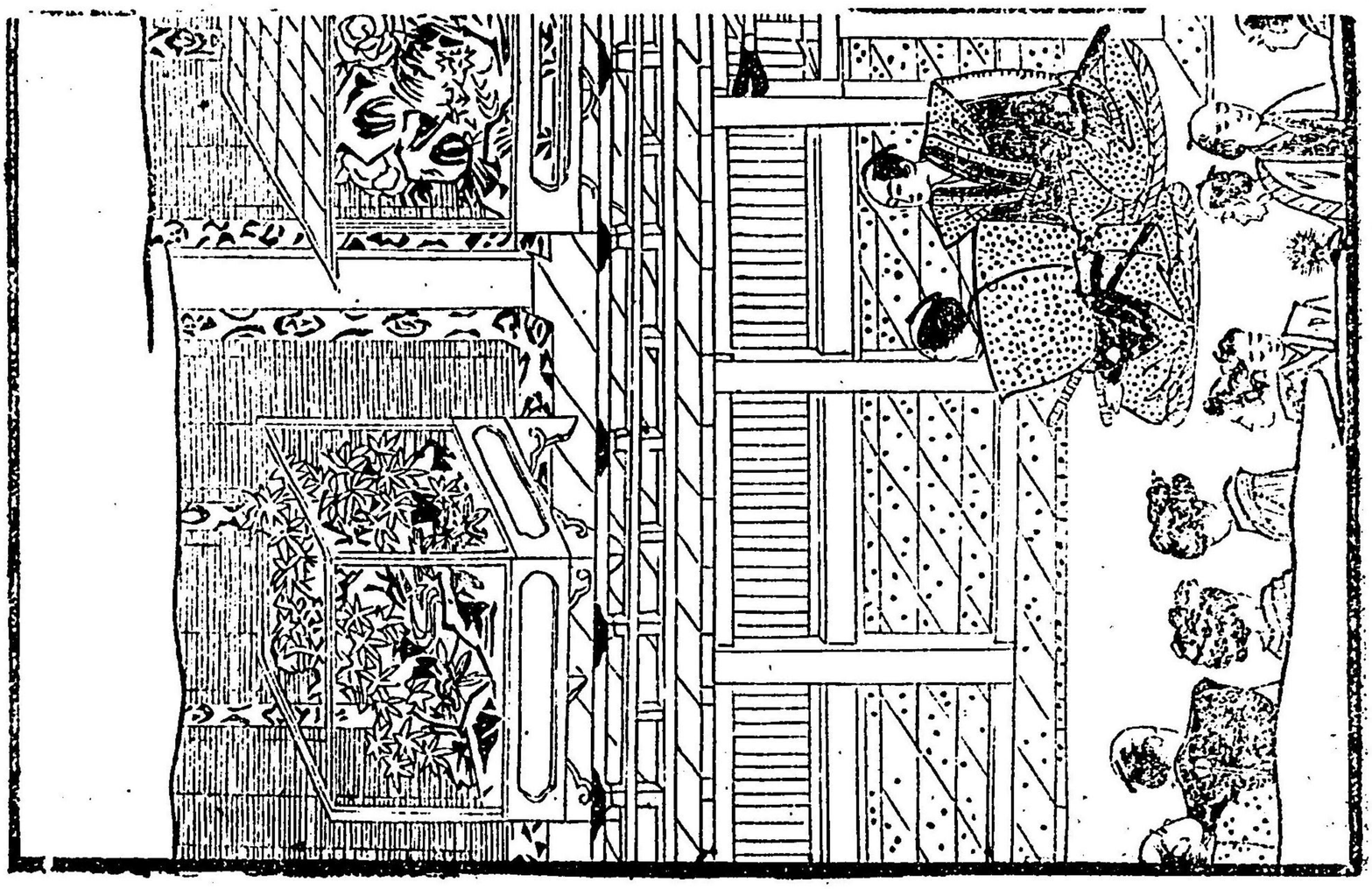
とかくいひすて、かへりたまふ何れも勝手には一門家の子あつまり偖も〳〵めづらしからぬ一休坊主のすゝめかな夫りん終をすゝむるといふ耶と成佛かんじんをいひきかせて心安くかはらするをこそりんじうの一大事をこゝひるといふものなるにかゝる語ハ坊主のいふ迄もなく皆がんせんに人をにいふ事なりさても一狂の坊主かなと口々にヤあへりかゝる處へある出家きたり此上しをき、いや〳〵それハ何れもの不合点なり一休はどこそいへかやうの語こそいかにも殊勝におぼへ候惣じて禪宗悟道の坊主などといふものハ余宗などのやうにあるひハ念佛題目をとなへ尊ひところへ御參りやれありがたき事のおハそるなど、いふ事ハ禪宗おんどいヤさぬ也いかにも〳〵右のすゝめしもしやうやとヤければいづれもはじめてさもこそと得とくなし皆一同にかんじけるさて御内に恩を深くかうむりたるものども御さいごの願死の面々たれ〳〵なるぞと其用意とり〳〵にひしめきけるを一休はのかにき、玉ひて其夜門前に一首の狂歌をたてられける

世の中に生死の道につれはなし
たゞさびしくも獨死獨來

明れば御内のものこれを見付てさつそく老士へもち出て何れもうちよりいかなるもの、立つらんとせんぎ去ける折から又かの僧ヤさる、はこの作者別人ならず一休禪師に必定せり實尤の狂歌かな此うたハみな人とひとり來てひとり死そる身なればたとへ誰かれ冥途の供をすれはとて御にはなるべけんや五十人百人殉死するとも自業自得過なれば〳〵めん〳〵の罪障により百人が百所へわかれ行て主人に付從ひ行ものにあらずされば若者ともを殉死なさせんを欲さて此歌を立られたるならん今殉死せん命をまつて世繼の君と守護おし玉ハんこそ御家長久ならんと埋を尽してヤされけれゞみな此斷に同じ心、かさねて殉死のさたハなかりけりされば死するに定りたる面々ハ一休を活佛と尊みしは斷りせめて道理なり

○爰に一休津の國の山里を通り玉ふに二人の山かつ有一人ハ伏倒てあり今一人、畑とうつ父子なりよりて見玉ふにむすこ毒蛇のためにさゝれて俄に死たり父なげくけしきもなく一休にむかつて淵房そのおハする道のほとりに小家有これ我等の内なりそれよりめしを持さたるべし只今息子は俄に死したりさすれば一人の食ばかりもちて來れとヤてたべといふ一休ちかくより玉ひてそれ父子の別はかなしかるべきがいかなれば汝はなげきの色なきぞと、ひ玉へば男あたへていわく親子鳥夜林明方々如飛去とこたふ此意は親子のちぎりは鳥のよるはやしにより合て夜あけては刀々へとびさるがをくわづかのちぎりの間なれゞなげく事なしといふ心也一休それよりおしへの家に行くだんの通りを女房につぶさにかたらるゝ扨ハとて二人のこしらへ置し食物を一人分さしおき只一人のゞかり持て出る一休とひ玉ふは其死たるとなんぢが爲にはいかにと、はれけれゞわらはがためふは夫なりとヤて少もなげく氣色なし一休仰げるはそれ世の中ふ死るといへゞ他人の身としてさへあはれをもよふすにまして夫ならゞかなし





かるべし殊に女性は、かなさものなればいかゝあるべしと、ひたまへは女こたへていはく夫婦契市人行合要事過方々如散とこたへて行過けりこの意は夫婦のちぎりは市により合てようをと、れへをはれはめん〳〵方々へちるがとしながらへそふべきものにあらずといと心あり一休もふしぎの思ひをなしてさてもかやうなる山家にかゝる生死無常のことはりをよくあきらめたる男女もありけるよと感じ玉ふ

さて前夜おやくそくやた先うそといふにさま〴〵ござる其品々からやそろへて一々道理をもつて丁簡いたそかへす〴〵此所をきくほど万事に通ずるかんもんのところくどけれども心をしづめてき、玉へをの〳〵の徳に成て永々の苦をぬける善根耳のあかをとつて、うもんわれ先釋迦如來世に出玉ひて一切衆生に法をとひて聞しめ玉ふ惣じて説法の義式で先禪定に入て今は何をといて聞せたものであらふと分別なさるに如來の御心よは手みじかゝ三界唯一心の道理をせひて聞せんと思し召れてはじめに花嚴經といふ頓大のおしえをとひて辟聞緣覺に説きかさしめたまひけれ共としつんぼれとく一さい合点せずそこで佛のおもひ玉ふは眞實のむねをとひて聞しめては結句衆生等が合点行ずさらば氣に入やうゝ何ぞ方便をとひて佛のこゝろには思しめさねども先當分の氣に合して何成ともつべ〳〵と口にまかせてはしぢかなる事を取付て無事を有と説ある事を無事と説て見たりまさあるでもなしあいでもなしとゝきひかしの物がたり今のはなしのやうゝ作りなして五十年の間御ときなされた今時の人もさかしき評判にもいかに佛の御ときなされたとても是はあまりなうそをつかせ玉ふといふ人もありうそにさま〴〵ありといふがて、じや先佛のうそとは今のやうに人機ゝ合せてとにも角にも衆生の爲の事によかれかし佛になれかしよき心がおこれかしと善根す、めの爲に御ときなされたうそといひながら其うその御かげによりて三界の火宅を出るはしとなり生死のうみをわたる舟となりてつゐに極樂や寂光土や實報土あどいふけつこうなる世界へ生て苦をまぬがれて樂を得る爲のうそなれば先是はけつこうあうそでは侍らずや然に世の中のうそといへば人をたぶらかしてなりともかたりてあり共ゝのれがためのよきべかり心よかけて先さまの身体がつふれうともくびときられうともかまはず他の害になる事はかへり見ず其もの、きのつかぬやうにうそをつきてたらずを世界のうそといふものなりうそといふ名は同事でいかふ心持のたがふ事は天地黒白のさうゐが有こゝと分別して見れば佛は人のよくなるやうにうそを説おぬしの身ゝかゝはらず又ぼんふのうそい己を立んとて人をたぶかすとのちがひが有は格別のせんさくさて商人のうそには先かけ直の事たゝし是は何を買者も見せにさちよるから覺悟して定て商人のくせかけ直をいふて有ふはどにこちらからもよいかげんに直ぎるべしとたがひに合点づくなれば先にも少し合点しぬかる事でおし然ば是はかけ直と知りながらのトなれば世中のうそのやうにだましたぶらかすとはちがふて有世のうそは之をしらせぬやうつくなりまたある所の見世には合点づく

の上なれバこそかけ直なしそら直なしと書付しておくどころもあり其外はかけねがあるに極るうへは少しもうそといふ物でないはどにかまへてうそとおもいもとも臨分とかけねいふて利をゑるがゝんやうなりなんぼ正直に商しても利がなければ妻子をはごくむ事ならず或ひは旦那に損かけ拂ふべき所へもはらはぞとなるがそれが結句大うそとなり大なる罪とおりて人のうらみをくる事もくせんも也かくやてもみす〳〵生馬の目をくぢるやうな事い余りなれバかけ直といふはどはめんし〳〵商ひする人のこゝろもちにあるべきを也とに出家沙門など高利をとれバ珠數のみとてそのまゝかへりて其家滅す此わかきくらきを思案して渡世のための事なれば未來の事はきづかひあし物じてがいにならぬ事なり人の爲になる事嬉しがる事おかしがる事面白き事心のやわらぐ事は少しも罪みにならぬはどおとかく惡ひうそをつかせらるゝなどのいましめでござるまた武士などにい謀計などゝや事あり是は又別義でござるがこれは追ておはなしやまませう

○一休和豆の國にてある山人猿を一疋とらへ柱にしばり付なさけなくもうちたゝきそでに打殺さんとすべきところへ和尚行あわせふびんにおもひ乞取てはなしやりたまふ折から夏の頃なりしが或夕ぐをふくだんの猿いちどといへるものをふきの葉に包みもち來り一休へさし出しける一休かわゆく思しめし布袋ゑ豆を入てとらせらるればとりて歸りかさねて又其袋に栗を入てきたりみぎのとく和尚にさし出してかへりけるとなり畜生といへども命を助けられし恩のほどをよくしれり然バ人間の身として是非のわうちを知らぬいさるにもおとれりとかんじ玉ひ此事を旦那がたにてかたりたまふすこしもいつわりのなきをなりけり

○又其ころ猶右衛門といへる百姓あり常に百姓の業をなさず殺生をこのみ大酒博奕はいふに及バず其外わるき事のこりなく大いたづらなるもの有常々猿をかひ置ける然るに猶助といふ一子あり嫁をむかへしのち懐妊にて七ヶ月といへる頃右飼おける猿何やらんすこしいたづら致しけるとて猶右衛門大にいかり猿ゑ柱くゝり付七八日も食をあたへずせめけれバ終にい飢死なしけりかくて此嫁十月と滿て出産する處の女子目つき面つき猿のとくにして全身しかも五六分はど毛生てさながら猿のとき小見ありこれ全く親の邪見孫ゑむくふ處にして和尚まのあたり見玉ひしその物がたりかそるべし

○一休初發心のとき越後路へ修行に下りたまふ信濃上野のさかひ近きところに湯澤といへるところにてもや日の西山にかたむくゆゑ宿をこひ玉ふに在所のものゝやう御房宿を求め玉ふならバむかふに見ゆる山中に古き堂ありこれへ行一夜を明し玉へさりながらかの堂には天狗住よしいひて住持するものあ久しき空院なりそれ心して行玉へ和尚それこそ望む處なりとてやがて行て見玉ふに此邊すべて山多くして陸奥の方へ峯つゞきにて駒ケ岳坂戸山清水白峯松ケ岳などゝていづれも高山ありて物すごき土地なり和尚かの堂へ行て佛だんの上にあがり隱形の印をむすび心をしづめておはしけるところに夜半のころうへの山より人ならバ二三十

ばらく足を留め玉へとて少しの滯留ありしより近村の凡俗を集め寺僧の法談などし玉ふと助講などありし折から隣り村に村山といふに喜兵衛とて大百姓あり常ゐ隙なる身なれば殺生のみ樂みとせしが庭先の柿木に鳩二羽來りとまり志を得たりと鉄炮とり出したちまち一羽をうちおとしけるに一羽の鳩おどろき飛去りしがまた元の枝へきたりとまりしを又も玉をこめかへ同じく打落せしがふと一休和尚の法談を思ひいだして鳩に三枝の禮ありと聞しがまさしく此鳩はつがひのはとにして雌をさきへうちしや雄を先へ取し事や殘りし鳥の元の枝へ來りしは死を共にせんと我が玉さきを待し事うたがひなし扨々鳥だにも夫婦の約あるものとまれに人間とうまれながら殺生をこのみ是さであまたもの、命をとるを樂しみと心得し業因のはどこそおそろしやとたちまち發心して一休のもとへはしり行若きよりの我があやまりをざんげして御かみそりをさづけさせたまへとて其座にて剃髮染衣の身となり全證居士と法號をうけ明くれ念佛三昧に入八十有余の年齢をたもち子孫榮へけるとなり其とき法名を下さるゝとて

こゝろよりくひにかけたる傀儡師
鬼をたさふと佛出さふと

○さても因みに御はなしやさふ鳩といふ鳥ゐくれゐおよべば親子ひとつ木に宿をなし親鳥のとまりたる枝方三枝下なる枝ならでゐ子鳥ゐ宿らず又烏よ反哺の孝ありといふ事もありこれゐ生てより百日が間は親鳥にやしなゐれ百日にみつれば親と同じ形となり巣をはなれ餌をひろふなり其後百日が間親鳥へ餌をく、めかへす鳥なりよつて昔より古人の文にも出たるぞかし鳥にさへケ樣の禮孝あり人間とうまれて忠孝のふたつは大切よつとひべきの第一なりやゝもすれば不孝不忠のもの出來るを神も佛もかなしみ玉ふて鳥にさへおとるぞと示し玉ふはどゐ鳥にをとり玉ふな形こそ人に似たりとも人といいひがたき必ずわすれ玉ふな古歌に

父母につかふわふぎのかゐめから
しだい〳〵にそゐ廣ふなる

何事もおやの心にかのへさる
これかうしんの人といふなり

○越前の府中に長野銀助とて馬上の名人あり一休禍井より上り此府中に二三日とうりうして萬をとり行ひ玉ふに彼銀助き、および御齊も上申たしとて和尚をむかへ御齊もすぎて四方山のものがたりのころさる方よりはね馬を曳てきたり御六かしながら此馬を只今一馬塲せめて玉へれとヤにやすき事なりとてやがて馬引よせのられしが此銀助と申は元來せんきの病よて陰嚢大ふ腫たりけるが鞍の前輪よつかへて事のほかのりにくきやうすと一休見ておかしくおもひ

はね馬のまへわにかゝる大ふぐり
きんくんりんとこれをいふちん

人斗の音してさゝめきわたり來る一休すはやと思ひ見給ふ所に堂のうちへひらがり入を見れば色白きゝにげなる法師を手でしにかきのせて小法師はら二三十人前後とかこみて來りしが此法師小はふしばらと庭にをひ出してなんぢらはあれにて遊び候へといふかしてまつてばら〳〵と外ゝ出て遊ぶときに此僧一休を見てそれにゝくれ居いふ御房これへ出られいへといふ一休さては見付られたりと思ひて何の用にいやとやさるゝいや御房の隱形の印のむすびやうのあしくゆゑ見へやあり是へおいしませおしへやさんさらば物見玉へ所詮なきやつばらに見せやさしとおひ出したり先印むすびて見たまへさらばとて一休むすびたまへはよし〳〵只今は見へたまはぬぞといふてそのゝちも主從ともにうちまじわりて舞あそびわかつきがたに奥山へかへりけり

さて武士の謀計とやはうそにゝたれども左にはあらざる道理をおはなしやさんゝ侍いとさらうそとつくは盗人と同じ卑氣なれども敵をうつに謀計と智客とていろ〳〵はかりごとがあつて隨分色を見とられずたばかつてうつ法なり討負せると其うそもへに大國を納め名を上手がらものとよばれて官錄にすゝむ見事なものなりてうど商人のかけねをいひても内をまもり外にむかつて損をかけぬは手がらと名付捨れたる家をもたて人をそくふゝかへつて善根となり商人にも色いろありて已一人よくならんと利德を心にかけて人の損失をかまはず前へとり込む分別ばかりするものゝ一旦の依怙ありといへども終には日月の御罰をかうむるものゝ証宣をわすれずわれも仕合なし人をもよくなし平等に世をわたるべしと心がけたるかよし人に損かけて已が仕合をするゝいろ品こそかはれ二桝二秤をつかふも同じ罪なれば商の内にもこれらの事ゝせぬ事なり是ゝ人にしらせず目をくらますもへ買ものもしらずかけねは合点つくなれゝ人もしりてねぎる也かくすと明すとあらわれて有とのちがひにて罪にならぬといふ事明白なりさわこれでゆふしんがはれてござらふ

○一休蜀東心外寺にしばらくおいせしが此住持もそのかみ同學なればむかしのよしみを思ひ種々馳走しさまふあるとき一休とせんのあまり客殿に出て四方をながめておゝする折から地侍と覺しき人供人四五人つれ來りて一休にむかひいかに御坊此寺の寺號山號はなにとやゞ一休こたへて山號ゝ別法山寺號ゝ心外寺と申當職ゝいかなる御方にてましやけゞ某は矢奈木雪折とて此邊近き在所もの也此寺をかねく承りおよびしまゝに參詣やなりしかるにめづらしき寺號山號なりそれ三界唯一心心外無別法にして心の外ゝ法なしいか成をか是別法心外寺とたづぬるに一休とりあへず答へていわくそれ柳ハ枝と雪折なしいか成か雪折とこたへ玉へば此侍大ゝかんじさても〳〵答話かしこき坊主かな我等は内々たくみてさへさしわたれば失念する事ゝり又はかつて出ざる事多しそく時にかやうのへんとうせられし事あつばれの御坊かなとぞかんじける

○又御雪水のころ駿州富士郡大石寺に知音の僧おはすとてたづね玉ふに互になつかしう思召し